
バカとテストと前世魔王と

BALSEN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと前世魔王と

【NZコード】

N2976W

【作者名】

BALSEN

【あらすじ】

前世が魔王な人…………？人でいいや。とにかく人がバカテスの世界でのんびりと生きる。

たまにはつちやけたり暴走しながら彼？彼女はFクラスで頑張って生きてます。だいたいコメディです。

1・1 Fクラスに加入した理由（前書き）

最初に投稿した小説から大分時間がたち、久々の投稿。
この作品はTS・性転換・転生要素があるのでそういうのが苦手な
人は回れ右をお願いします。

1・1 Fクラスに加入した理由

場に緊張感が流れる。

手に持つた5枚のカードで相手を挑発するかのようにひらひらと前後に振る。

既に顔が汗で酷いことになっている対戦相手は真っ青になりながらそのカードに釘付けになる。

「レイズ」

「ま、まだ上がるだと…？」

周囲の観客からどよめきが走り、対戦相手の震えがさりて酷くなる。クスリと小さく晒えればさらに怯えは隠し切れなくなる。

「ふふふ……それでどうするんですか？ 応じますか？ ありますか？」

対して自分の顔はまったく変わらず笑みを浮かべているだろう。分かりきっている結末に動搖したりはしないのだ。

「も、もう勘弁してくれ…！」

「ふふ」

「ひい…？」

お馬鹿さんですね、そつ言いたげに微笑むも相手には理解されなかつたらしい。

ふと椅子の周囲に倒れふしている男達の強面を見る。

「なかなかいい顔をしている、そう思いませんか？」

「な、なななな何をだ！？」

「がつ！」

動搖への返答は椅子の傍で既に氣絶している田漢への蹴り。それにさらには怯えを強くした相手は小さく悲鳴をあげて椅子から転げ落ちる。

手にもつたカードを落とさないのはプロである彼の最後の抵抗だろう。

「さて、結果は分かりきったので答え合わせとこきましょつか？」

「答え合わせ……だと？」

「はい。私がこのカジノに田をつけたのは……まあ単に田についたからです。特に理由はありません」

そんな理由で、そう呟く彼はきっと極上に運が悪かったのだらう。

「連日連夜通い詰め、毎口大金をかけながらも少しづつ負ける人物。当然あなた方も既に理解していると思いますが、私は力モを装つていたのですよ」

「…………」

「そして『偶然』仲の良くなつたバーテンダーのお姉さんに帰国の方程を話し、カジノに来る最後の日を伝えます。

『偶然』それを知ったあなた方が最後に私から掛け金をむしりと
うつとするんです。ふふふ……偶然つて怖いですね?』

その場にいる誰もが理解した。
ああ、こいつ性悪だな。

「そしてあとは簡単です。最初のほうは小額で負け通し、私は最後
だからという弦まで高いレートの台へと向かいました。

もちろんその台にイカサマが仕込んであつたのは見抜いてました
し、簡単に阻止できるだけの実力もありましたから」

そして、と言つてから私はそのカードを公開する。

「クイーンのフォーカード。望みさえすれば常にクイーンは私の下
に集まるのですよ?」

ま、非常識ですが最近日本でオカルトを利用した学校があるから非
常識も常識ですよね。

「……そ、それもオカルトだというのか!?」

「ふふ。フルハウス如きで得意げにどんどん値を吊り上げていく貴
方にプロならば絶対に見つける私の動搖のサインを見せれば後は簡
単です。

貴方の敗因はただ一つ……私をウサギだと思い、さらに自分の技
量に自信を持ちすぎました。あれ?一いつですね

私つてば馬鹿ですねえ、と苦笑いをして後ろから青い顔をして見て
いた店員の顔を踏みつける。

まあ降りろとサインを流しているにも関わらず得意げに値を吊り上

げていくティーラーを見て武力に訴えたのが悪い。

え？ サイン？ 当然こいつちは『オカルト』で妨害しましたよ？ フォーカードのほうは我ながら不思議ですが。

「それで、どうします？ 応じますか？ ありますか？」

「ん、んー！ さすがに毎日カジノに通い詰めは疲れちゃいました」

伸びをしてスカートのポケットから携帯電話を取り出す。
時刻は既に午前3時……夜中じゃないですか。

「明日はゆっくり寝ますか」

明らかに違法行為へと手を伸ばしているであろう荒くれ者達の視線を無視して表道へと出るために迷路のような裏道を歩く。
しかしさすが違法カジノ、たんまりお金は溜め込んでいたようだ。
やはりあの辺で手打ちにしておいて正解だったようだ。
あれ以上値を吊り上げていたならば彼らの命に関わってくるので命を狙われていただろう。

別にその程度、前世においてこの世界にはない魔法を習得している私にはあつてないような刺客だが。

ちなみに私には前世といつものが存在する。

何を間違ったのか 間違ったのは性別だが 前世では男なのに女として産まってきた元魔王。

それが私の全てを語るのに相応しい。

幼少の頃はよく「詩織が男の名前で何が悪い！」と近所の子達を殴つて泣かせてたなあ……。

まあそれが両親にバレて淑女としてのスバルタ教育をほどこされ、無事少女になつたわけだが。

今までは少女（笑）だつたからなあ。

「そついえばそろそろクラス振り分け試験があるから帰らないといけませんね」

2年生から転校生として入る文月学園。

妹のクリスも新入生として入学することになる学園だ。

詩織は丁度2年から開始される召喚戦争　そのクラス振り分けの為の試験を受けるよう藤堂カヲルから言われた。

「あんたもFクラスは嫌だろ？」とは藤堂学園長の言である。別に詩織はFクラスだろうとAクラスだろうどどうでもよかつたのだが学園行事なので一応受けよつと思つていた。

思つていた、が。

「あら？……試験、昨日でしたね」

カジノで粘りすぎたらしい。

桜が舞う坂道を登校する詩織は久々の日本に小さく歌を歌いながら

歩いていた。

その後文月学園、藤堂学園長へと連絡してクラス振り分け試験について聞いてみたがやはり再試験はダメらしい。
まあ厳しいところなんだろうと納得し、チャーターしたジョンストで帰ってきた。

時差の関係で多少眠いが平気だろ。

「あー…… そういうばクリスちゃんに連絡してませんね。ふう、また文句を言われます」

ふと妹がふんふんと怒る姿を思い出したため息を吐く。
別に怖くないのだが恐ろしくしつこいのだクリスは。

「お前が詩織＝レッドフィールドか。遅刻だぞ」

校舎へと入ろうとした時にかけられた声のほうへ向くとそこにはいわゆるガチムチ体系のジャージ教師が。
……実践的ないい筋肉ですね。

「わつですよ。これでも急いだんですけどね」

なんせジョットをチャーターしましたし。

「急ぐ急がない以前に試験当面に外国でやつてつしてるのが悪いと言つてるんだ」

仰るとおつです。

「しかし本当にいい筋肉ですね……何か格闘技でもしてるんですか？」

「人の身体をジロジロ見るのは関心せん。まあいい。そういう話はまた今度だ。受け取れ」

箱から取り出して差し出されたのは一枚の封筒。

箱の中身を見れば既に空だったの自分が最後らしい。

「……？なんですかこれ？」

「中の紙にクラスが書かれている」

「事前にFクラスと聞いてるんですけど」

「それでも、だ。文月学園は試験校だからな。こういったシステムはその一環だ」

はあ、そうですか。

そつ氣のない返事を返して丁寧に封筒から中の紙を取り出す。

『シオ＝レッジフィールド……Fクラス』

「当然ですね」

「しかしそ前、なんたって男のフリして転校したんだ？」

「藤堂学園長に聞いてませんか？」

藤堂は研究者なので学園経営者としての才能はなくはないが、凡才だったはず。

しかしそれでも組織における伝達を適等にするほど凡愚ではないは

すだ。

「聞いてはみたんだが、本人に聞けとの一点張りでな」

ふむ、そういうことですか。

「簡単な話ですよ」

「ん?」

「Fクラスって大半が男なんでしょう?なら男として入学したほうが場に溶け込みやすいじゃないですか」

1・1 Fクラスに加入した理由（後書き）

この作品で一々つて今更だよなあ…………まなんかアニメ一期が
出るらしいけど。

ちなみに作者はアニメのほうはまったくみてません。
原作を読んでからアニメみると想像からの劣化が激しくて
…………。

1・2 傍観（前書き）

亀執筆速度ながらもじばりくは一日更新。

といつてもストックあんまりないので期待はできない！

ちなみにバカテスのバカ回答集ですが、主人公が今のところ珍回答するような要素の問題じゃないので出してません。

数学とかはちゃんとした回答だす子なんで・・・。

1・2 傍観

いい筋肉の教師、彼は西村先生とう生活指導の教師らしい。
明らかにこちらの嘘に気付いていたにも関わらず深くつっこんでし
なかつた辺り、空気は読める教師らしい。

前世云々なんていつてもどうせ信じな……西村先生なり信じるかも
しないと詩織は若干思った。

なんにせよ西村先生はよき理解者になつてくれそうである。

「リリがFクラスですか」

.....

「帰つていですかね、これ

設備が悪いと聞いて想像していたようなレベルじゃなかつた。
いつたいいつの時代の貧乏平屋だここの
ピンク色の髪の女の子が教卓に立つてこなことから今は血口紹介を
している感じ。

「はこつー質問ですー！」

「あ、は、はい。なんですか？」

「なんでここでいるんですか？」

めーでーめーでー！

この学園の風貌はどうなってるんですか！？
めー？

おらお前なんでここにいるんじゃワレ、貴様の居場所はロッカーじゃけんのう一つことでしょうか！？

こんな成績的な意味でも風紀的な意味でも世紀末なクラスについて私は本当に大丈夫なのですか！？

「おうシオ。パン買ってこいや」

「わ、わかりました先輩。……」

「どうした」

「え？あの、お金は……？」

「当然お前が払うんだ」

「ま、まじですか？」

「汚い！さすがFクラス汚い！教室も汚いけど心も汚い！」

同じクラスなんだから先輩なんていないだろ！つとかつこんでくれる人物はここにいない。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

「え？」

ああ、なんだ。

私と同じような理由 明らかに違う でFクラスへと身を堕とした少女なのですか。

『そついえば俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力が出しきれなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがと』

……成績と頭の良さは直結しないという私の考えですが、訂正する必要があるかもしれません。

「で、ではっ、一年間よろしくお願ひしますー。」

正直「こんなクラスで大丈夫か?」と脳内で謎の渋い声が響いている。

ふむ

「大丈夫です。問題ありませんっ！」

がらつ、と閉まっていたドアを開けて中に入る。

ドアが開く音にFクラスの人間達の視線が集中した。

「おや、レッドフィールドさんですか。これまた丁度いいですね。
自己紹介お願いします」

おや、Fクラスを纏める教師なのだからどんな屈強な人かと思つたら結構普通に見える。

学園長も何か考えがあつてのことだらうか。

「シオ＝レッドフィールドです。2年から編入という形になります

が、諸事情によりクラス振り分け試験を受けてませんのでFクラスになりました。

今後一年間、よろしくお願ひします」

「ちらそこの男子？」

「ちつ、男か。しかも美少年だと？いらね」とか言つてはいけませんよ？」

「可愛い女の子の転校生」がきたとして、Fクラスに入る理由あります？」
せんよねえ。馬鹿で可愛い女の子なんて、どんだけ希少価値が分かつます？」

「万が一そういうた女子がいたとして、貴方に好意を抱く理由は？」
貴方、容姿は悪くないですが良くもないですよね。

「このクラスで言えば10位つてところですか……しかも見たところこのクラスの女子は二人。そんな貴方に青春の席が回つてくるとでも？」

「れ、レッドフィールドさん？何を言つたんですか？須川君が何故か泣いてるんですが……」

「いえ何も？ただその男に現実を教えてあげただけですよ」

「だいたいにしてそこのピンク娘がこのFクラスに入ってきた」とじたいが奇跡なのだ。

このクラスの男どもはモテなさそうだし、この一年は間違いなく灰色の青春を送ることだらう。

「えつと……この席いいですか？」

「うむ、構わんのじゃ」

適等に空いている席に座り、隣の座席の……男子、ですか？

「あの、男ですか？」

がしつ！

何故かいきなり手をつかまれた。
……やはり女子だったのでしょつか？

「ありがとうなのじやー。やはりワシは男に見えるのじやー。ワシは木下秀吉じや。秀吉で構わぬ」

「えつと、どういたしまして？ シオ＝レッジ＝フィールドです。シオでいいですよ」

「つむ、了解したシオ」

どう見ても魔力基盤が男の形だったので半信半疑だったのだが、合つてたらしい。

この姿は魔力基盤で判断できる自分はともかく他の人物に一眼で見分けろつてのはちよつと難しじだろつ。

……いや、待て何を考えているのです私。

どう見ても男の制服を着てるから男子でしょつか。

どうやら魔力基盤のおかげで正氣は保つていらでますか、性別誤認の呪いでもかかつてるのでしょつかこの方は？

「まあいいですか。ちょっと私寝てますね」

「それに、吉井明久だつている」

シーン、そんな擬音が似合いそうな光景だ。

何故かその言葉に目覚めた詩織は教卓に なんかさつき見たのと微妙に違うけど、なんででしょう？

いるワイルドな男子が言い放った言葉に場の空気が停滞していた。

『誰だよ吉井明久つて』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！折角上がりかけた士氣に翳りが見えてるしー僕は雄一たちとは違つて普通の人間だから、 つてなんで僕を睨むの？
士氣が下がつたのは僕のせいじゃないでしょー！」

な、何事ですか？

「そりゃ。知らないようなら教えてやる。 こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

観察処分者、なんだか不吉な単語ですね。

『……それってバカの代名詞じゃなかつたっけ？』

「ち、違つよちゅうとお茶田な十六歳につけられた愛称で

「やうだ、馬鹿の代名詞だ」

「肯定するなバカ雄二……」

吉井明久、馬鹿つと……メモする必要はありませんね。
ふむふむ、話を聞くに召喚獣に寒態をもたせてそれにファードバッ
ク機能をつけられた人物のことのようですね。
おそらく学園からの褒美というよりは罰なんでしょうね。
何をやつたんでしょうこの吉井とかいう方。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言つべきだよね?」

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはロクラスを征服して
みようと思つ

「うわ、すつこい大胆に無視された!」

……一人を除いてクラス振り分け試験で下位の成績をだしたFクラス
にも関わらず初日に試合戦争を仕掛ける、ですか。
しかも一つ上のEクラスではなくロクラス。

端から見ればアホそのものですね。

これで無策に攻撃を仕掛けるならばアホの証明なのですが……まあ、
ゆっくり見極めさせて頂きましょうか。
しかし雄二ですか。

聞き覚えがありますが、はて?

「皆、この境遇は大いに不満だろ？？」

『当然だ！』

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーーーっ……』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ」

『うおおーーーっ……』

「お、おー……」

ピンクの小さい女の子が小さく握り拳を挙げていた。
ふむ……

「負け犬どもを上手く焚きつけてますね」

冷静に考えれば自分より上のクラスへ十分な準備なしに戦うなど自殺行為もいいところだ。
にも関わらず雄二とやらは上手く周囲の戦意を漲らせている。
……Fクラスがそのようなことすら考え付かないアホだという可能性は否定できないが。

「何か言つたかのシオ」

「いえ、なんでもありません」

秀吉が不思議そうに聞き逃した声を問うがそれを流す。

面と向かって言う気はないが簡単に負け犬が下克上ができるほど世の中はうまくない。

「明久には〇クラスへの宣戦布告の使者になつてもらひ。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告ってたいてい酷い目に遭うよね？」

…………何やら明久という人物が人身御供として差し出されようとしているが、まだ深く関わるべき時期ではないだろう。

1 - 2 傍観（後書き）

一次作品って実はこれが初めてなんだけど、セリフ引っ張つてくるのが面倒だな・・・。
うつ手間が面倒なだけで実際はオリジナルより楽なんだろうけどね。

1 - 3 スパイ? (前書き)

今回Fクラス主要メンバーに認識される回。
ちなみに毎日更新するとかほざいておきながら九月三日は外泊して
ていないのでお休みです。

1・3 スパイ？

明久が「騙されたあつ！」と叫びながらボロボロの姿で駆け込んできたのを確認してから詩織は携帯電話を取り出した。
袋叩きにされている様子から一応宣戦布告には成功したようだ。
ならばあとは雄一……

「雄一？……雄一、ですか」

ひょっとしてあの雄一だろうか。

「秀吉君、雄一君の苗字を教えて欲しいんですけど」

「苗字？坂本じゃが……何か気になることでも？」

「いえ……そうですか。ありがとうございます。坂本雄一……
『あの坊や』ですか」

詩織は坂本雄一と幼少の頃に会ったことがある。

彼の幼馴染である霧島翔子とは今でも連絡を取り合つ仲だったが、まさか雄一と同じクラスになるとは思いもよらなかつた。

というか詩織の知つている雄一は優秀な成績をとつていたので神童と呼ばれていたのだが……いつたい何があつてFクラスにいるのだろうつか。

「ならば予定通り、翔子と連絡を取りますか」

携帯電話から翔子の電話番号を選び、かけようとすると前にふと思つ。とつあえず教室の中じゅあれだから屋上にでも行ってかけようと。

とにかくで教室を出る時にドイツ語でペツトの躰をする時にしか使わないような単語が聞こえたのは気のせいだらうか。

屋上への階段を登つていき、その入り口で雄一が険しい顔で突っ立つていた。

何してるんだあの馬鹿は。
隣で姫路さんが困っているじゃないか。

「雄一、何してるの？」

「しつ！見てみろあれを

「あれ？」

僅かに空いた扉から声が聞こえてくる。
その声を聞き取るよう扉に耳をつけると、高いながらも力強さを感じさせるそれが聞こえてきた。

『ええ。構いませんよ』

あのロングボーテの男子生徒は確か転校生の……

「えっと、塙＝レフイさんだけ」

「お前の脳の容量はどれだけ小さいんだ」

「あの吉井君? シオ=レッドフィールドさんですよ」

「うそ、そのシオ=なんたらさん。
結構線が細いのが印象的だったんだけど、皆なんで屋上に入らない
んだろう。」

「……スパイの疑惑」

「そう考えてみると、ツリーーーが答えてくれた。
なるほど、スパイじゃ いつやって警戒するのも仕方ないね……」

「つてスパイ! ?」

「大きな声を出すな!」

『Fクラスですか? 今は様子見といつたところですね』

「! ?」

『大丈夫ですよ。貴方の思惑通りに進む程度には協力してあげます
よ。浅からぬ縁がありますからね』

「ゆゆゆゆ雄! ?」

「ちい! 振り分け試験を受けていないと、これから学力には期待
していたが、とんだ転校生だな」

「ふむ……そういうふうには見えなかったのじゃが

そつこえれば秀吉だけはシオ君と話してたんだっけ。

「ムツツリーー！」

「（グッ）」

既に用意してこるらしいボイスレコーダーを扉の隙間にに入れているムツツリーー。

「あんたら、何してんの？」

島田さんが類を引き攣らせてその様子を見ていた。
そんなの決まってるじゃないか。

「脅迫の準備だよ」

『Aクラスとの試合戦争は　　もし坂本雄一が馬鹿でなければ、
既に戦い方は決まってるでしょう。
なら翔子ちゃんがやるべきこと、分かつてますね？』

「しょ、翔子だと！？」

突然雄一が席を立ち上がり驚いた表情を浮かべる。

「あの、坂本君？」

傍にいた姫路さんが心配そうに雄一に声をかけるが、聞こえていないのか反応がない。

「確かに……霧島翔子かの」

霧島翔子って……

「霧島さんってAクラスの代表だよねー?あわわわわわ」

「…………確定」

『もし彼が変わつていなければそれも考えたんですが……まだ負け戦の気配が濃厚ですからね。』

何ともいえません。私は基本勝てる勝負しかしません。
…………そうですね。わかりました。また会いましょう!』

『ぐりと唾を飲み込み、シオ君が携帯をポケットの中にしまつ。
そしてシオ君が一言。

「…………こつまで覗いてるんですか?」

『…………』

「『よばれてるよ雄一!』

「馬鹿ー!名前を出すんじゃねえ明久!」

「落ち着くんじゃー一人ともー!」

「…………危険」

「あの、別に決して覗いてたのはやましい気持ちがあるわけじゃなくてですね」

「姫路さん落ち着きなさい。そして吉井は落ち着きなさい。」

「ふべりーー？」

何故か島田さんに殴られた。

「何をするんだ島田さんー？」

「壊れたテレビは殴つたら治るでしょー？」

「僕の頭と電化製品を一緒にするんじやないー。」

まったく失礼な。

「むしろ殴つてるだろ」

「同感じや」

「…………（＼＼＼＼＼）」

「みんななんて嫌いだ！」

「わ、私は吉井君は電化製品よつは賢いと思いますー。」

「姫路さん……貴方は天使だー。」

がじつと姫路さんの両手を掴むと小さな悲鳴をあげて硬直した。

「…………よつは、ほりまつてある意味貶されてくるんじやが……」

「……覗きがバレているといつに何ですか」の騒ぎ。まあいいです。今日の試合戦争、頑張ってくださいね？」

まさか彼らも屋上に来るとは思わなかつた。

詩織は次に雄一達がどう動くかをシミュレートしながら校庭の隅に座りお弁当を取り出す。

「…………」

『飯にピンクのハートマークが書かれていたがスルーする。

「しかしスパイ疑惑ですか」

彼らは自分達の会話が筒抜けだとは思つていなかつたようだが、詩織には筒抜けだつた。

聴力を強化すればあの程度の距離と声、簡単に聞き取れる。もともと今回の試合戦争にはあまり積極的に出る気はなかつた。

「もしクラスに私がスパイであることをばらされれば動きにくくなるし居心地も最悪になりますね。問題ないでしうが」

おそらく雄一はそんなことはしない。

それは私が孤立したら可哀相だとそういう同情ではなく、意味がないからである。

現在Fクラスの士氣というものは雄一の扇動じみた行為によって一時的に上げられたものだ。

そんな中獅子身中の虫と言わんばかりにスパイである私の存在が露見したらどうなるか。

どの程度かは想像できないが間違いなく士気は落ちるだろう。

雄一が賢い人間のままだと過程すればDクラスへ戦争を仕掛ける理由は計略以上に士気を上げるという理由があるはずだ。

戦力が最低のFクラスが勝つにはせめて士気だけでも高くなれば戦略も何もない。

まずは士気をあげ、実績を作り、自分の策に従えば勝てると刷り込まなくてはいけないのだ。

「となれば、やはり静観ですか」

まだ私が女であるという秘密をバラしても大きな反応は得られそうにないので探りは流す感じでいきますか。

Dクラスの攻略が終われば次はBクラスか…………?

Aクラスとともに正面から戦うとは思えないから、おそらく何か変則的な戦い方をするはずだ。

それも両者に同意があつた成立する類の何かが。

一騎打ち?

Fクラスに秘密兵器がいればこの勝負は成り立つのだが、そうなればAクラスが黙つてそれを受けるわけがない。

試召戦争で隠し切るという選択肢も存在するが最低クラスが試召戦争を仕掛けるのにそんな戦力を遊ばせておく余裕はないはず。

となれば脅しで試召戦争に勝利する?

雄一がそこまで腐っているのならば有効な手段だが翔子にどこまで通じるか分からるのは幼馴染の雄一も承知しているだろう。

「…………」

それが駄目なら代表である翔子をどこかに呼び出して袋叩きにする?

試合戦争にそんな迂闊な行動を雄一に惚れている翔子ならともかくAクラスの周囲が許さないはず。

そもそも翔子はそこまで馬鹿じやないし、Fクラスの実力じや学年最強に束になつても敵うはずがない。

「…………まさに無理難題ですね。まあ期待してますよ……雄一君」

1・3 スパイ？（後書き）

基本詩織の行動とかの理由とか考察を自分なりに書いてみた。

他の作者の批判をする気はなかつたけど、それに類似したことを書いてしまつてることを自覚しているので基本スルーでもオケです。大前提として自分は理屈やじやないのでご都合主義は嫌いじゃないということを覚えておいてもらえば幸いです。

他の方のバカテス小説読んだと負けたらさうに設備が悪くなる（Fクラスメンバーという最下位勢力という悪条件の上で）のに最初から召喚戦争に乗り気だつたり過去の明久雄一喧嘩事件での出会いという下地があつて親しい原作の男メンバー達と何の脈絡もなく仲良くなつたりしてるんですね。

まあ彼らは人が良いのですぐに仲良くなれる素質はあるんですが、それなりの理由か事件は必要だと思うんですよ。

それにバカテス知つてる知識あり転生者ならともかく、何故か点数が高い知識なし転生者がFクラスに加入して何の文句もなくたかだかFクラスの代表である雄一に従う理由つてあんまないと思います。馬鹿じやない限り、ですが。

無双できるなら雄一に従う理由がないし、無双できないならそもそも雄一に従つてAクラス打倒なんて夢を見るはずがない。

そもそもそんなに学力高いなら試験高よりもつとレベルの高い高校にいけよ……ゲフングエフン。

特にAクラスの霧島翔子すら圧倒できる点数とか厨二設定だつたらDクラス如き特攻かけるだけで終わりますよね？

普通の人と違うこと書いてる俺格好良いってわけじやないし、リアル思考とか言わないのでそれなりの理由つてのを書いていこうと思

つてます。

ちなみにこう最初からスパイ疑惑かけられる主人公って珍しいんじやないかなと思った。

詩織は試合に負けて勝負に勝つというのなら受け入れますが、勝負に負けるのは大嫌いなので今回の敗戦濃厚の召喚戦争に参加する気がおきません。

実際詩織の考察が一番まつとうで雄一のことを信用していなかつたらAクラスへの宣戦布告つて自殺行為である他ないし、不幸でFクラスに入れられたのに負けたらさらに設備が悪くなるからモチベーション上がるわけないんですよね。

詩織が参加するには召喚戦争に勝つ以外の理由を見つける必要があります。

色々切り貼りしそぎたので後書きの文章滅茶苦茶な自覚ありますよ！

1・4 まだまだ傍観（前書き）

一日空いて更新完了。

今回あんまり進展ありません。

といつか積極的に介入してないので最初のまつは進展殆どないかも。

1・4 まだまだ傍観

先程Fクラスの面々が意氣揚々と出かけていったのが5分前。Fクラスの教室まで聞こえてくるサモンやらサーモンやらの叫び声をBGMにしつつ詩織は本を読んでいた。

タイトルは『ミジンコの怒り』。

ミジンコって怒りとかそういう感情あるの?という疑問の前にミジンコが怒ったところでなあ…………という諦観を思わせた一冊だ。つい気になつて買ってしまつたのだが、面白くなくはない。ただ面白くもないでの、ある意味出オチである。

「レッドフィールド。お前は行かないのか?」

教室に少数の護衛と残っていた坂本雄一。

白々しいですね、できればスパイ疑惑のかかっている私にFクラスの戦力を見せたくないでしょ?」。

「ええ。私が行つたところで戦況に変化はありませんから」

言外に行つたところで戦わないと言いつつ本から田を離さない。

「……一つ聞きたいんだが」

「どうぞ」

「振り分け試験を受けていないと言つていたが、理由を聞いていいか?」

つまり雄一は本心はどうあれFクラスに来た詩織のことがよくわかつていないので。

スパイをするにしてもFクラスは最弱クラスだ。

本来そのような絡め手をするまでもない相手だし、何よりFクラスに行くことになる人間にメリットがない。

ならば突発的な理由で受けられなかつたのでスパイということをしているのか、そう聞きたいのだ。

もしくは振り分け試験を受けれなかつたというのは建前で、本当はFクラス並の成績であることも否定できないのだが。

「少々外国で遊びすぎまして。気付けば振り分け試験が終わつてたんですよ」

「…………馬鹿か？」

「クラスの設備に興味がなかつただけですよ」

これは事実。

FクラスだろうがAクラスだろうが設備で学校生活がそこまで変わるものではない。

……と思っていたのだが、内心詩織は想像よりだいぶ酷いと思つた。そう過去の自分に嘆いていると雄一が近づいて小声で言つた。

「なぜ、スパイを？」

直球ですね。

そう思うものの、確かにこのタイミングがベストなのだろう。

これから先Aクラスを狙うという発言が戯言でないのならばスパイという存在は邪魔になつてくる。

地力で低いFクラスがAクラスに勝つために絶対必要なのが正攻法

ではない搦め手。

搦め手は相手に知られればそれだけで敗北の原因となり、さらに力量差があればそれが如実に出てくる。

ならばこそ今こそ詩織の真意を確かめたいところのが雄一の考え方だ。

「はて、何のことでしょう？」

以上の理由から例え詩織がとぼけようとしてもその追及は止む事はないだろうが、ついとぼけてしまう。

「屋上での会話は既にボイスレコーダーでとつてある。バラされたくなければ言う事を聞くんだな」

やはりしつきたか。

いや、雄一に取れる行動はもはやそれしかない。

「分かつてるんですか？今Fクラスは薄氷の上を渡つてているようなものです。そんな中私の存在の露見は貴方の望むところではないのでは？」

雄一が苦虫を噛んだような顔をする辺り、考察は少なからず間違つていなじみだった。

「もし私がスパイであるなりばどっちでも構わないんです。Fクラスが自滅するもよし。情報に価値が出るもよしです」

「……ちつ」

「……と言いたいところですが

「ああ？」

「私はスパイではありませんよ。今のところ申告ですが、それだけは保証しますわ」

そう言い放つと疑わしい目で見ていた雄一は何かを考えるよつな素振りを見せた後、紙に何かを書いて男子に渡す。

「横田、これを明久に言つて來い」

「わかりました」

ムツツリーーと呼ばれていた少年のように若干忍者っぽい少年が教室から出て行く。

Fクラスを出て右手にすぐある渡り廊下で戦っているんだろうが、近いとはいえた代表が出るわけにはいかない。

だから伝令を使つたんだろうが、正直無駄だなど詩織は思った。というか

「雄一君? 貴方の学力はどれくらいなんですか?」

「なんだいきなり」

「いえ、Aクラスを破ると言つてるわりには正面突破なんて上位クラスに挑むにしては似合わないことをしているなと思いまして。貴方が愚鈍でなければ何か隠し玉があると考えていいのでは?」

何度も言つようだがFクラスは最下位で、地力は上位クラスと比べるまでもなく劣っている。

そんな劣っている戦力で時間稼ぎとはいえ正面から策もなしに戦うというのは愚かというほかない。

確かに時間稼ぎは出来るのだが相手より確実に戦力の低下が早いので次に繋がらないのだ。

試合戦争に勝つための条件は相手クラスの代表を討ち取ること。その時になつて戦力が足りませんでしたでは意味がないのだ。

「相手は曲がりなりにも上位クラスです。普通なら放課後の混雑する時間を狙つて奇襲するのが定石です。

ですが、私はFクラスの戦力を把握してませんがその作戦には圧倒的に足りない要素があります」

「言つてみろ」

「文字通り、切り札です。例え相手の代表がDクラスどころかAクラス並の学力を持つていたとしても撃破できる切り札。

そもそもそれがなければAクラスへの勝率はどんな手を使つたとしても1%を切りますよね？」

「否定しないが、肯定する理由もないな

でしょうね。

そう返してクラスの隅で補充試験をしているピンク髪を見る。

確かに彼女は「なんでここにいるんですか?」と言われた子だ。

あの言動から有名人であることは明らかなのだが…………それがどういった面で有名なのか。

成績優秀者であるにも関わらずFクラスにいることがおかしかったから?

ありえるが、根拠がない。

「坂本」

「あ？ なんだ須川」

「吉井が時間稼ぎの為に偽情報を流して欲しいと言っていた。何か良い案はないか？」

「そうだな……こんなのはどうだ？」「

「」によると須川の耳元で何かを囁く。
すると須川も何を聞いたのか吹いた。

「その放送を流したら今日はもう帰つていい。明久の馬鹿が暴走するだろうからな」

「あ、ああ。……まあいいか別に」

何を納得したのかは知らないが教室から小走りで出て行つた須川。雄二が何か成し遂げたかのように満足げに笑つていたが、特に気にしないことにした。

ピンポンパンボーン 連絡致します

はい？ これってさつき出て行つた須川君の声ですよね？

船越先生、船越先生。吉井明久君が体育館裏で待っています。生徒と教師の垣根を超えた、男と女の大事な話があるそうです

……………船越先生ということをよく知りませんが、大丈夫なんでしょうかこれ。

「あの、雄一君？」

「大丈夫だ。明久ならきっと幸せな家庭を作れるさ」

「よ、吉井君は同級生と家庭を作るべきだと思います！」

帰つて来たばかりのピンク髪が何か言つていましたが、あまりつっこむものもあれでしよう。

『皆、吉井隊長の死を無駄にするな！』

『絶対に勝つぞーっ！』

教室の外から聞こえてくる雄叫び。

なんとか士気が上がつていいようだが……いつたいどういう理屈なんだろうか。

といふか死つて何？

1・4 まだまだ傍観（後書き）

今更ですが詩織の容姿はりりなの高町なのは似です。
ちなみにこれは別の詩織の小説のとある小ネタの名残です。
作者はりりなのを一次知識でしか知りませんがね。

1・5 あれ?バカテス??

「明久、よくやつた」

「校内放送、聞こえてた?」

「ああ。バッヂリな」

補充テストを終えたらしい吉井明久が戻ってきた。
詩織の目には明久から修羅の気配がするのだが……いつたい前線で
何があつたのだろう。

「雄一、須川君がどこにいるか知らない?」

須川という人物なら雄一の指示で帰っていたはずだと詩織は思った。
馬鹿が暴走するというのはやはりあの放送に関係するのだろうが……
何で吉井明久はここまで焦っているのだろう。

「ん?先程シオを見なかつたのじゃが、どこにいたのかの?」

今にでも殺人を起しそうな吉井明久だが、まあこいつらはギャグ
補正で大丈夫だろうと思いつを離す。

「コマ次にいけばボロボロになつたはずの服が再生してるとかあり
そつである。

「読書をしていました」

「ほつ……何の本じや?」

「『『ミジンコ』の怒り』という本です」

鞄からデフォルメされたミジンコが手を振り上げているらしい絵が表紙に描かれている本を取り出す。

案の定それを見た秀吉は微妙そうな顔をして聞いた。

「……それ、面白いのかのう?」

「いえ、微妙です」

最後まで読み終えたが特にどんでん返しもなく『ミジンコ』が怒っているだけだった。

いつたい作者は何を考えてこんな小説を書いたのだろうか。

「はつ！」

「はい？」

突如包丁と何かを入れたらしい先が丸くなっている靴下を持った吉井明久が卓袱台を蹴散らしながら掃除用具入れに入つていった。

……えつと？

「秀吉君。彼、何をやつてるんでしょう?」

「……放つておいてあげるのじゃ」

「さて、馬鹿は放つておいて、そろそろ決着をつけるか」

坂本雄一が教室の扉に手をかけたのを皮切りにクラスメイトがそれに教室を出て行く。

「せうじやな。ちうまうと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、
頃合じやかひ」

「…………（「ク」「ク」）」

「おっしゃー。ロクラス代表の首級を獲りに行くぞー。」

『ねつねつ』

坂本雄一もそのまま出て行くのかと思にゃや出口の傍で少々立ち止
まつている。

「どうしたんですか？」

「いや、な」

一ヤリと野性的な笑みを浮かべ、掃除用具入れに向かって

「あー、明久」

「？」

「船越先生が来たつていうのは嘘だ」

そういう残すと坂本雄一は今度こそ教室を出て行つた。

残されたのはやる氣のない詩織と掃除用具入れに何故か入つて
いる吉井明久のみ。

恐る恐る格子から覗かれた明久の両眼と目が合い、そのまま見詰め
合うこと数秒。

「逃がすか、雄一ーいつ！」

掃除用具入れを蹴り開けて包丁と靴下を持ったまま教室から飛び出していった。

これで教室には誰もいなくなつたのだが……

「どうしましょう」

まだまだ坂本雄一が△クラスを獲るに足る人物なのか見極め終えない。

だといふのに坂本雄一の為に戦つといふのはありえないのだが戦いという衝動は確かにある。

「……本当にどうしましょう」

詩織が困つているとFクラスの教室がガラツと開いた。
誰か忘れ物でしそうか。

そう疑問に思い振り向くとそこには見たこともない生徒が。

「代表はないのか」

「あら、Dクラスですか。いい生贊がきましたね」

「は？」

「Fクラス詩織＝レッドフィールド、試験召喚」^{サモン}

「待ち伏せか！？」

突然召喚獣を召喚した詩織に合わせてDクラスの男子生徒は驚きながらも召喚する。

別に待ち伏せなどと意図したわけではないが、これでも戦争という言葉には心惹かれるものがあるのだ。

『Dクラス 笹島圭吾 VS Fクラス 詩織＝レッドフィールド
現代国語 102点 VS 0点』

詩織の点数を見た男子は驚愕にその顔を固ませる。

白いドレスを羽織ったサイドボニーの杖を持った召喚獣……召喚獣というより魔法少女のような出で立ちだ。

対して詩織は一人思考を漏らしつつも考えていた。

「やはり名前の虚偽は不可能ですか。でももう片方の細工は成功したようですね」

「馬鹿な！？ 0点なら召喚獣を出せるわけがない！」

「まあ普通は無理でしょうねえ」

何故詩織が通常ではありえない召喚獣を出して平然としているのか。それは単純に言えば詩織がそういうように弄ったからである。

偶然のオカルトと科学の融合 詩織にとってそのオカルトはまさに子供騙しレベルであつた。

術式が滅茶苦茶だった召喚機能を弄る際にこいつそり自分のコードを潜ませておいた。

それが0点開始召喚。

「ま、まあいい。0点なら一撃で死ぬだろ」

そう良い 笠島圭吾の持つた刀が振り下ろされる。

詩織はすぐさま召喚獣へと意識を集中し、振り下ろされた刀をバッ
クステップで避けた。

しかし避け切れなかつたのか髪が数本が切り裂かれる。

「髪とはいえ、召喚獣の一部には違ないので本来ならここで終了
なんですね」

『Dクラス 笠島圭吾 VS Fクラス 詩織＝レッドフィールド
現代国語 102点 VS 3点』

「なつ……回復だと…？」

「いえ、ちゃんとしたダメージですよ？」

「回復してないじゃないか！？ちつ、召喚システムのバグか？」

ノー、そう詩織は心の中で返答をして杖を前方に構える。

それはまるで何かを打ち出す姿勢のような……

「ディバイン、バスター」

キューンと何かを溜めるような音が鳴り、放たれるは細い桃色の
光線。

それは3点で何ができるという思いと召喚システムのバグだと思つ
ていた 笠島の硬直を狙つた一撃。

倒すには頼りない細い光線はそのまま 笠島の召喚獣の顔に当たり

「ブ拉斯ターシステム、リミジット！ リリース！」

『Dクラス 笠島圭吾 VS Fクラス 詩織＝レッドフィールド
現代国語 102点 VS 103点』

チユピーン

「爆殺！」

「はあああああー!?」

太くなつた光線は召喚獣の顔を吹き飛ばし、あつといつまに笠島圭吾の点数が0になる。

何故こんな意味の分からぬ仕様になつているのか。

それは妹のクリスに「お姉ちゃんは白い魔王に似てるから、召喚獣はこんなのがいいの！それで腕輪の効果は……」というおねだりが理由だ。

あまり召喚獣に執着のなかつた詩織が要望通りの仕様にしたのだが

「ふむ……調整が必要ですね」

やはり妹の要望に完璧に答えるのは無理だつたらしい。だいたい腕輪のスターライトブレイカーとかいう機能、周囲の魔力を吸い取るつてどう再現するんだと。点数を消費して大火力を打ち出すだけならできるのだが、それでは妹の要望に答えていない。どうしようか……そう考えつつ西村先生に補修へと連れて行かれる笠島のことを見送つた。

『「つおおおーつー！」』

初戦闘の割には悪くない結果だったと満足していると外からFクラスの雄叫びが聞こえた。

「どうやら此度のロクラス戦は終わったようですね。なら……坂本雄一が取る次の手はきっと……」

1・5 あれ? バカテス……? (後書き)

詩織の召喚獣が早いのか遅いのかわからんけど出てきました。
前世おかるとが魔法の扱いに最も優れた魔王という設定から通常戦闘では最
強に近い動きをします。

操作技能は明久より遙かに上で、システムを弄ればさらにチートに
できますが詩織はチートとか嫌いなので武器であるレイハさんの扱
い難易度は通常の武器より遙かに高く設定しています。
まあ使いこなせればバインドだのアクセルショーターだのディバイ
ンバスターだの一見何そのチート状態になりますが。

1 - 6 我が家のヒューラルキーは一番下なのです（前書き）

今回バカテス要素から少し離れます

1・6 我が家のヒュラルキーは一番下なのです

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であつて、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

シオ＝レッドフィールドの答え

『忌まわしい属性。あと熱くて痛いの』

教師のコメント

何の体験談なんでしょう？

あれから嬉しそうに帰つて来たFクラスの面々を尻目に詩織は一人帰路を歩いていた。

あの様子から見るに坂本雄一は説得に成功したようだが……聞こえてきた会話から察するに設備交換は行わなかつたらしい。深く考えていなかつたが、今Dクラスの設備を手に入れるのは上策じやなかつたのだろうか。

詩織は敗者は徹底的に倒すという考えを持っているので今回の策は納得できなかつた。

聞くところによると姫路というピンク頭の人物がAクラス並の強さを持つらしいが、それでも単一戦力だ。

今度DクラスがFクラスを侮らずに戦術を練つて戦争を仕掛けてきたならば今度負けるのはFクラスだ。

もしもAクラスと戦争をしてFクラスが勝つたらどうなるか？

「……不味い方向に向かつてますね」

間違いなくAクラスの設備を狙つて負けたDクラスが反旗を翻す。Aクラスの設備を得たFクラス……どのクラスから見ても力モ同然だ。

ならばDクラスには負けてもらって上下関係を教えると共に負け犬として戦争を指を咥えて見させておけばいいのだ。

「少し生温くありませんか雄一君……」

いつたいDクラスどどのような取引をしたのかは知らないがおそらく上位クラスとの戦いで有利に運ばせる為の一助だろう。しかしあまりに強引すぎる。

Aクラス打倒のみならばそれでいいかも知れないが後が続かない。いつたいどういうことだろう。

「まさか設備が目的ではない……？」

ありえる話だ。

自分の力を誇示したいか坂本雄一。

翔子から話は聞いていたがまだ暴れたりないのか。そんなにまでも無力だった自身を否定したいのか。

「調べる必要がありそうですね」

これまでただの翔子の幼馴染と「う」と興味がなかつたから調べなかつた。

しかし試合戦争の目的が設備でないならそれは代表として失格だ。もしこの仮説が正しければ坂本雄一は自分だけの都合で動いている。

「ま、学生だから仕方ありませんけどね」

お金をもらつて代表しているわけでもないのにクラス第一で行動しろなんて人間無理な話である。

しかしそれならば詩織としては雄一の勝手に巻き込まれるわけにはいかないのだが……。

「とりあえずやしめたつての障害は……」

考え方をしている間についた我が家の中を見上げる。

これでもかといふくらいに広い敷地とでかい門 我が妹が待つ実家だ。

両親が仕事で海外に行っているのでいなのは確認しているのだが妹だけは外出を確認していない。

「…………」

心なしか実家から変なプレッシャーを感じる詩織。

長い期間放置してきた妹のクリスに対する引け目故の錯覚なのだが
このプレッシャーに対する術を詩織は持つていなかつた。
数度門の鍵を開けようとして躊躇うこと数分、ついに決心をした詩
織は実家の敷地へと足を踏み入れた。

「あ、お姉ちゃん！やつと帰つて來た！」

豪邸の前に仁王立ちしていたのは詩織の妹、クリス＝レッドフィールド。

「あーーーどつして男の子の制服着てるのー？また子供の頃の病気な
のー？」

「……」

「田を逸らした！？どつしてお姉ちゃんはそんなに男の子の格好し
たがるの？

まさかまた前世が男で魔王だとか言い出せないよね

自身を咎めるクリスの視線に脂汗を浮かばせながら詩織は必死に目
をそらす。

クリスには既に魔法を見せており、前世の話を一通りしたのだがい
つまでたつても認めようとしない。

まるで詩織のほうがおかしくて妄想癖があると言わんばかりに食い
ついてくるのだ。

魔法のこととは信じてくれているが前世のほつは信じてくれないクリ
スに詩織の神経は磨り減るばかりだ。

「ぐ、クリスちゃん！私が留守の間、何がありましたか？」

みえみえな話の逸らし方にクリスは一瞬顔を顰めたが、すぐに溜息を吐いて言った。

「特に何もなかつたよ」

「そうですか。それは何よりです」

「……何よつ？」

「よつーー？」

再びクリスの怒りゲージがグングン伸びていくのを詩織は感じた。いつたい何が失言だつたんだ、魔法すら使用してその解を得ようとするも一向にそれにたどり着けない。

「屋敷に誰もいなくて寂しく過ごしていたのに何より？」

し、しまつたですよ！？

そういう心の中で叫ぶが現実で叫んではいけない。

「ぶ、無事で何よつといつ」とですよ。別にクリスちゃんが一人で良かつたなんていつてませんよ。本当ですよ

必死に言葉を紡ぐがその度にクリスの顔が阿修羅と化していく。

「お姉ちゃんの……」

クリスの手に淡い光が灯り、それが振り上げられる。

幼い頃にせがまれてつっこい教えてしまった付「魔法だ。

「待つてくださいクリスちゃんー？その拳で殴られたらお姉ちゃん
とっても痛いんですよー？」

「馬鹿あああああああああああああ！」

「元やああああああああああ！」

熱くて痛かったその攻撃の余韻、といつか鈍痛をしつかり確認しつ
つ詩織は上半身を起こした。

あの後気絶したらしい詩織は自室に運ばれて寝かされていたようだ。
窓の外を見ると既に暗くなり始めており、もう夜ご飯の時間だ。

「……急いで作らないといけませんね」

よく外出して家にいない詩織がクリスと約束したことの一つ。
詩織が家にいる時は詩織がご飯を作ること。

あの頃は実に簡単な料理しか出来なかつたが、それでもとクリスが
我慢を言つた結果だ。

舌が肥えている我が妹の判定で厳しく批評され、今ではプロ並に上
手に作ることが可能なのが今でも慣れるよつなものじゃない。
だって

「花嫁修業の一環ですからねえ」

誰もいない屋敷を歩き廻りついたキッチンの冷蔵庫を確認しながらの一言。

後で知ったことなのだがあれば母がクリスへ入れ知恵したらしい。そのおかげで一通り家事が出来るようになつたのだが……。

今では男に対する未練は殆どないのだがそれでも花嫁修業にはまだまだ抵抗がある。

学校で男の格好をしていたのもそれに対するさやかな抵抗なのがきつと両親には伝わってすらこないだらう。とこうか伝わっていたならどんなことをしても女の子の制服を着せてくる。

「はあ。下へじらえ面倒ですか」

時計を見ると既に時刻は7時。

ちゃんとしたものを作ろうとするなりば料理が出来るのは9時過ぎ。

(またクリスちゃんに文句言われます……)

そしてきっと機嫌の悪い今田は料理にたくさんのケチをつけられるのだろう。

そのことを教えて、詩織は若干鬱に入りながら手を動かすのだった。

1・6 我が家のヒューラルキーは一番下なのです（後書き）

魔法少女シオリンも妹には勝てない！

今回と次回は主人公の私生活的な何かが書かれるのでバカテスキヤラには絡みません。

ところで勘違いしてもらつたらあれなのでここで明記しておきますが、別にこの小説はアンチ小説ではありません。詩織自身も雄二が嫌いというわけではないので、あくまでそういう時期なんだと思っていただければおけです。というかなかなか進まないなあ……。

1 - 7 理由

何とか妹様のクリスを料理で黙らせることに成功し安堵する。
不機嫌ながらも無言でちょこちょこ食べてるクリス可愛いです。

「何？」

「何でもないですよ」

... -

期間を空けて久々の手料理なので思い出補正もあり、文句はないようだ。

「……お姉ちゃん」

「何ですか？」

「なんで文月学園なの？」

突然、しかも何の脈絡もなく出された質問に戸惑うがその日に不満が内包されているのを詩織は確認し、どう答えようかと思案する。クリスが文月学園へと入学したのは詩織がそう指示したからである。おそらくそのことに対する解答を求めているのだろう。

「お姉ちゃんと同じ学校に通えるのは素直に嬉しいよ。だけどなんでも試験高なんて……」「

確かに注目が集まっている期待の高校かもしれない。

だがレッドフィールド家人間が通うほどの価値があるのかと言つたら疑問だ。

そんな臨床試験のようなもの、別の人間にやらせればいいのだ。

「クリスちゃん」

「何」

「私がクリスちゃんに魔法を教えた時の事、覚えてる?」

「…………」

無言ながらも頷くクリスを確認してから詩織は言葉を続けた。

「魔法は決して他人に見せてはいけない……」これがクリスちゃんに誓つてもらつた最初の誓約

この世界で生きていく為には魔法は不必要な力だ。
可愛い妹のおねだりに魔法をつい教えてしまったクリスに甘い詩織
だが、それでもその約束だけはしたのだ。

「私が『レッドフィールドの魔女』って呼ばれているのは知つてますよね?」

「…………この世を支配する魔女」

「そうです。確かに魔法という反則技で色々なしてきましたが、それは同時に敵を作るということです。

私がこの屋敷にいなかつた1ヶ月間に魔法目的で襲撃を受けた回

数、分かりますか？」

「……分からない」

「未遂も合わせれば73回。一日に2回以上襲撃されます。それだけ魔法というものには価値があるんですね」

文月学園に注目が集まっているのもオカルトという力を別の何かに活用できないかという期待でもある。

だからこそ文月学園の偶然によるオカルトではなく、完璧に制御してオカルトを使っている詩織はこれ以上ない魅力的な人材なのだ。

「もし私がその道の人間に捕まれば魔法の知識を全て喋るまで尋問、拷問のコンボでしょう。

クリスちゃん。私は、魔女である私は全てを跳ね除ける力があります。しかしクリスちゃんは？」

確かに詩織はクリスに魔法を教えた。

しかし本来魔法というものがないこの世界では余程の才能と知識がなければ着火の魔法すら使えない。

10年近く教え、鍛錬してきたクリスでさえ詩織基準の判定で使えるのは初級魔法のみ。

魔法を使うくらいなら銃を撃つたほうが強いというレベルなのだ。

「つまりクリスちゃんを文月学園に通わせるのはカモフラージュです。オカルトの学校に通っていたならば多少のオカルトは黙認される。

といつてもそれは楽観的すぎますがね。あくまで田舎は私の手が常に届く場所にいるということです」「

今もたまに人質目的でレッドフィールド家の人にちょっかいをかける人間もいるがそれは極々少数だ。

そもそもとんでもない金持ちであるレッドフィールド家には常にガードマンがついている。

この人気のないレッドフィールド家にも何人かのガードマンが詰めているのだ。

彼らはプロなので普段こちらに姿を見せないが、呼べば間違いなく出てくるだろう。

話は戻るがそもそも詩織が狙われるのは魔女である以上にガードマンを一人もつけていないとこりに起因する。

「私はいざとなれば転移魔法ですぐに逃げれますからね。クリスちゃんはそもそもいかないでしょ?」

「……理解はしたけど」

納得はしていない。

この感じはどうやらちょっと放置しそぎたようだ。

いつもなら出会い頭にシャイニングファインガー的な何かを放つことなんてないのだが、機嫌が悪すぎる。

現に今も全然機嫌が直っていない。

……いつも一度怒ればしつこいほど長引くのだが、今回はいつまで長引くのだろうか。

結局クリスは機嫌が直らないまま自室へと戻つていった。

対する詩織は掃除魔法でポルターガイストと化した布巾やスポンジで食器の洗浄を命じてから自室へ籠る。

クリスの部屋に行って一ヶ月の間、体験したことを語り合ったがつたがの感じでは行つたところで門前……扉前払いだ。

「さて今のうちに課題をしておきますか」

プリントを配布していた時に西村先生が言つていたことなのだが、馬鹿なFクラスは課題を出されることが多いらしい。

Aクラスは言つまでもなく自習をしているだろうが、Fクラスは考えるまでもなく自習している人物が殆どいない。

であるからして毎日簡単とはいえ課題が少し出るのはある意味当然だろう。

「まあFクラスレベルの課題だから簡単ですが……あら?」

プリントを机の上に出し、続いて筆箱を取り出そうとして固まる。鞄の中にあるはずの筆箱がなかつた。

いつたいどこにいつたんだろうと一瞬考えるもののどう考えても学校に置き忘れてきている。

まあ明日取りに行けばいいですね、と思いなおし予備の筆記用具を引き出しから取り出す。

この時、詩織が魔法を使ってでもFクラスへと忘れた筆箱を取りに行けばあんなことにはならなかつただろう。

「ん……」

カーテンから漏れる光を眩しそうに手で遮りながら詩織はゆっくりと身体を起こす。

両親の買つてきたフリルいっぱいの可愛らしいピンクパジャマを身につけた詩織は半覚醒状態ながらもノソノソと布団から這い出る。一回振り向きスクスクの布団を名残惜しげに見て、タンスから着替えを取り出す。

そしてフラフラと洗面台へと向かい、朝支度を終えてからゆっくりと着替えた。

今日はたぶん試召戦争はしないだろ？

昨日に点数をだいぶ消費したはずなので、英気を養う意味でも一日は間を空けるはずだ。

だんだんはつきりしてきた意識でそう考える詩織だが、実はこの思考はFクラスの面々をなめ切つていた。

普通連日で試召戦争……もとい、連續補充試験などと体力どひるか集中力も続かないものだ。

つまり詩織はFクラスの体力馬鹿どもを正しく認識していなかつたのだ。

「今日は休みでいいですよね。クリスちゃんの『機嫌を取らないといけませんし』

だからこんな思考に至つてしまつ。

試召戦争に積極的に参加する意思はまだないが知らない間に負けて設備のグレードを下げるられる趣味はないのだ。

だといつのに自らの認識の浅さによって試合戦争の場にいないう最悪の選択をしてしまったのだ。

「んう……とりあえず」飯を食べたらクリスちゃんを誘つてお買い物にでもいきましょうか」

クリスが学校を休むことは脳内で決定しつつ冷蔵庫から卵を取り出す。

なんだかんだでクリスもシスコンなので姉とのスキンシップがとれると言つたら学校を休んでついてきてくれるだろ。そもそも英才教育をクリスは受けているので高校の内容くらいなら余裕で満点を取れたりする。

「さてと、次は……」

堂々とサボるのはあまり褒められた行為ではないが、一曰くらい許してほし。』

といふかそれくらいしないとクリスの機嫌はいつまでたっても治らないのだ。

ならば一日くらいい犠牲にしてクリスの機嫌をとつたほうがはるかに良い。

既に詩織の頭の中にはデータコースを作つており、試合戦争のこと

が完全に頭から抜けていた。

1・7 理由（後書き）

作中ではそこまで詳しく述べませんが、レッドフィールド家と文月学園はわりと近いほうです。

文月学園に協力してきた関係でわりと融通が効くといつのも文月学園を選んだ理由の一つです。

今回はあんまり進展のない話。

あえて言えばフラグがたつてますが……原作を読んでいる人なら、ねえ？

1 - 8 birth day(前書き)

ついにノリで「番外編でやれ」とか言われそうな話を書こうぢゃこましだ。

今回やつとバカテス本編に移ります。

たまに詩織＝スプリングファイールドと書もやつになるのは秘密。

1 - 8 birth day

薄暗い食卓に置かれたご飯を詩織は黙々と口に運ぶ。

時刻は既に夜の10時を過ぎており、かなり遅めの晩御飯だ。妹のクリスにとつては既に夜遅いので今頃寝ているだろう。

「別に……分かつてたんだけどよ」

精神は肉体に引き摺られる。

前世では一笑したその言葉が転生してからは幾度となく実感してしまつ。

「……不味い」

食卓の上に乗つているプロが作つたいつもより豪華な食事勢。いつもの感性なら美味しいはずのそれらが今はどうしようもなく不味く感じてしまうがなかつた。

「ちつ」

口汚く舌打ちをして目の前の肉を丁寧に切り分ける。

今日は詩織の8歳の誕生日……両親は今朝、急な仕事が出来たらしく慌てて出かけていった。

その時の申し訳なさそうな両親を笑つて送り出せる程度に詩織は大人だったが一人の食卓に寂しさを感じてしまつくらいには子供だった。

大事な仕事なんだからしようがない……元大人として詩織はそう理解していた。

「はあ」

無理を言つて晩御飯を一人遅らせてもらつたのも両親がひょっとすれば帰つてくるのではないか。

その時は何かに縋るような気持ちで淡い期待と理解しながらも言つしかなかつた。

妹のクリスを当然そんな子供の我慢のようなものにつき合わせてお腹を空かせたまま待たせる気はなかつたので先に食べてもらつた。

何を馬鹿なことをしている詩織＝レッドフィールド。

きっとクリスは誕生日だというのに食卓へ顔を出さなかつた姉を怪訝に思つてゐる。

だといふのに大人であるはずのお前は何故こんなところで一人感傷に浸つてゐる。

喧嘩中だから心配されてゐるか分からぬがそれでも心配される種を何故残す。

「分かつてゐる、はずなんだけどよ

どうしても割り切れなかつた。

前世でも自分はこんなに聞き分けのない奴だつただろつかと思い出そうと瞼を閉じる。

既に目の前に置かれている料理郡を食べる食欲はない。

「……おね……お兄ちゃん」

ギイと扉が開く音と共に自分を呼ぶ幼子の声が耳に届く。

目を開くとそこにいたのは1年前に兄と呼ばせた我が妹クリス。

この呼び方も前世を前世と5年以上たつてまだ割り切れない証明。

クリスからすればいきなり姉が兄と呼べだの言い始め、意味が分からなかつただろう。

すぐに後悔した詩織だが訂正することもなくズルズルと一年もそれは続いている。

つまり中途半端なのだ自分は。

前世である自分を捨てきれず、現世である自分を受け入れ切れない。

だというのに現世である自分は誕生日に両親が同席して欲しいくらいには家族を愛している。

その齟齬は当然日に日に大きなり半年前、ついにクリスと大喧嘩をした。

それ以来クリスと何を話していくか分からず話しかけておらず、またクリスも自身に近寄つてこない。

「どうしたクリス」

「…………う」

別に威圧したつもりはなかつたがクリスはそつととらなかつたよう
で視線をあちこちに飛ばしている。

まだだ。

また自分は大人気ないことをしている。

「…………大丈夫だクリス。どうしたんだ?」

出来るだけ柔らかい笑みを浮かべながら話しかける。

その言葉に少し安心したのかクリスはとてとてと詩織に近づく。

そういえばこうやって正面からクリスと話したのは久しぶりだなと
内心苦笑しつつクリスの言葉を待つ。

「あ、あのね」

「うん」

「おねえ……お兄ちゃん」

お兄ちゃん、その言葉を聞く度に心臓が跳ね上がるのを感じつつも無視する。

それはきっと 罪悪感だと直覚じつも。

「何かな？」

まだ表情の硬いクリスは後ろに手を隠してソワソワしている。見たことすらないクリスの様子に詩織は何か具合でも悪いのかと心配になるがクリスの言葉を急かすわけにはいかない。

数秒か数分か……時計の音が無機質に鳴り響く食堂でその音を数えることすらせずに待つ。

そしてクリスは何かを決心したかのように手を前に差し出した。

「お姉ちゃんお誕生日おめでとうー。」

「…………え？」

小さな手の上に置かれた棒状のそれは詩織の知識によると呪の蓋がついた安物のシャープペンシル。

幼子なりの工夫なのかピンクのリボンが結ばれたそれを詩織は固まつた表情で見る。

「おれ、に？」

乾いた声が小さいながらも響く。

クリスは詩織の言葉にしつかりと頷いた。

半年 長い長い姉妹喧嘩だつたそれをどうやって解決しようかと
詩織は悩んでいたが、まさかクリスから歩み寄つてくるとは思わなかつた。

公平な立場で見るならばあの喧嘩は間違いなく詩織が悪い。
だとのうのにクリスはこんな不出来な姉にプレゼントすら持つてきてくれている。

「…………」

情けなかつた。

前世があるとか関係がない。

ただ、この子の姉として情けがなかつた。

前世を忘れることも現世を受け入れることも出来ない自分より遙かにこの妹は大人だつた。

「あ、あ……間違えた！お兄ちゃん、お誕生ばふつ……」

言い切る前にクリスの身体を詩織は抱きしめた。

「お兄ちゃん？」

「…………ありがとう」

「…………」

「いめんね

顔は見えない。

だが確かにクリスが首を振るのが詩織には分かつた。

「あとね、クリス」

「なあに？」

あつといの田

「私はお姉ちゃんだよ」

詩織＝レッドフィールドはこの世界に産声を上げた。

懐かしい夢を見た。

昨日クリスに散々家族サービスをした後疲れきった詩織はベッドの上で倒れるように伏していた。

隣には自分を抱き枕にしている妹様の姿が。

詩織が疲れきっている顔をしているのに対しクリスは幸せそうに寝ているのが実に対照的である。

起きる為に詩織はクリスの手をゆっくり剥がそうとするが意外に力が強く、起こさないよう剥がせそうにない。

「仕方ないです」

抱きついているクリスの頭を撫で、静かに抱き寄せる。

ここ一月程甘えられなかつたのだから少しくらいいいだろ？

学校に遅刻することを確信しつつもクリスに甘い詩織は苦笑一つで許してしまうのだった。

あれから眠気眼で「おひやようお姉ちゃん……」と間の伸びた挨拶をするクリスをたつぱり堪能してから朝食をとり、家を出た。学校には既にレッドフィールド家の用事で少し遅れると連絡している。

権力万歳。

ちなみにクリスにはとりあえず担任に話を通しておいたとしか言っていない。

別に自分はいくら担任に怒られてもいいのだが、クリスが自身の甘さで怒られることだけは許容できない。

二人手を繋いで誰もいない坂道を仲良く歩きながら試召戦争について話してあげる。

やはり一年後に経験することなので興味深々だったクリスはあれこれと質問してきた。

英才教育を施してきたクリスなので間違いなくAクラスに所属し、代表となるのだろうがクリスならきっと大丈夫。

というかAクラスと試召戦争なんて馬鹿な真似、普通しない。

Bクラスまでは戦力に上限があるがAクラスは上限がないのだ。AクラスではBクラスより若干強い人間だけではなくそのAクラスの下位連中を遙かに上回る戦力の人間もいるのだ。

つまりAクラスはあくまで最上位クラスという枠組みであって上限の設定はされていない。

なので同じAクラスメンバーでも戦力に差があつたりするので他ク

ラスとの戦力差は考えたくない程だ。

もちろんクリスはAクラス代表になれる器なだけあって規格外の点数をとることも可能だ。

「ですがそれを言つのは良くないですよねえ」

校門で別れたクリスのことを思い一言。妹は優秀であることを鼻にかけないので事実とはいえないあまり持ち上げても仕方ないだろう。

とりあえず昨日が補充テストをしえ終えたならば今日がおそらく試召戦争の日だ。

CクラスかBクラスかAクラスかは分からぬが、少なくともこの時刻で決着がついていることはないだろう。

「おはよひゞせこます」

例によつて渡り廊下で戦闘をしてゐるのを尻目にFクラスの扉を開ける。

中には予想通り代表の坂本雄二がノートに何かを書き込んでいた。

「遅かつたなレッドフィールド。昨日はどうしたんだ」

「ただの風邪ですよ」

さらつと嘘を吐いてから自身の席に座る。

胡散臭げな表情を雄二は向けていたが相手をしていたも仕方ないと判断したのかすぐにノートの書き込みに移る。さて、私の筆箱は……あ、ありました。

「雄二つ！」

教室の中に吉井明久が飛び込んでくる。
彼は今日は伝令担当なのだろうか。

「うふ~。どうした明久。脱走か? チョキでシバくぞ」

チョキでシバくってなんだう。田瀬じどううか?

そう考えながら筆箱を開け、そして詩織の時間は完全に固まった。

「……………はい?」

中にはへし折られたボールペン、砕かれた消しゴム。

それだけならばまだいい。

所詮消耗品なので買い足せばいい話だ。
しかし

「あ……ああ……」

「お、おこ~。レッズファーレド、どうしたんだ?」

「れ、レッズファーレド君?」

そこには真ん中でへし折られた兎のシャープペンが。

『お姉ちゃんお誕生日おめでとうー。』

おめでとうおめでとうおめでとう…………。

その言葉が脳内で何度も繰り返され、視界が真っ赤に染まつていぐ。

「ひ…………ひひひ」

「レッドフィールド！？」

「どうしたの！？何だか鉄人のヌード見たみたいな顔してるよ！？」

雄一と吉井明久が何かを言っているがそんなことは関係ない。

「『リペア』」

幸いにも欠けた物はなかつたらしく修復の魔法でシャーペンシルは元に戻った。

だがそれだけで許せない。許せるはずがない。

「ねえ雄一君に吉井君？」

「「は、はいっ！」」

「これえ、やつたの誰なのかなあ？」

詩織の瞳に剣呑な何かが写る。

下手に答えるとやばいと本能で感じた雄一と吉井明久は背筋を伸ばしてはつきりと答えた。

「「Bクラスの根元恭一です！－」」

この瞬間、根元恭一の運命が決まった。

1 - 8 birth day(後書き)

実はとんでもないシスコンな詩織の本性の巻。

TS転生主人公が現世の自分を受け入れる話ですね。

最初の誕生日の話はもつと短くする予定だったんだけど、気付けばこんなに長く。

実はこれ、今までで一番長く書いたやつなんですよね。

最後にキリがいいといひで終わらなくなつちやつて。

そのうちクリス幼少時代視点での詩織を書いつとは思つてます。

1・9 静かに壊るは白き魔王（前書き）

今回魔法少女シオリンが絶賛暴走します。

しつこいようですが、別にこの小説はアンチではありません。

たまたま根元さんが作者のノリのせいであつたいけないことをしてしまっただけです。

暴力的な表現が出てきますのでそういうのが苦手な人は回れ右で。

1・9 静かに壊るは白き魔王

まず最初に向かう先は女子更衣室。本来ならば今すぐBクラスに乗り込んでOUIHOKUしたいところだが、その前に準備がいる。

「なんだいいつたい。こきなり呼び出して」

女子更衣室に入ったたらそこには藤堂学園長が面倒臭そうな顔をして座っていた。

「というかあんた、なんで女だつてバレてないんだい？その胸の膨らみで誤魔化せるはずないだろ」

詩織の姫路瑞希程ではないにせよ平均に比べれば十分大きい胸を指差して言つ。

「認識阻害といつやつです。私を女だと知らない人は、例外なく男と思つてしまひ」

「まつたく常識外れだね」

「そんなことはどうでもいいんです。フィールドを形成していく下さい」

「ほつ？お前さんの力なら自分で形成できるんじゃないかい？」

「無駄な思考にリソースを割きたくないです。いいから、フィールドを形成するか学園ともども潰れるか選んでください」

そのかなりマジが入った言葉に藤堂学園長は眉を顰め、無言でフィールドを形成した。

すると詩織の周囲に幾重もの魔法陣が構成されてしまふ。

「…………完了しました。それではBクラスに行つて来ます」

「ふん。後でレポートはよこしなよ」

「お断りします」

3FのFクラス前に戻った詩織は凄く良い笑顔を浮かべていた。渡り廊下の向こうのBクラス前で雄一がFクラスの指揮をとっているのを確認してそれに近づいていく。よかつた、まだ終わっていないと満面の笑みを浮かべる。

「…………わざわざからうソング」と、壁がつるせえな。何かやつてこらの
か?」

「ああな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか?」

「けつ。言つてみ。匕つせもつすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出
せー!」

「…………体勢を立て直すー! 一旦下がるぞー!」

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

場はクライマックス。

根元恭一は眼前。

これこそ詩織が望んだ舞台だ。

「雄一君、どうしてください」

「レッドフィールド？いや、撤退だ。奴らを前に出さないと……」

「雄一、君？」

「……ああ

無駄に凄く良い笑顔と謎の気迫に氣圧されて雄一は頷いてしまつ。本能が「逆らつたら殺られる！？」と言つており、無意識に後退する。

「ふん、増援か。だがFクラスのゴミが何人来ようが意味が……」

「御託はいりません」

「はあ？」

「サモン試験召喚」

『Fクラス 詩織＝レッドフィールド 総合科目 〇点』

この場にいる全員が初めて見る詩織の召喚獣 その点数を見て誰

もが自分の目を疑つた。

「ああん? 何だ〇点つて」

「ブ拉斯ターシステム……コミットー、2、3、4、リリース」

最初から出し惜しみなしの全開。ブ拉斯ターシステム 分かりやすく言えば、自身にダメージを与えるシステムだ。

詩織の手によつて弄られた召喚獣は様々な特異性をもつが、このシステムもそのうちの一つ。

『Fクラス 詩織＝レッドフィールド 総合科目 4000点』

『なつ！？』

その場にいる全員の驚愕の声。

0点だつた人物が詩織の謎の掛け声と共に4000点といつ腕輪保持の点数まで一気に跳ね上がつたのだ。

この現象を理解できる人間は当然この場にいるはずがなく、詩織は一人続けて言葉を続ける。

「非殺傷システム、解除。ストライクコード。S・L・B」

「ちつ！ 何をしようとしてるか知らんが、そいつを止める！」

根元恭一がそんな詩織に嫌な予感を覚えたのかBクラスの面々に命令を下すが

ド「オツ！」

「んなつ！？」

止める前にぶち抜かれた自分のクラスの壁を見て表情を引き攣らせた。

「くたばれ、根元恭一ーいつ……あれ？」

「スター ライト……」

何故か器物破損万歳とBクラスの壁をぶち破つて進入してきた吉井明久には目もくれず、静かに詩織はキーワードを呟く。それは

「ちょつ！？俺の召喚獣が消え……」

「なー？俺もだ！」

「て、点数が減ってるだと！」

周囲の面々が攻撃も受けでないのに点数が減っていることもお構いなしに。

ちなみに雄二は自分の召喚獣の点数が減り始めたのを見てすぐに召喚フィールドから出て召喚獣を消している。

「ブレイカー」

『Fクラス 詩織＝レッドフィールド 総合科目 10450点』

最初のDクラス戦で生贊にした生徒に放ったティバインバスターと

は比べものにならない極大の桃色の光がBクラスに降り注ぐ。Bクラス全てを飲み込むその光は召喚獣達を飲み込み、消滅させていく。

「いてえええええええええええ！」

召喚獣を出していたBクラスの面々の痛みへの悲鳴を奏でながら。

「は、馬鹿な……」「

根元恭一の召喚獣が極大の光に飲み込まれる前、吐いた言葉はそんな不条理にたいする嘆きだつた。

「のうシオ」

「はい、なんですか？」

「大半のFクラスが補習室送りになつた上、辛うじて避けた明久も右手を焼かれて転げ回つてゐるのじゃが……なんじゃこれは」

幸いにも後詰め戦力として待機していた秀吉は補習室送りにされていなかつた。

床に倒れこんで痙攣している根元に不遜な態度で見下ろしている雄二も冷や汗を流していた。

「説明を要求するのじゃ」

「俺からも頼む」

「……気になる」

島田美波に姫路瑞希の女子一人はさすがに吉井明久を心配しているのかそつちに向かっている。

「この人たちも吉井明久の友達……ですよね?
ちなみにこの……なんでしたっけ。」

ムツツリー「でいいですか。」

ムツツリー「君は開いている窓から入ってきた時に桃色の光で前後不覚になつたので着地にミスつていてる。」

「面倒なので簡単に言います。プラスター・システムは自身に100点のダメージを『えます。総合科目の場合は1000点です』

「……なるほど。つまりお前は採点された点数からダメージによつて引かれていき、0点になつた負けるタイプじゃない。」

「0点から始まり採点された点数まで到達すると負けるダメージを負えば負つほど強くなるタイプか」

「……思ったより坂本雄一は頭が回るようですね。」

「それで腕輪が使える点数まで引き上げたのは分かった。だが最後に使つたあの光はなんだ?どうしてFクラスの奴らの点数がなくな

つた？」

「腕輪の力ですよ。スターライトブレイカー……周囲にいる味方の点数を奪い、攻撃力にする力です。最も、一時的なブーストですが」

「それ何でリリなのなの！？」

吉井明久が動かない右手のかわりに左手でつつこみを入れる。妹のクリスから見せてもらったアニメなのだが、どうやら吉井明久も知っているらしい。

「というかそれはえげつなくないか？」

「秀吉君の言うことも最もですが、それ以上にこの攻撃力は魅力的なはずです。

そもそもFクラスの点数が少なくなれば〇点になるようなことはないはずなのです」

「まあそれはいい。問題は、だ

雄一は視線を今も痙攣するBクラス連中へと向ける。

「何だこれは？まるで明久のように観察処分者が攻撃を受けたみたいな……」

「そのとおりですよ」

「なに？」

「非殺傷システム解除。分かり易く言えば攻撃を『えた相手を強制

的に観察処分者にし、ダメージをファイードバックさせるシステムです。

さすがにペンをへし折られたのがむかつきましたので先程作つてきました

きました」

うわあ。

FとBクラスの一回の心が一つになつた瞬間だつた。

「といひで根元恭一君」

「…………あ…………あ」

根元恭一に声をかける詩織だが仮想的であるものの大ダメージを負つた根元は呻き声を上げることしかできない。

「起きてください」

ゲシイ！

躊躇なく根元恭一の腹を蹴り上げ、それでも呻き声以上の反応をしない根元の髪の毛を掴んで顔をこちらへと向ける。

この容赦ない行動に姫路瑞希とBクラスは大いに引いている。ちなみに残りのFクラスの者達は詩織のキレ具合に顔が引き攣つているものの暴力行為そのものには何とも思つてない。

まだ未来の話だが、こいつらはF団などという組織を立ち上げざりに冷酷な私刑をするので当然といえば当然である。

「Fクラスを襲撃して筆記用具の破壊を命じたのはあなたですよね？」

「お　べびゅー？」

「答えは聞いてません」

ゲシイ！

せりて膝蹴り。

「別に弁解なんて聞きたくありません。貴方の敗因はたつた一つ

」

どいまでも冷酷な態度で詩織は言い放つ。

「貴方は私を怒らせました」

1・9 静かに壊るは白き魔王（後書き）

はい、今回詩織はブチギレします。

もし学校じゃなくてチンピラ相手などだつたら相手は完全に社会から消えていたことでしょう。

この時キングオブシスコンの詩織は髪型を馬鹿にされた丈助の如く根元をぶちのめすことしか考えてません。

まあ元魔王だしこれだけで済んでるので性格は丸くなつたんじゃないかな。

ブチギレシオリンはこれから先は（たぶん）出ない……かなあ？
ちなみに最強っぽく見えるシオリンですが、ズルが嫌いなのでところどころに弱点置いてます。

一度攻略法が確立されれば点数（身体能力）と操作技術がそこそこのければ倒せます。

気付いてる人もいると思いますが、頭に血が上ったシオリンはFクラス代表の点数まで0にしかかったことに気付いてません。

1 - 10 Bクラス戦終了（前書き）

今回少し短め

問

以下の問いに答えなさい

『女性は（ ）を迎える事で第一次成長期になり、特有の体付きになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師の「メント
正解です

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。』

初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1・5kgに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される』

教師の「メント

詳しそぎです

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね

シオ＝レッドフィールドの答え

『婚約者』

教師のコメント

解答欄ぞれでませんか？

「ねえ雄二」

「……なんだ」

「僕、レッドフィールド君は絶対に怒らせないよ」というふうに

「俺もそう思う」

静かに根元をフルボッコにしたレッドフィールドは氣絶した根元を

確認して「へつ。「ミミガ」と唾を吐き捨ててBクラスを出て行った。どこの不良だお前とつてこみたくなる光景だったが、その場にいる誰もが怖くてつてこまなかつた。

その後一応手加減はされていたらしい根元はすぐに起き、そして震えながらレッドフィールドを探しないと分かると安堵の息を吐いた。

「ただけ怖かつたんだ。

それから明久の提案で女装させて写真会なるものが開かれた。ちなみにその時当然根元は渋つたのだが

「レッドフィールドをもう一回呼んで来ると、女装を受け入れるの。どつちがいいんだ?」

「女装です!」

即答だつた。

レッドフィールドのレッドつて絶対血の色だろ。

「よくわからんが、レッドフィールドの筆箱には触れないほうが良むわつだ」

「ん? 筆箱が原因となると……昨日のあれかの?」

秀吉の言葉に明久が見たことを簡単に説明する。

その説明にレッドフィールドの怒りの原因を把握した面々は当然のことながら雄一の発言に頷いた。

「誰だつて好き好んで竜の尾を踏む者はいない。」

「とりあえず、だ。これでAクラスに勝つ為の布石を撒き終えた。万が一のことを考えて補充テストを終えてから……そうだな。」

日後に宣戦布告する

放課後の屋上、そこで俺は奴を待っていた。

シオ＝レッドフィールド。

奴はスパイであることを否定していたが翔子と何かしらの繋がりがあるのは確かだ。

一昨日に問い合わせようとしたがこの辺りの状況を正確に把握しているレッドフィールドから情報を引き出すことは困難だった。

「お待たせいたしました雄一君」

「ああ

「ああ

Bクラスへと仕掛ける昨日にレッドフィールドとは完全に決着をつけるつもりだったが奴は来なかつた。

明後日にAクラスへタイムマンを仕掛ける身としてはどうしても今日レッドフィールドを抑えて起きたかった。

「それで、用とは？」

「聞くまでもないだろ。お前の思つていい通り、腹の探りあいならぬ晒しあいだ」「…………はい？」

「む？」

レッドフィールドの頭脳だとそれくらいは予測しているのだと思つたのだが……。

「…………ああ、やつこえはそつでしたよね。完全に私の「」とを忘れてるんですから、そつちですよね」

「何か言つたか？」

「いえ、何も」

「やうか。まあいい。一つ聞く。お前は翔子の何なんだ？」

この問い合わせるかは分からぬ。

が、思えばレッドフィールドは何だかんだけ質問には答えてくる。嘘かどうかは分からぬが、それはこちりで判断すればいい。

「幼馴染ですよ。極々短い時間のみの関係でしたが、今でも連絡を取り合つ仲です」

「…………とこい」と、俺と翔子の「」とも知つてゐようだな

「ええ。で、貴方は何故試召戦争でAクラスを狙つてるんですか？」

確かに頭の良い奴なら俺がやつていることは不可解だ。俺だつて勝算がなければ絶対こんなことはしない。

「世の中学力が全てじゃない。そんな証明をしたくてな

「……」

「さて、お前は翔子に何の情報を流した?」

本命はこれだ。

試合戦争で俺達Fクラスの情報を流されるのはともかく俺の策に関係する情報を流されると全てが終わりだ。

翔子とタイマン、翔子のミスを誘うことによって勝利するという策はまだ誰にも漏らしていない。

だがもしこいつが翔子がタイマンを張りたくなくなるような情報をAクラスに流していたとしたら。それは厄介だ。

誤魔化されても良い。

僅かな動搖でも感じ取れれば良い。
あまり意味がないのは分かっているもののAクラスとの戦いには万全を期したい。

「FクラスがAクラスを目指としていること。それだけですよ」

「本当か?」

「ええ。誓約書を書いてもいいからです」

「……」

見たところ嘘はついていないように見える。

「レッドフィールドはAクラスとの戦いに手を貸してくれるのか?」

「必要なんですか？」

「……何を言ひ。試召戦争でお前程の戦力をAクラス相手に遊ばせておく余裕は……」

「Aのよつな状況にもつていかない為にBクラスに勝利したんじよつへ一騎打ちの為に」

「…?」

「あひ、やはりわつでしたか」

「……ハッタリだと」

「まあ他には不意打ちか袋叩きへりしが翔子ちやんを討ち取れる方法はありません。

しかも決定打である姫路瑞希は確実にマークされるからその一つの方法で翔子ちやんは絶対に倒せない。なら残るは一つじょつへ

「……」

「先日申しましたが、私はスパイではありません。今回の試召戦争では傍観者ですよ」

「信じていいのか?」

「信じじむひになこじやあつません。それが真実ですか?」

雄一との話し合いを終えて屋上の扉から階段を下りる。

隣にいる雄一は何か釈然としない表情をしているが、これ以上詩織が答えないことは十分理解しているはずだ。

(しかし……)

屋上へ呼び出された当初、考えていたのはシオ＝レッドフィールドへの言及ではなく詩織＝レッドフィールドへの言及だとと思っていた。短かつたとはいえ幼少の頃に会ったことを思い出し、その真意を確かめる意味での呼び出しだと思つていたのだ。

(名前なんてもじつてるだけだし、特に変装をしてるわけじゃないのに……なんで気付かれないとしよう)

確かに認識障害も使つていてるがあくまで過去に詩織の正体を見た人物には効き難い。

しかし詩織は忘れている。

過去の自分は今の自分と比べ物にならないくらい荒れしており、自分は男だのと言いながら男子に殴りかかる女子だったという事実を。

1・10 Bクラス戦終了（後書き）

本来この回に雄二がAクラスへ宣戦布告する前の演説が始まる場面でしたが、作者の「原作通りの会話とかまじ面倒。でもこれは大事な場面なので入れないとAクラス戦導入部分で重要なところがなくなっちゃうし……まじ面倒」とか言いながら何時も通りのノリで書いてたら屋上で告白（本心を打ち明けるという意味で）合戦になつてました。

どうしてこうなつた。

1 - 1 - 1 思えばこれはFFFEの図の上鱗ですね

問

以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞希の答え

『?脂質 ?炭水化物 ?たんぱく質 ?ビタミン ?ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね

吉井明久の答え

『?砂糖 ?塩 ?水道水 ?雨水 ?湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。』

また、十五歳になつても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になつても所長がない時を原発性無月経といい……』

教師の「メント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

シオ＝レッドフィールドの答え

『？肉体　？魂　？生体エネルギー　？意思　？極々少量の魔力
？真名』

教師の「メント

5大栄養素という文字をちゃんと読んでください。

『スター ライト…… ブレイカー』

画面の中で詩織の召喚獣が「あれ？これオーバーキルじゃね？」って言いたくなるような砲撃を放つ。

場所は移って詩織の部屋。

今日試合戦争に参加したということを晩御飯の際にクリスに話したら異様に食いついて記録映像を求められた。

後で弄った部分に不具合がないかどうかを確かめる意味でビデオに撮っていたのでそれを見せ今に至る。

「むむむ」

「どうかしましたか？クリスちゃん」

「足りない！」

「…………はい？」

突然始まったクリスの駄目だしに詩織は田を点にする。

「足りないよ！ＳＬＢを撃つ前は『これが私の全力全開！』って叫ばなきやダメだよお姉ちゃん！」

「……技名を言うだけでも結構譲歩したんですけどね」

当然だがその呴きはクリスには届かない。

システムの詩織はなんだかんだでクリスの要望を答えるべく腕輪の使用に音声認識を使っている。

つまり技名を言わないと発動しないのだ。

詩織の使う魔法も確かに上級魔法ともなれば魔法の名前を叫ぶ必要があるがそれとこれとは別である。

「それにこれー！」の場面ー」

『プラスター・システム……リミッター、2、3、4、リリース』

「おかしいでしょ！これー！リミッターなのに何で最初から全部外してるのー？」

「…………」

詰め寄ってきたクリスに無言で顔を逸らす詩織。

元々〇点開始召喚もリミッターシステムをどうにか実用的にしよう

とした末に考案したシステムだ。

さすがに使えば点数が回復するなんて補充試験いらずになるチート機能がつけられなかつた末の苦肉の策だつたのだが。

正直に言えば現状の詩織の召喚獣は使い辛いことこの上ない。

いかに点数の高い召喚獣とて首を斬られたり心臓を突かれたら消滅するわけで、0点の詩織の召喚獣もその例外ではない。

つまり最初からブラスター・システムを使わない限り一撃で負ける可能性が極端に高いのだ。

今のところ誰にも気付かれていないがディバインバスターやSLBは一度照準をつけたら動かすのは不可能。

つまり素早い相手には当たらないという欠点がある。

まだ使つていないバインドという拘束手段があるもののこれはある程度接近する必要があるし、複数相手には使えない。

牽制用にアクセルシューターというファンネルの如く動かせる誘導弾もあるはあるが、あれは使用中に集中するので警戒が疎かになる。

「〇点の状態だと動きがトロすぎて何もできないんですよ……」

詩織の主張はある意味当然だ。

本来召喚獣にとつて〇点とは消滅するということだ。

そんな点数で動かそうと思つても1点とは比べ物にならない程重い。

「ヒーローはどんな逆境でも勝てるものなんだよお姉ちゃん!」

「私、ヒーロージャケットヒロイン……それと最初から常に逆境つて何か違うとおもいます」

「そんなのどうでもいいんだよ!」

「ええー」

お母様にお父様、妹が反抗期です。

「もうーもう一回一緒にリリなの見るよー。」

「え？ お姉ちゃん、もう既に30回くらい見てる気がするんですが

「いいからー座つてー。」

言葉の通じないクリスに溜息を吐いてクッシュョンにペタリと座り込む。

自然に女の子座りしているのに気付き、一瞬表現しようのない感情に襲われるが気合で押さえ込む。

なぜか詩織の部屋にあるリリなのDVDをテレビにセットするとクリスは「ひびくへ戻つてくる。

「やあー。」

「ペふー？」

詩織の膝の上にダイブするよつと跳躍し、お尻から着地。太股に鈍いダメージを負った詩織は顔を引き攣らせる。

「すたーとーー。」

「お、お姉ちゃん頑張ります。頑張りますよ」

絶対これ、一ヶ月放置してた影響まだ残ってる。

そう詩織は確信しつつ妹の頭で半分見えないテレビを胡乱な手つき

で見るのであった。

「やういえばお姉ちゃん」

「何ですか?」

「何あんなにキレてたの?」

「…………べ、別になんでもありますよ。やうー何となくです!」

「何となくー」

坂本雄一はここまでよくやつたと詩織は心底思ひ。

Fクラスといつ最低戦力でBクラスに勝利するといつ大挙を成した。勉強だけが全てじゃない もはやそれは証明されたといつても過言ではないだろひ。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だとと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、

他でもない皆の協力があつてのことだ。感謝していく」

「ゆ、雄一、びうしたのを。ひじくないよ~」

「ああ、自分でもやう思ひ。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

(これがシンデレラがデレたという奴でしょうか。そのデレを翔子ちゃんに向けてあげれば喜ぶでしょうね……)

「HJまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないといつ現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『やうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

いや、あなた方は勉強も戦術もできないでしょ。)
そうシッコミかけた詩織だが、さすがに空氣を害するシッコミなので自重する。

「皆ありがとうございます。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

その言葉にFクラス一同は困惑したかのような顔をする。
Fクラスが今まで勝つてきたのは戦術を駆使してのことだ。
真正面からの衝突で勝ち目がないのは誰もが理解していることだろう。

「落ち着いてくれ。それを今から説明する。やるのは当然、俺と翔子だ」

(…………えつと？てっきり姫路瑞希さんをどうにかして翔子ちゃんとぶつけるかと思っていたのですが、正攻法で叩くんですか。何か勝算もあるんでしょうか？)

「馬鹿の雄一が勝てるわけなああつ！？」

吉井明久が言い終わる前に放たれるカツター。暗器ばりの活躍をするそれは吉井の頬を掠め、背後にある畳に刺さつた。

「次は耳だ」

わざわざ宣言をして脅しにかかる。

こいつら、本当に友達なんだろうか。

「まあ、明久の言つとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえれば勝ち目はないかもしない。」

だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだつただろ？？まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかつた」

過去の栄光を例に出して民衆を扇動する……どう見ても暴君や悪徳商法のそれである。

だが雄一が築いてきた実績が確かな説得力を持たせる。

「今回だつて同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちはゆるがない。」

俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆さん見てやる」

Fクラスの人員が雄一に応えて雄叫びを上げる。

方法はともかく雄一はきつちり代表という仕事をこなしている。

それから雄一は翔子との勝負で日本史の小学生レベルの問題で100点満点方式の点数勝負をすると言った。

確かにその方法ならばFクラスでも対抗のしようがある勝負だ。

だが雄二がここまで自信満々に勝てると言つ勝負だ。
ただ対抗できるだけとは思わない。

そう思いながらも作戦を聞いていると幼い頃に翔子は日本史のとある問題で嘘を教えられたようだ。

翔子は頭が良いのでそれを完全に覚えており、絶対に間違える。
大化の革新の年表 それを間違えて教えたらしい。

「あの、坂本君」

「ん? なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲がいいんですか?」

え、幼馴染ということを誰も知らないんですか?

まあ雄二君は自分のことをあまり話すタイプじゃありませんからね。

「ああ、アイツとは幼馴染だ」

「総員狙ええつ!」

吉井明久の号令と共にFクラスの男メンバ（秀吉除く）が立ち上がり、上履きを構える。

なぜこの団結力とか指揮力を試合戦争で使えないのか。

「あの、吉井君」

「ん? なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか?」

「そりや、まあ。美人だし」

「…………」

「え？ なんで姫路さんは僕に向かつて攻撃態勢を取るの！？ それと美波、どうして君は僕に向かつて教卓なんて危険なものを投げようとしているの……？」

何とかその混乱しはじめた現場は秀吉が纏め上げた。
秀吉曰く翔子はレズビアンで幼馴染とはいえ雄二に興味を持つわけ
がなく、むしろ姫路瑞希が危ないらしい。

「あほですか」

翔子と連絡を取り合つて雄一との関係をしつっている詩織はそう呟か
ずにはいられなかつた。

1・1・1 愚かに思はれていた頃の上鱗ですよ（後書き）

クリスにつっこまれる回。

詩織はシスコンであることを必死に否定します。

後半はだいたい原作通りなので書くのが非常にだるかった。

ところでオリキャラ紹介を1章分で整理して一応書いたんだが、これついているんだろうか……？出すにしても一巻分とラブレター事件が終わってからですが。

今日で全ての結果が出る。

雄二が望んだ目標。

Fクラスの悲願。

Aクラスがどう出るかはわからないが、詩織個人としてはこのタイマン勝負を受ける可能性は高いと思っている。
なんせ姫路瑞希ではなく坂本雄二がAクラス代表の霧島翔子と戦うのだ。

余程のトラブルがない限りは勝ったようなものだ。

「問題点はある問題が出るまで、雄二の集中力が保つかどうかですか」

過去に神童と呼ばれていた雄二なら恐らく大丈夫だろうがそれでも翔子は一筋縄ではいかないはずだ。
まあどうでもいい。

AクラスがFクラスの誘いに乗るかどうかといつ心配もあるが、さすがに雄二はその辺をクリア済みだろう。
もしこれでAクラスが勝負を受けてくれませんでしたとかほざいて教室に戻っていたら一発殴りうと思いつ。

「ふん、私はあんな不良が勝てるとは思えないけどね」

「あれでなかなかやりますよ、彼」

現在詩織は学園長室でお茶を啜っていた。

藤堂学園長の取り出したいくつかの書類に適等に目を通しながら会話を優先させる。

「あ、これダメですね。間違いなく暴走します」

「これもダメかい?じゃあ」*ヒカル*はびつだい

「こんなアホの極みです。起動はしますがエラーで召喚獣がバグるだけです」

「これはどうだい?」

「アホですか貴方。こんな点数が低いから平気なだけで低得点保持者じゃない限り……つてもう作ってあるんですかこれ。アホですか?」

「……そんなにアホアホ言つことないだろクソガキ」

「アホにアホって言つて何が悪いんですか。事実を指摘されただけで暴言吐くなんて貴方どこのガキですか」

学園長が出す書類に駄目だしをしながらわらじにお茶を要求する。詩織は駄目だしはするものの具体的な改善案は絶対に出さない。前世、というか異世界の魔法知識を有する詩織はこの世界に魔法知識を広めることに否定的だ。

といつても既に身内数人には伝授してしまつてるが、それでも彼らにはきつちり秘匿を守つもらつてゐる。

万が一組織に捕まつた場合、魔法に関する基礎知識全てを消去するように魔法すらかけるほどの徹底っぷりだ。

だからこそ学園長の案を批評はするが魔法の知識で助長させるような真似はしない。

「まあシステムに関してはあくまでソースの整理だったので、引き受けましたが」

「でもあれでかなり見易くなつたわ。感謝はしてるさね」

してなかつたらむしろぶち抜きますよ。

そう視線で訴えかけてからゆっくりと席を立つた。

「もう行くのかい？」

「ええ。『千里眼』で確認してましたが、そろそろ決着がつくようです」

1対1ではなく5対5の戦いになつたが何とか当初の予定通りの雄二対翔子の勝負なつた。

雄二からすれば詩織にも参加して明久の代わりに出てもらつたかつただろうが、翔子との約束もある。

今回ばかりは翔子のやりたいようにやらせるとこつ約束を、破るわけにはいかなかつた。

詩織はスペイでもなんでもない。

ただ翔子に肩入れをしており、Fクラスに非協力的なだけだったのだ。

学園長室を後にして向かうのは3FのAクラス。

「ん？」

Aクラスへ近づくにつれ、男の野太い歓声が聞こえる。

「うん！これで僕らの卓袱台が」

『システムテストに!』

どうやら大化の改新の問題が一回目のテストで出たようだ。これで翔子は一問確実に間違い、Fクラスの勝利が決まる。

(さて、どうやって翔子ちゃんと慰めましょつか)

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ!」

『うおおおおつー』

ガラ

Aクラスを開ければそこには手を振り上げて喜ぶFクラスの面々と、その様子を理解できなくて困惑しているAクラス達。

(雄一君には何か御褒美をあげたほうがいいでしょうか?)

日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄一 53点

「…………。」

「…………はい？」

卓袱台がミカン箱になりました。

「三対二でAクラスの勝利です」

「…………雄一、私の勝ち」

雄一は翔子の言葉を受け入れる罪人のように床に膝をついていた。
詩織はその姿を見て深く反省する。

小学生レベルの問題でまさか100点を取れないとは思いもよらなかつた。

世の中、下には下がいるんだと実感した瞬間だった。

「…………殺せ」

「良こ覚悟だ、殺してやるー歯を食こ縛れー」

「吉井君、落ち着いてくださいー」

「だいたい、53点つて何だよー10点ないか前の書もあわとかも考えられるのひ、ひの点数だと」

「いかにも俺の全力だ」

「ひの阿呆があーつー」

思えばFクラスという存在を舐めきっていた気がする。
あくまで普通の尺度でFクラスを測つてはいけないのだ。
奴らは体力馬鹿の考えなし。
その認識で十分だろう。

「………… やすがにみかん箱は遠慮したいんですけどね」

「………… 雄一、私と付き合つて」

「あー、ひじじますか。」

「やつぱりせや前、まだ諦めてなかつたのか」

「……私は諦めない。ずっと、雄一のことが好き」

「……その話は何度も断つただろ?他の男とは全く違はずはないのか?レッジフイールドとか」

「……私には雄一しかない。他のひとなんて、興味ない。あと詩

織……じゃなくて、シオとはそういう関係じゃない

なんで私の名前を出したんだ雄一とか、私の本名を出すなと言つたのに何故出した翔子とか色々言いたいことはあるが空氣を読んで空気になる。

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートにいく」

「ぐあつー放せー！やつぱーの約束はなかつたこと」「

雄一の襟首を掴んだ翔子はそのまま『デートする為に教室を出て行つた』

この時点で雄一の将来が垣間見えた気がしたが、口に出すのは野暮とこうものだらう。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間はこれまでだ」

学園に来た当初に聞いた野太い声に振り向くとそこには西村先生がいた。

なんでも『Fクラスの担任に就任したらしく』 そんな簡単に担任つて変われるのだろうか。

「いいか。確かにお前らはよくやつた。Fクラスがこじまでくるとは正直思わなかつた。

でもな、いくら『学力が全てでない』と言つても、人生を渡つて行く上では強力な武器の一つなんだ。

全てではないからといって、ないがしろにしていいものじゃない。吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。何せ、開校以来

初の 観察処分者 とA級戦犯だからな

普通の感性の人間なら「仰る通りです」と言つしかない正論に対し
吉井明久は

「やつはこきませんよー何としても監視の目をかいぐうで、今までどおりの楽しく学園生活を過ごして見せますー！」

「……お前には悔い改めるところ発想はないのか」

「ないんですよさつと。まさか私もFクラスがここまで馬鹿の巣窟とは思いませんでした」

「お前は……そりが。やつにえはレッジドフイールドもFクラスだったな」

補充試験の監督をしてくれた西村先生とは、初口に少々顔を合わせた以来だ。

それ以来はBクラス戦を除いてまつたく人前に出なかつたので忘れていたのも当然だらう。

特にAクラス戦に参加していいことだがそれに拍車をかけていた。

「そうだ、西村先生。今夜我が家にお食事でもどうですか？」

「……いつたい何の話だ」

「いえ、前々から西村先生とはお話をしたいと思つてたんですよ

特にFクラス担任になればまたお世話になる機会も増えると思いますし。

そう付け加えるも西村先生は

「一生徒にお呼ばれするわけにはいかんだろう。それにお前は……分かって言つてるだろ?」

まあ女子の家に男性教師がホイホイ入つていつたら問題ですよね。ならば仕方ないですねと返し、そのままFクラスに荷物を取りに行く。
しかしミカン箱があ……使つたことないけど、机になるのだろうか本当に。

1・1・2 第一回試召戦争編終了（後書き）

描写も特になくAクラス戦あつさり終了。こんなにあつさり終わるなら雄一の演説部分もつとカットしてもよかつた気がする。

何度かシオリンも宣言してましたが、最初からシオリンは今回の試召戦争に参加する気はありません。

設備のグレートが下がるのは嫌だなくらいしか思っていないので学園長室でまつたりしてました。

次回のラブレター事件終了で2巻開始なのでラブレター事件で一章を締めとします。本格的に明久達と交流しはじめるのは2巻くらいからなので、一章はプロローグみたいなものですね。

1・5・1 ハハレター騒動（前書き）

書いてからこれでアベー万記念にしてよつてと思つた。え？だめ？

1・5・1 ラブレター騒動

問

以下の（ ）にあてはまる歴史上の人物を答えなさい
樂市樂座や閑所の撤廃を行い、商工業や經濟の發展を施したのは（ ）である

姫路瑞希の答え

『織田信長』

教師の「メント
正解です

島田美波の答え

『ちよんまげ』

教師のコメント

日本にはもう慣れましたか？

この解答を見て先生は少し不安になりました

教師の「メント

吉井明久の答え

『ノブ』

ちゅうと馴れ馴れしいと思します

シオ＝レジドフューラーの答え

『第六天魔王』

教師コメント

間違つてはいないです、何故名前のまつが出てこないんですか

side とある通話録

「…………はい。そんなことは……べ、別に忘れてたわけじゃない
ですよ？」

初日にお弁当作つてもうつたのに忘れるわけが……じゃあ何で会

いに来てくれないのかって？

そりゃああれですよ。クリスちゃんが寂しがりますか　じゃな

くて、学校が忙しいんですよー。
え、ちょっと待ってください。今そつち寮生活だから
いいんじゃないんじゅ……」「……

憂鬱な気分で簡単な朝食を作るべく手を動かす。

もともと規則に厳しい学園生活をしている彼女からの連絡はない。
対外的には詩織と彼女は他人以外の何者でもないので、ひむらから連絡することも不可能。

「どうしましょ?」

「お姉ちゃん、また綾香お姉ちゃんのこと夢ろこしたの?」

「……そういうことはさせないよ?..」

「じゃあ何で目を逸らすの」

クリスの容赦ない追及に空笑いをしながら料理を運ぶ。
その後をクリスが溜息を吐きながらついてくる。

「お姉ちゃんいい加減認めたら?」

「……いえ、確かに前世の意識で考えたらこれ以上ない話ですよ?」

ですけど今それをすると論理的に問題がある……」

「魔法で解決できるでしょ」

「家の問題が……」

「むしろお父さんとお母さんが進めてる話でしょ」

「…………持病の問題が」

「お姉ちゃんこれ以上ないくらい健康じゃない。まあ確かに前世持
ちの妄想っていう病気だけ」

「ふべりつー？」

既に言われ慣れているクリスの病気宣言だが、何度されても慣れる
ものじゃない。

あれ？なら言われ慣れてないのか？

「会こにいけばいいじゃない。お姉ちゃんなら魔法でひょひょひょ
っとセンサー類誤魔化せば、簡単でしょ？」

「姉に犯罪を薦める妹がいるのですが」

「それは恐い妹だね。で、行かないの？お姉ちゃん」

結局あの後逃げるよりとにかく速攻で食事を片付けると登校時間まで自室に籠った。

クリスからは田でヘタレと言っていた気がするが、そんなことはどうでもいい。

「西村先生おはようござります」

「おはようござわこまゆ」

「おう、おはよう。レッドフィールド姉妹か。早めに登校とは感心だな」

サッカーのゴールの前で立ち匂くす西村先生に挨拶をする。周囲には生徒は見当たらないし、どうしたのだろう。

「何をしているんですか?」

「ああ。」このゴールを撤去しようと思つてな

「……重そうですね、これ」

少なくとも人間一人が持ち上げる重量ではない。

「手伝いましょうか?」

「それには及ばん。この程度、確かに重いが持てなくはない」

「この人本当に人間でしょうか?」

「いえ、手伝つたほうが早そつなので」

そう言ひ浮遊の魔法で「ホールを持ち上げる。

誰も触れてないのに浮くという超常現象に西村先生は驚くが、事前に学園長から話しを聞いているのかすぐに納得顔になる。

「じゃあこれを校門前の隅にでも置いてもらつてもいいか?ネットはコチラで処理しておく」

「はいわかりました。クリスちゃんは先に行つておいてもらつてもいいですよ」

「私も行くよ。お姉ちゃんに綾香お姉ちゃんがどれだけ寂しがつてるか言わなきゃいけないし」

「.....」

「いいですか?お姉ちゃんは逃げてるわけじゃありません。綾香に会いに行くなんて簡単な話です。

でもまだ会いに行くのはもうちょっと後です。後つたら後なんです

学校でクリスとの別れ際にそんな捨て台詞を吐いた詩織は妹に「だめだこいつ」と言われながら走り去った。

本当に「えいひこましゅう」、やつ頭の中で問い合わせながらFクラスの扉を開く。

並ぶ//カン箱に一瞬顔が引き攣るものすぐに氣を取り直して挨拶する。

「おはよハヤロコマク」

それぞれが挨拶に対しつかりと返してくれる。

Fクラスは何だかんだで仲がいいんだなと実感したが、何だかんだで仲が悪いのも事実なので素直に感動できない。

「……吉井類へ..」

しかし何故かいつも元気良く返事をしてくれる　たまに空腹で反応がないが　吉井が微動だにしない。
机に突っ伏してないので栄養切れといつことではないのだろうが…
…どうしたのだろうか。

「秀吉君。吉井君どうかしたんですか？」

「何も知らないのじゃ」

「ムツシローー君？」

「…………（ふるふる）」

「姫路さん」「畠田さん？」

「言われてみれば妙ですね」

「確かにおかしいわ。アキ、変な物でも食べたんじゃない?」

空腹すぎてその辺に生えてるキノコを食べるくらい、吉井はおかしくなったのだろうか。

さてこの時点で何故雄一には聞かないのかと疑問に思つるものいるだろうが

「…………」

(雄一君は雄一君でどうしたんでしょう)

全身から不機嫌というオーラを放っていた。
本当にどうしたんだ。

頭の中でいくつかの回答が浮かぶものの情報が足りな過ぎて推測すら出来ない。

ウンウン唸つているとすぐにチャイムが鳴り、同時に西村先生がFクラスへと入ってくる。

「工藤」

「はい」

「久保」

「はい」

「近藤」

「はい」

「斎藤」

「はい」

あの後ネットを外してどこかへ持つていった西村先生だが、それでも時間ピッタリにFクラスに来た。
どうやら時間に厳しい先生のようなので、これから遅刻などをするば怒られるのは間違いないだろう。
そもそも権力が通じ……ないだろ?いや、むしろむしよ。

「坂本」

「…………明久がラブレターをもらつたよつだ」

『殺せええつ……!』

「ゆ、雄一ー!いきなりなんてことを言こ出すのやー!」

「ズズ……いい朝ですね」

何だからんだで仲が悪いFクラスの団結力を田の当たりにしながらどこからともなく出したお茶を飲む。

『どうこいつことだー?吉井がそんなものを貰つなんてー!』

『それなら俺達だつてもうつていてもおかしくないはずだー自分の席の近くを探してみるー!』

『ダメだー!腐りかけのパンと食べかけのパンしか出でこないー!』

いや、どんだけパン好きなんですかあなた。

『もつとよく探せ!』

『……出でたつ! 未開封のパンだ!』

『お前は何を探してるんだ!?』

これだけ反応する男どもとこいつのもある意味珍しい光景ではないだ
ろうか。

まあ自分は関係ないです。

そつ思いながら一時限田の教科書を鞄から机の中に入れよつとして

「あら?」

机の中から謎の手紙を取り出した。

『レッジドフィールドの机の中にあつただと!?』

『奴も異端者だ……吉井と同じへんな!』

「あ、あら?」

「お前らつー静かにしろーあとレッジドフィールドもお茶を飲むんじ
やない!」

西村先生の一喝にトクラスが静まるものの、いまだ殺氣は消まらない。
むしろ膨張してくる。

「それでは出欠確認を続けるが」

今のがに中身を確認しておきましょう。

えつと……

「なるほど。ところがこれ、ラブレターじゃありませんね。謝罪文でした」

綾香から寮を出れなくてこっちにこれないことへの謝罪の文だった。詩織の言葉にFクラスの吉井と詩織で分散されていた殺氣の矛先が一気に吉井へと向かう。

「手塚」

「吉井殺す」

「藤堂」

「吉井殺す」

「戸沢」

「吉井殺す」

「みんな落ち着くんだーなぜだか返事が『吉井殺す』に変わっているよー」

「吉井、静かにしろー」

「先生、こいに注意するべき相手は僕じゃないでしょー! こいのままだとクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよー。」

「それだけで済めばいいんですけどねえ……」

「やめてレッヂフィールド君ー? あいえそしだからー。」

Fクラスになつた時点での辺は諦めたほうがよろしくかと。

「新田

「吉井コロス」

「布田

「吉井マジ殺す」

「根岸

「吉井ブチ殺す」

「これ殺害宣言ですかから殴る蹴るで本当にすめばこーのだが、Fクラスの性質上まず無理だろー。」

「レッヂフィールド

「はー」

「レッヂフィールド君だけは信じていたー! シオ君って呼ばせてもらひよー!」

「……はあ。なら明久君と呼ばせてもらいますね。あと呼び捨てで結構です」

よくわからないが信頼されたらしい。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むよ!」

「待つて先生! 行かないで! 可愛い生徒を見殺しにしないで!」

可愛い……?

確かに美形の部類に入る明久の顔だが、どこかアホっぽいこともあって人によつては評価が分かれる顔だ。だが間違つても可愛いと表現する顔ではない。

「吉井、間違えるな」

西村先生が扉を開け、一回立ち止まると明久に宣言した。

「お前は不細工だ」

西村先生も程度はどうあれある意味同じ感想だつたようだ。

「不細工とまで言われるとは思わなかつたよバカ!」

「……不細工とまではいかなくとも、可愛いとはいえないのでは?」

「シオ、君だけは信じたのに……。」

いや、そんな恨めしい目で見られても困るのですが。

1・5・1 ラブレター騒動（後書き）

ラブレター騒動。

この話はあまり重要な話じゃない上に詩織の介入するスペースがないので書こうか迷ったんですが、書きました。
キリがいいところが見付からないのでここで一旦きます。

1・5・2 招待する魔法使い（前書き）

いいからバカテス本編進める馬鹿！って人には面白くない話かもしれません。

あと最初に宣言しておきますが、この小説における詩織と明久はくつつきません。くつかないつたらくつかないんです。これ書いてて「あれ？ 明久のヒロインって詩織だけ？」って思つたけど、くつかないんです。

1・5・2 招待する魔法使い

Fクラスで血の池を作るその噴水箇所になりそうな明久は必死に西村先生を呼び止めていたが、無情にも西村先生は教室を出て行く。今日はビーフシチューにしましよう。そう脳内で流れたわけのわからん考えを一旦流すと、そこには島田に詰め寄られる明久の姿が。

「手紙を貰ったの？誰からなの？どんな手紙なの？」

この様子を見たところ、手紙の主は島田美波ではないようだとなると残りは……

「……」

もじもじと明久が島田に詰め寄られている姿を見て俯いていた。
姫路瑞希があの手紙を？

「いいからおとなしく指の骨を　じゃなくて、手紙を見せなさい」

「ざ、斬新な脅しですね」

「人聞きの悪いこと言わないのシオ！」

「うですか？」

「あれ？」

「あの、吉井君」

「ん？なに？」

そこには先程から変わらず恥ずかしそうな姫路瑞希の姿が。まさか「」で「その手紙は私が書いたんです」ととても皆曰するのか！？

「その…………できれば、ですけど……私にも手紙を見せて欲しいです…………」

「…………え？ 姫路さんが書いたんじゃないんですか？」

「ち、違いますよー。そりゃあ練習として書いた…………って今はそんなのどうでもいいじゃないですかー吉井君ー。」

「その…………」めん

心底申し訳なさそうに謝る明久の姿に詩織は感動していた。手紙の主に迷惑をかけない為にも自分以外の他人には決して中身を見せない。

これが噂に聞く日本男児、そしてSAMURAIの卵だとでもいうのだろうか。

「でも、でも…………」

「いらっしゃる姫路さんの頼みでも、『』ばかりは」

「でも、私は吉井君に酷い」としたくないんですけど……。」

「ちょっと待つてー姫路さんまで僕に暴力を加える」とが前提なの！？」

「ほらそこのピンク頭。Fクラスに入った当初の清らかな心はどこにいったんですか」

明久と詩織でツッコムものの当の姫路は手紙に集中しており、あまり聞いていない。

たぶん手紙を要求してYESというセリフしか聞こえないのだろう。「皆、ちょっと落ち着け。今問題なのは明久の手紙を見ることじやない」

「さすが雄一！僕を助けてくれると信じていた！」

手紙を見ることが問題じゃないと言い張る時点でロクでもないことを考えてるような気がするんですが。

「問題は、明久をどうグロテスクに殺すかだ」

「前提条件が間違つてんだよ畜生！」

こんな殺人鬼だらけの場所にいられるか！と言わんばかりに教室から出て行く明久を追っていく殺人鬼一同。

実際死亡フラグでもなんでもなくこんな場所にいたほうが死亡フラグである。

「しかしあの手紙、いつたい誰のですかねえ？」

確かに人間としての魅力はある明久だが、現在彼に魅力をもっているのは島田と姫路くらいしか思いつかない。

この文月学園に第二勢力がいるともいうのだろうか。

「…………」

どうしても気になつた詩織は席を立つて靴箱へと向かうことにする。そこで詩織は衝撃の事実を知るのであつた。

「うう……僕の青春……僕の彼女……」

靴箱へノロノロと重い足を運び、ブツブツ咳いでいる人物は明久。ボロボロの制服が明久の心情を表しているようで、周囲一帯に負のオーラをばら撒いている。

「明久君」

「うう……シオ?」

「はい。今日は大変でしたね」

(……なんでそんなに哀れみの籠つた目で見られるんだろう)

「つきましては、我が家の食卓に御招待しようかと思いまして。お泊りでもいいですが」

「行くー!」

即答だつた。

ג' ינואר ۱۹۷۸

卷之三

門前についてここが自分の家だと説明した瞬間に固まつた明久の襟首を持つて中に入る。

門から本宅まで結構な距離があり、一もなればねるテレビポートを使つてゐるのだが客人がいるからそういうわけにもいかない。

「はう！いつのまに家の中に……これがセレブか！？」

「何ですかセレブがって。私が引つ張つてきましただけですよ」

気付けば門から家まで移動していたのを驚いた明久だが、どこまでもこういう豪華な物に耐性がないようだ。

「しかし、凄いねこの家……凄いオーラが満ちている」

「そうですか？」

「うん。凄く大きくて凄く高そうなものがいつぱいだし」

「……あの、凄い意外の褒め方ないんですか？」

「…………」

田を逸らされたのできつとないのだらう。

「結構成金主義みたいで、私はあんまり好きじゃないんですけどね」「やうなの？」

「はい。これでもかといつくらい置かれてる調度品の数々は時たま来るお客様にレッドフィールド家の威光を示すものです。
お金持ちは誰もが好き好んで高い家具使ってるわけじゃないんですよ。」
の絵とか私にはやつぱりですし」

有名な人が書いたらしいんですけどね。

そう付け加えて明久を先導しながら密部屋へと案内する。

「」
「」
が明久君のお部屋ですね。今日は執事を待機させておくので何か用があつたらそちらへお願ひします。呼べば出てくるので」

「え？ シオは？」

「これから晩御飯の準備です」

「料理長は？」

「……お金持ちに何の幻想を抱いているのかは知りませんが、私だつて料理くらうします。まあ食材は豪華ですから楽しみにして結構ですよ」

「じゃあ僕も手伝つよ」

「今日の明久君はお客様ですからダメですよ。一応その部屋にゲームやアニメがありますので、暇なうそりうど

そういう残すと詩織はその場を後にした。

好きにしてこいとも言われたけど、どうしよう。

「……これ、いくらするんだ？」

座り心地のいいベッドの感触に思わず疑問が漏れる。
といつか

「何したらいいんだ？」

暇を潰せそうな何かを探して見回し、ホテルのような場所だと感想を抱いて一言。

「……ゲームするって何か違うよね」

あまり何もない 寝室だから当然 ので気持ちがゲームへ傾きかかるが何か違うと思いなおす。

「んつと、『ロロロロしてればいいのかな?』

普段味わえないベッドの感触を「ロロ、ロロと転がりながら確かめる。最初の数分だけは楽しかったがそれもすぐに飽きる。

「……」

「はっ！？」

気付けばいつもと同じようにゲームをしていた。

「だ、だってストートファイーの新作があるから……」

誰にしているのか知らないが呟嗟に画面に向かって言い訳を始める。

「……あんた面白そうね」

「うふ？」

その様子を面白げに見ていたのは一人の少女。
シオと同じ栗色のポニテに藍色の皿。
妹かな？

「妹さんかな？」

「そうよ。私はクリス＝レッドフィールド」

「僕は吉井明久。明久でいいよ」

「言われなくてもそうするわよ。私達はファーストネームで呼び合
うほうが慣れてるし」

外人さんってそういうもんなのかあ。

「ところで明久、あんたおねえ……じゃなくて、あの人とどういう
関係？」

「あの人って……シオのこと？」

「そうよ」

兄のことを「あの人」なんて呼ぶなんて、仲が悪いのかな？

「クラスメイトで友達かな」

「……本当にそれだけ？」

「え？」

「私、あの人気が実家に人を連れてきたことなんて一度も知らないん
だけど」

「ほえ？」

そう言われても、僕にも何がなんだか。

「まあいいかな。あの人が連れてきたっていうなら、大丈夫よね」「一人で納得してもらつてるところあれなんだけど、僕にも説明してくれる？」

「嫌よ」

「即答ー!?」

1・5・2 招待する魔法使い（後書き）

どうしてこうなった！？
……。

おかしい、ラブレター事件で最後の屋上だけちらつと参加して終わりにしようと思つてたはずなのに、気付けば明久をレッドフィールド家へと招待していた。

ポルナレフ状態に驚きながらも意外と長い内容に驚愕。
もう一回きりなきやだめだよね、これ。

1・5・3……え？（龍書き）

今回ばかりは「龍」の意味が「龍」だった。

あれからクリスちゃんとあらゆるゲームで対戦し、その全てで敗北した。

「……クリスちゃん、マリオカートのコース通りに走らないの？」

「え？ キノコダッシュでコース外走つてショートカットって常識でしょ？」

僕もゲーマーの自覚はあるけどいくらなんでもついていけない。格ゲーをすれば通常コンボでHPの半分を削られ、レースゲームをすれば謎のショートカットで周回遅れで負ける。

さらにパズルゲーやクイズゲーでは一度も勝てない。
畜生！ レッドフィールド家の人は化け物か！？

ピリリリ

「ん？ おね…… あの人から電話ね。ちょっと待つてて」

そう言つと先程まで僕をフルボッコにしていたコントローラを手放して受話器をとった。

「うんわかった

クリスちゃんは一言返すと受話器を置いて言った。

「晩御飯が出来ただし、行くよ」

「美味しいー・美味しいよとつてもー。」

「凄い食べっぷりですね。秀吉殿から聞いてはいましたが、そんなに食生活酷いんですか？」

「昨日の晩御飯は塩と砂糖だつたよ」

「……お姉ちゃん、この人そんなに貧しい生活送ってるの？」

「……私もそこまでとは思いませんでした」

レッドフィールド兄妹が何かを囁きあっているが、僕は今日の前のカロリーを摂取するのに忙しい。

「ああ、明久君言こ忘れてましたが」

「うん?」

「決して2階に上がらないでくださいね。防犯上の理由がありますので」

「うそわかった。とにかくそれも食べていい？」

「え？ あとお風呂は明久君の部屋を出て右手のほうにこまめに

たら案内がありますので、そちらに従ってください」

「うん」

「ふう、お腹いっぱいだ……」

満腹状態になつたお腹をさすりながら椅子に深く腰掛ける。

「お粗末さまです。食器ほうは使用人の方が片してくれますのでお部屋に戻つておいでくださいね」

「うん？僕も手伝うよ？」

しても、ひつてばかりじゃあれだし。

「いえ、むしろ手伝わないほうが助かります」

「やつよ。ちゅうどつちば特殊だから」

クリスちゃんもシオの言葉に追従するように付け加える、
特殊ってなんだろう?

まああまり深入りしてほしくなさそうだし、ここは御好意に甘えるべきだよね。

「うん、ありがとう。それじゃあ部屋に戻つてるね。シオはこれからどうするの?」

「私ですか?これから宿題をしてお風呂に入る予定ですが」

「宿題かあ」

今日出された課題を思い出す。
てきとうに埋めて提出してまた怒られるんだろうなあ。

「あ、そうだシオ。僕と一緒に宿題やらない?」

チラッとしか見てなかつたので断言は出来ないのだがシオは総合教科の点数が10000点を越える超天才だ。

宿題なんてぱぱっと片してくれるに決まっている。

「構いませんよ。クリスちゃんは何時も通りにして、サボつたらダメですよ?」

「はあー」

「ですから」「が……」

シオの部屋で宿題をしようと思つたのだが、シオの部屋は2階にありますので明久の客部屋であることになつた。

しかしシオって何かいい香りするよね……違うー？

僕はノーマルだ！

「なるほどなるほど。ならいいね？」

気を取り直して宿題に集中する。

「ああ、これはこの公式使うんですよ。一度この公式で整理してみてください」

「えっと、じうだから……」

「明久君。計算間違つてます」

「え？ 本当だ。…………。これでいいっ！」

「合つてますよ。じゃあ次は……」

宿題はあとは単純な計算問題だけとなり、シオは疲れたように背伸びをした。

「うーん、もう結構夜遅いですね。私はお風呂に入ります」

「え？ 僕も　」

行くよ。

そういう終わる前にシオは部屋から出て行った。
どうせなら一緒に入ればいいのに、そう思いながらシオを追いかけ
て扉を開ける。

そして左手にある廊下の向こうのある部屋に入つていったのを確
認してから宿題を終わらせるためにペンを握る。
簡単な問題なので僕にだつてすぐに終わるはずだ。

「…………。よしだきた」

すぐによつ割には時間がかかったけど、シオもまだ出てないだろ
う。

客部屋を出ですぐのところに着替えと洗面用具が置いてあつたこと
に戦慄しつつシオの入つていつた場所へと向かつ。
お風呂場らしき場所の扉をあけるとそこは銭湯のよつな脱衣所があ
り、風呂場の中からは鼻歌が聞こえてくる。
まだシオは入つてゐるらしい。

ここは驚かせるべきだろう。

僕は音をたてないように服を脱ぎ、タオルを腰に巻くと勢いよく浴
室へ踏み入つた。

「シオ！ 僕も入りにきたよ！」

若干湯氣で曇つてゐるもの浴室は広く完全に視界を遮るには至ら
ない。

だからだろう。

その方向を見て明久が固まつたのは。

「.....え？」

三

卷之三

身体を洗っていたのか身体を泡だらけにしているシオ……ではなかつた。

在してからた
一つかる あつぱー！

... 10

「……………？」

「 わせああああああああああつー！」

「すすすすすいません！まさか女性が入っているとは思いもよらなくて、決して覗こうとしたわけじゃなくて……」

「いいからあー出でつてよおー馬鹿ーつ！」

小さいながらも女性らしい肉付きをした彼女に涙目で石鹼を投げられながら僕はその場を後にした。

「すいませんでしたーっ！」

「…………あれ？ シオはどう？」

浴室から出て脱衣所で服を着直してから明久は思わず脱衣所に置かれた服を探してしまう。ぱぱっと探して見付かったのは一つの文理学園の男子制服。

「…………あれ？」

なにさつきの女の人の服はどうにいつたんだ。そう思い一つ一つ籠を覗いて女の人の服を探す。

「…………明久。何してるの？」

「何つて、今お風呂に入っている女の人の服を……」

「…………」

「…………ち、違つ！ これは罷だ！」

「黙れ！」の変態…」

「うばあああああー？」

最後に見えた光景は拳を輝かせて振りかぶるクリスの姿だった。

「それで、何か申し開きは？」

「ひっく……ぐすり、うつ……」

今だ泣きべそをかいている詩織に「王立ちしているクリス。そして正座してこる明久と場は混沌と化していた。

「えっと、僕はシオの後を追つてお風呂に入ったんだ」

「その行為がダメって言つてるのよー。」

「ええーーー? なんで? — ビリして? —」

シオとお風呂に入つて何でダメなの!?

「まだ気付かないの! ? いい? よーく、聞きなさいー。あんたがシオだと思つてゐの? いこないこれよー。」

グスグスシクシクと泣き声まで出していく女性に罪悪感を覚える明久だが、その発言にはさすがに眉を顰めた。

「どう見ても女性じゃないか。あと本当に悪かったと思つてますか

「いたせやんでー?」

「……一つ聞くけど、あんたこはお姉ちゃんがビックリしてたの?」

「え?お姉ちゃん?」

「あんたの言つしたの」と云ふ。

「ロングポニテで」

「そのままね」

「ひょろりとした身体をしてて」

「胸以外はそのままね」

「でも結構田が釣りあがつて鋭いイメージが……」

「それよ」

「じじビシッと明久の指差すクリス。

え?それって?

「まず大前提としてお姉ちゃんは魔法使いなの」

「……?馬鹿だなあ、そんなのいるわけないじゃないか

「もう一度食らいたい?」

そう言つとクリスは右手を輝かせて振り上げる。

「（パンパン）」

「わー。それでお姉ちゃんは男として登校してたわけだけど、よく思い出して。お姉ちゃんが召喚獣を召喚した時。名前はどうなつてた？」

「どういって……」

言われて向とか思い出すもんとこで、出でてくる。

「詩織……詩織＝レッジフライルード。」

「わー。やすがにそつちまでは弄くれなかつたみたいで、詩織がお姉ちゃんの本名よ」

「え……嘘でしょ？」

「じゃあなんで詩織なんてバリバリの女名でんた疑問に思わなかつたのか分かる？」

「うごえばそうだ。」

シオと名乗つてたのに詩織なんて名前で表示されてた時点で誰もが疑問に思はずだ。

「答えは簡単。お姉ちゃんのことを知らない人間はお姉ちゃんを男だと思つ魔法をかけてたのよ。」

だから例え女の名前が表示されてたとしてもお姉ちゃんを男だと思つている限りは疑問にも思わない。

明久がお姉ちゃんの胸が平らに見えたこと、釣り目に見えたこと

は明久がそういうのが男だと思っているからよ。

つまり明久がもし男ならこういう特徴が男らしいと思いつ姿を無理がない範囲で見ていたのよ。

実際にあんたのクラスメイトに聞いたら分かること思つけど、詳細な容姿を聞いたら全員バラバラのはずよ。わかつた?」

……

「クリスちゃん」

「何よ」

「『めんもつ』一回言つて」

「ゴッドフィンガー……！」

間髪いれずに掴まれた顔で謎の衝撃が加わり、意識が遠くなる。

次に目覚めた時は既に朝でFクラスのミカン箱の上だった。

「つてことがあつたんだ」

「早朝からFクラスに来て寝てた上、まだ頭が夢の中なのか」

「違うよ…本当だよ！あれから僕と田を合わせてくれない詩織に何

度も謝つてよひやへ許してもうれたんだからねー。」

「はいはー。お前の脳内彼女詩織に許してもうれてよかつたな」

「違うよー。脳内彼女じゃないよー。」

「しかも現実にいる男の名前を変えてまで……お前、そっちのケがあつたのか？」

「だああああああつー。」

雄一に話してみたが当然理解されなかつた。

オマケ

「まったく明久の妄想癖にも困ったものだ。しかし詩織がどこかで聞いたような」

さらばオマケ

詩織は明久の靴箱の前に立つと、過去視の魔法を使った。

正確な日時を入力した上で自身の視界の範囲のものしか見れないと
いう欠点があるものの型にはまれば便利な魔法だ。

これを使って詩織は明久の靴箱にラブレターを入れた人物を見よう
としたのだ。
しかし……

「…………」

自らの視界に写ったその光景はあんまりにもあんまりな光景だった。
乙女として恥ずかしい話だが口が開いて呆然としていたことに数秒
気付かなかつたくらいだ。

視界にはキヨロキヨロとラブレターと靴箱を確かめながらそれを入
れる男の姿が。

(…………確かに明久君の美少年っぷりってそういう方面に人気出
そうですよね)

私くらいは優しくしてあげよう。

そう思つた詩織であつた。

1・5・3 ……え？（後書き）

作者「シオは実は、女の子だったんだよ…」

明久「な、なんだってー！」

読者「（んなの知ってるよ……）」「

シオリンも女の子なんですよという話。

明久に魔法＆性別バレイメント。魔法には半信半疑ですが。

シオリンは前世の男の性格と現世で女として作った性格と現世で自然に作られた女の性格の三つが存在しています。

いつも出でるのは女として作った性格で、今回出でたのは最後の詩織本来の女としての性格です。

普段男の性格がこの性格を封殺してるのでですが、ひょんな拍子に出てくることがあります。

補足説明として、詩織が召喚獣の名前を弄れなかつたのにはわけがあります。原作では明久がテストで名前を間違えて提出した時に召喚獣の名前が変わつていたことがありますのでそれを知つてゐる人からすれば「あれ？」と思つ出来事なので付け加えました。

一章オリキャラ紹介（前書き）

誕生日はわざとたりと。ひ。

都合が悪ければ誕生日が変わるとあるかもしけないので、あくまで暫定ということ。

本編で出す予定のない裏設定もチラチラと乗せてくる。

基本的に既に投稿されている話のネタバレを含むので一話毎として開くのはあまりお奨めできない。

一章オリキヤラ紹介

詩織＝レッドフィールド

髪：栗色のボーネ。サイドではない

目：藍色

誕生日：7月7日

前世が魔王（なおりりの意味）で転生したT.S系転生主人公。転生した当初は意識がなく、3歳頃から徐々に追憶する形で前世のことと思い出していく。

完全に思い出してからは男としての意識が前面に出で、よく家族のことを見つめながら困らせていた。

今では女であることを受け入れている。

前世の男の性格と現世で女として作った性格と現世で自然に作られた女の性格の三つが存在している。

普段は作った性格が表に出ることが多く、男としての性格は荒時などにたまに出てくる。

最後の自然に作られた女の性格は男の性格に封殺されてることが多いがひょんな拍子に出てくることがある。

いわば詩織が前世の記憶を持つていなければこう育っていたであろうという性格で、案外泣き虫。

幼い頃に雄一と翔子と出会っており、面識がある。

翔子とはその時から連絡を取り合っている。

現世では魔法使いであることを隠す気がなく、裏世界やそこそこ大きい企業では超有名人。

文月学園の召喚獣システムも詩織が作ったと勘違いしている者も決して少なくはない。

バカテス世界にあるリリカルなのはというアニメの主人公に非常によく似ている。

妹のクリスがオタクなこともあって文中では語られていないが高町

なのはコスをよく着せられている。

髪の毛が長いのもその影響。本人は鬱陶しいから切りたいと思つて

が、システムである詩織はなんだかんだでクリスの言つとおりにしている。

召喚獣は0点から始まりダメージを受けると見かけ上点数が回復し、取得点数まで到達すると消滅する仕様。常に全力は出せない欠点である。

さらに武器はリリなのの如くレイジングハート（変形機構まではつけられなかつた）。鈍器としての攻撃力は低い。あと喋らない。威力に比例して太くなり、一度照準を合わせたら撃ち終わるまで動けなくなるデイビンバスター。

周囲の味方から点数を奪い、一時的に攻撃力へ変換する腕輪機能スターライトブレイカー。

レイジングハートと接触した部位を空間に固定するバインド。但し拘束する力は召喚獣の点数に比例し、また武器は拘束できない。

現在の点数／50（総合教科だと500）の数だけ出せるアクセルシユーター。但し攻撃力は一律50（または500）固定。

自身にダメージを与える（見かけ上の点数は回復）ことによつて手つ取り早くブーストするブラスターシステム。

相手を強制的にフィードバックするようにする、つまり観察処分者にして召喚者ともどもダメージを与える殺傷設定。

あと一応だが飛べる。

以上9つが詩織の召喚獣の特徴である。

レイジングハートの扱いは明久が使つたとしても十全に使うことが

できず、魔法使いである詩織でさえも完全に扱えない。

これは一人チートして無双とかが嫌いな詩織がそのように難易度を非常に高くしたからである。

クリス＝レッドフィールド

髪：栗色のボーネ

目：藍色

誕生日：2月12日

詩織の妹で魔法使い見習い。

主に光魔法を得意としており、その中でもさうに肉体強化系を得手とする。

その姿はさながら東方不敗のシャイニングファインガー やら「レッドフィンガー」。

姉が魔法使いであることはあつさり信じたのに「前世が男なんだ」といい始めた時、病気かと思い救急車を呼んだ。

オタクであるが、これは何かと忙しいレッドフィールド家で一人寂しさを埋める為に没頭したのがアニメという設定がある。姉を尊敬し、憧れているので同じ髪型にしている。

自分が髪型を指定したんだろうとかいうツッコミはなしである。

前世が男と言つ妄言はいつか正すと決意している。

姉に「ご飯作るの手伝え」と言われそうなので、人並みに料理は作ることを秘密にしている。

黒谷 紜香

髪：金色

目：碧

誕生日：10月23日

詩織と何か関係があるらしい。

現在どこの規律が厳しい学園で寮生活をしている。

2・1 引き算もりが登校する話（前書き）

後書きには作者の方針のようなものが書かれています。

2・1 引き籠もりが登校する話

学園祭の出し物を決める為のアンケートに「協力下さい。

『あなたが今欲しいものはなんですか?』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師の「メント

なるほど。お客さんの思い出になるよつた、そういう出した出し物も良いかもしれませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本 × 成人向けの「写真集」』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか。

吉井明久の答え

『力口リー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機を感じられます。

詩織＝レッドフィールドの答え

『変態を治す薬』

教師のコメント

先生に相談で来る」とならして貰う。

静かな廊下を一人の少女が足音を鳴り響かせながら歩く。カーテンから漏れる光は既に朝であることを示し、僅かに少女を照らす光によって幻想的な光景が作り出される。やがて少女は一つのドアの前に立つと勢いよく開けた。

「お姉ちゃんこつまで寝てるのー? もう一〇時すぎてるよー。」

詩織＝レッドフィールド。寝坊であった。

「仕方ないじゃないですか。昨日まで連続昏睡事件にかかりつきりだつたんですから……ぐう」

「ほら寝ないの！久々のバトルで疲れたってのは分かるけど、そろそろ学校行かなきゃ不味いでしょー…もつ何日休んでると思つてるの！」

妹、クリスの言葉に熊さんのヌイグルミに抱きついていたまま寝惚けた頭で前に休み始めた曜日から休んだ日にちを計算し

「すぴー…………」

「お姉ちゃんー！」

「……一週間」

「違うよお姉ちゃんー！一週間だよー！？」

「……誤差です」

「50%近くの誤差なんて聞いたことないよーいいから早くご飯食べてー今まで付き合ってるんだからー！」

どうしても頭が起きない詩織にクリスは久々に運転手を呼び、学校までと命令すると車に詩織を放り込んだ。

図太いのか半覚醒状態の詩織はそれでも起きなくむしろ横になつて本格的に寝始めたくらいだ。

「…………」

姉のあまりにもあんまりな光景に全てを投げ出したくなる衝動にかられるもなんとか助手席に乗り込む。

「お姉ちゃん、あれで乙女だからね……」

普段は知つたことかと言わんばかりにオカルトや超常現象の類の事件はスルーするのが詩織なのだが、今回に限つては率先して首を突つ込んだ。

何故ならそれは少し前に吉井明久といつ人物が詩織の裸を見てしまつたことに起因する。

よつするに顔を合わせ辛い詩織は現実逃避をし、休む為の大義名分を得るために首を突つ込んだのだ。

実際事件に首を突つ込むまで詩織は乙女モード全開でしじうもないことで泣き始めるので大変だった。

あまりにも泣き虫なことを怒りつもんなら魔法を暴発させてそりこ泣くのでじうじよつもない。

「…………はあ」

その苦労を全て担うことになつたクリスとしてはたまつたものじゃない。

今日だつて詩織を起^さすのが遅れたのはそれらによる疲労によるものだ。

なんせこの姉、連續昏睡事件が終了する間際にへマやらかして精神攻撃食らつたのだ。

その時はなんでもなかつたらしいのだが事件が終わつて家に帰つてから何故か乙女モード全開。

ふざけるなと吼えるクリスを傍日にシクシクグスグスと今更になって精神攻撃がぶり返したのか異常に怯える始末。勘弁してくれ。

「お姉ちゃん、本当にもう大丈夫？まだ無理なうちは少し休んでてもいいんだよ？車の中でだけど」

もちろん最終的には学校に行かせる。

そつと言外に言い放ちつつクリスは詩織と共に校門を潜る。

「大丈夫ですよ。たすがにそろそろ通常運転に戻らないといけませんから」

「…………何があつたらすぐに連絡してね」

本当はでもなんでもなくただのお姉ちゃん大好き娘のクリスは心配そうに言うが、たぶん詩織にその心は届いてない。何故なら今詩織は意識が眠っているほどではないが心底疲れしており話を聞いてないからだ。たぶんいつもの半分以下の思考力だろう。

「お姉ちゃんは上なので。クリスちゃん、しっかりお友達作るんですよ」

「ナレ」は勉強頑張るとかじゃないの？」

「だって必要ないですよね。高校生レベルの教育なんて今更ですし

金持ちの財力に物を言わせた英才教育なめんな。

「あれ？西村先生？」

階段をあがつたFクラスの前に立つてていたのは西村先生その人である。

なんか結構縁があるなあと思いつながら詩織は話しかける。

「どうしたんですか？」

「レッジフィールドか。今教室に入らうとしていたところだ」

「はあ」

「せつとき学園祭での出し物を決めるように言つてきてな。時間がかかるだらつから出てたんだが、そろそろ決まる頃かと思つてな」

「やつこえはそろそろ学園祭ですね」

文月学園の……というか学園祭といふものは初めて体験する。いつたいどんな事をするんだろうとワクワクする気持ちがどんどん膨れ上がっていく。

「昨日までレッジフィールドは実家の手伝いをしてたんだってな。今回はあるの連續昏睡事件と聞いていたが、怪我はないか？」

「はい。特に問題なく解決しました」

「そうか。それはよかつた」

実際は精神攻撃を食らつたのだがそこは汚点なので話さない。

「今はどうな案が出てるんですか?」

「分からん。多少心配だが、売り上げによつてはFクラスの設備を改善できるからやる気はあるはずだ」

それは確かにやる気上がるはずだ。

元々設備が不満でAクラスに戦い挑むといつ無謀をした馬鹿の巣窟なので、間違いなく全力でその餌には食いつく。

ガラガラと音をたててFクラスに入る。

教卓に立つていたのは明久と島田美波の二人。

この時点でかなり嫌な予感がするのだが、それでもと黒板に書かれた文字を確認する。

【候補? 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補? ウエディング喫茶『人生の墓場』】

【候補? 中華喫茶『ヨーロピアン』】

「…………」

「…………補習の時間を倍にしたほうが良いかもしれんな

「え?これが学園祭の普通じゃないんですか?……よかつたです」

「見ろ、レッドフィールドが変な誤解をしたじやないか。倍ビーム
か3倍にしたほうが良いな」

『せ、先生!それは違うんです!』

『そりです!それは吉井が勝手に書いたんですね!』

『僕らがバカなわけじゃありません!』

そうですか?

「馬鹿者! みつともない言い訳をするな!」

さすが西村先生。

文字通りみつともない言い訳をしようとしているFクラスを一喝し、仲間を売ろうとするその魂胆に怒声をあげている。

「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言つてるんだ!」

「…………」

西村先生って実はFクラスの馬鹿な生徒が嫌いなんだどうか。

2・1 引き篭もりが登校する話（後書き）

一章とうとう開始。

一章と二章の間に存在している連続昏睡事件編はある程度の要望がない限り絶対書けません。

そもそもこれ、そういうバトル小説じゃありませんし。

私はバカテスは召喚獣バトルと学校生活の騒動を中心の小説だと思っているのでその方向を外す気は（たぶん）ありません。

今後魔法バトルがある場面があったとしても、ある程度の要望がない限り丸々カットされます。

詩織の前世の話とか超シリアルな過去とかもそっちに突っ込んでます。

バカテス本編でそんな重い話されても読者困るだけだな……と思つたので。

書く気ないなら要望がない限りなんて書くんじゃねえよクソがとか思う人もいるかもしれません、一応構想はできているのでバカテス二次の趣旨から一時的に外れることになつても見たい人がある程度いるなら書いてもいいかなと思つてingからです。

2・2 彼女の参加理由

以下の問いに答えなさい。

『バルト三國と呼ばれる国々を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア ハスティニア ラトビア』

教師のコメント
そのとおりです。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『香川 徳島 愛媛 高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう。

詩織＝レッドフィールドの答え

『バルト第一国 バルト第一国 バルト第三国』

教師のコメント

なんとか埋めよつと頑張つたのは分かります。

あれから西村先生の説得といふか利益を設備に回すといつ発言でやる気を出したFクラス一同。

多少騒がしくなつたものの多数決により出し物は中華喫茶となつた。詩織は密かにウェディング喫茶に手をあげていたので、若干残念そうにしながらもホール班になつた。

これは一部からの推薦によるもので、美少年のシオなら平氣だらうといつ推薦だ。

一方Fクラスの中には「美少年……？」と首を傾げていたものが數名おり、そろそろバレるかなと詩織は思つていた。

「うん？」

既に帰り支度をすませ、校門を出よつとした時、不意に詩織の懷に入れていた携帯電話が振動する。

この振動パターンは電話だが、いつたい誰からだらう。

「……明久君ですか」

厄介事の臭いがするので切つてもいいだらうか。

「はいもしもし」

『詩織……じゃなくて、シオ。少しいいかな』

「…………ええ」

明久に性別がバレてからと「うものの明久の第一声が「詩織」であることが最近とても多い。

馬鹿だから仕方ないのだが、じつ何度もされるとワザとかと邪推しあくなつてくるものだ。

『…………まあいいや。シオは召喚大会知つてる?』

「ええ、知つてますよ」

私も一枚噛んでますし。

そう心の中で呴いてその内容を思い出す。

トーナメント形式のタッグ戦で、召喚獣を使った学園外対象の「デモンストレーションみみたいなものだ。

文月学園の最大の特徴である召喚獣を一目見ようと来るお客様も非常に多く、文月学園のイベントの中でも一番大きなものだらう。もちろん学生側にもメリットがあり、優勝者には賞状とトロフィーと賞品が存在する。

さらに準決勝や決勝にもなれば大勢の観衆の下に対戦を行つこととなり、方法によつては自身をアピールするチャンスだ。

『実はそれに出で欲しいんだ』

「無理です」

考える間もなく断る。

『えーっ！？ちよつとは考へるとかしよつよー』

「…………。無理ですね」

『考えただけ！？な、なんで無理なの？』

なんで、と言いますか

「まず一つ、私にはパートナーがいません」

チラッと今朝に島田美波と姫路瑞希と話したのだが、どうやら彼女達は二人で出るらしい。

他のFクラスは点数的にいってもいなくとも変わらない存在になりそうだし、他クラスだと知り合いは翔子くらいしかいない。

しかし彼女は既に秀吉の双子の姉の木下優子とペアを組んでいるらしい。

なら現実的に優勝を狙えそうなペアは知り合いの中では存在しないのだ。

「そして二つ目、これが何よりの問題点なのですが、召喚大会は1試合」と教科が変わる仕様ですよね？あが私には曲者です」

詩織は異世界から転生したという関係上、歴史とか地理が大の苦手だった。

さすがに中学生レベルなら満点をとる自信があるので高校生レベル

ルとなると一気に自信がなくなる。

となればやはりそいつたときに頑張ってくれるパートナーがいなければ間違いなく詩織は勝ち進めない。

「そして最後に、私は負けるのが大嫌いです。明久君、そいつた頼みごとをするといふことは目標は優勝ですよね？」

『うん』

「私の目標が優勝になるなら、成功率を考えれば参加するに値しません。

作戦上負けるなら構わないので、目標を達成できないことは私にとって屈辱である他なりません」

どちらかといつと最後の理由が詩織にとって一番大事であった。

100%勝てる勝負は存在しないと理解しているがいくらなんでも勝率が低すぎる戦いに身を投じる気はなかった。

この身は違うが、かつては魔を統べる王であった存在。

負けることが許されなかつた自分のその気概は今もなお受け継がれていいる。

『そつか。なら仕方ないね』

「はい。それに明久君も参加するんでしよう、男なら自分で優勝するへりじと言つたらどうですか」

『うん。僕等とあたるまで戦つてもらつて、時がきたら棄権してもうねつと思つてたけどそつといふことなら仕方ないね』

「…………今、なんと?」

『だから僕等と戦つ時は棄権してもいい』

「…………」

『シオ?』

そうかそうか。

「つまり私は捨て駒扱いだつたわけですか」

『え?……ち、違う! 僕等が優勝しないといけないからシオには負けでもらつだけだつ!』

……その何が違うんだろうか。

「そうですかそうですか。ええ、わかりました貴方の魂胆は。……

……召喚大会では覚えておきなさい吉井明久」

携帯電話の向こうで『ちょ、まつ』とか聞こえてきたが、無視して切る。

よろしい。ならば戦争だ。（クローケーク）

「…………ふむ」

携帯電話の通話画面を一回消して電話帳から藤堂の文字を探す。そして電話をかけると

『どうしたんだい』

藤堂学園長がすぐに出てる。

よく仕事で連絡を取り合ひ詩織と藤堂学園長は直通で繋がる番号をお互い所持している。

「明久君が……つと、観察処分者がこちらへ召喚大会への参加要望を出してきました。心当たりあるんでしょ?」

『何のことだい?』

あくまでシラを切る気か。

『『白金の腕輪』』

『…………』

「まさかとは思うのですが、バグを直さないまま白金の腕輪を賞品に出したんじやないですかね?」

だいたい明久が召喚大会に出るという時点できな臭いものを感じていた。

その上詩織に試合で負けるところまでの勝利への執着っぴは詩織でなくとも疑問に思ははずだ。

明久がもしもそこまで召喚大会の優勝にこだわるとしたら、考えられる理由は一つ。

まず一つは明久がどうしても召喚大会の優勝賞品を手に入れなくてはならない事情がある。

一つ目は優勝そのものに明久自身に対する何かのメリットがある。これは例えば優勝すればお小遣いをあげてあげるだのそういう事もあるだろ?つ。

この二つでおそらく正しいのは後者。

何故なら明久は先程電話をかけてきたからだ。

召喚大会の話は既に三日以上前に出たものにも関わらず今更、とう思いもある。

そもそも召喚大会の優勝賞品の白金の腕輪自体、詩織が前に駄目だしをした品だ。

詩織自身も召喚大会の賞品を見て、その項目に載っていた時によくこんなに短期間で修正できたなと感心したものである。

召喚大会で出す腕輪は「モンストレーション」の意味も含まれているので優勝者が起動する筋書きだ。

だがもしもそれのバグが直つてないなら？

直つてないにも関わらず既に優勝賞品として出してしまったのなら？

「状況を考えてみて明久君を焚きつけた人物がいるのは明らか。Fクラス以外となれば一番可能性があるのは西村先生です。時点で貴方です」

『ちょっと待つた。なら西村先生が先じやないのかい？』

「アホですか。貴方が一番胡散臭いんですよこのババア」

この理論もだいぶ無理矢理なことは理解しているが、魔法まで使って考察した事だ。

探査の魔法で今明久達の歩いてきた方向 学園長室があることを確認した詩織が学園長が犯人だと仮定してこじつけた真実。 実際結構間違つてないと詩織は思つてゐる。

「ですから明久君に必要なのは貴方が言つ優勝賞品、『白金の腕輪』の回収でしょう？」

白金の腕輪が直つてないのならそれが一番納得いくのだ今回は。

『で、どうしてほしいんだい？分かりきつてゐるんだろう？』

普段の詩織ならそんなこと知つても放置するのは確實だ。
となれば詩織は学園長にしてほしい何かがあるはずだと藤堂学園長
は睨んだ。

「簡単な話ですよ」

『ちょっと待つた。あの馬鹿どもの邪魔だけは勘弁してくれよ』

「大丈夫です。私の要求は

2・2 彼女の参加理由（後書き）

最後あたりがちょっと「チヤゴチヤ」してるのは作者の力量不足です。実際理論かいてたら「あれ？」って思つてよくよく考えたらおかしいことに気付き、「じゃあ魔法で学園長室にいたことに気がつかせとけばいいや」と半ば無理矢理に進める。

書き直すのが若干面倒だったとも言つ。

そして……「めんなさい。

2章で本格的に明久達と絡むとか言つてたが……ありや嘘だ。すまん。

今回は傍観までは行かないが、少なくとも明久 side に肩入れする」とはなさそう。

どうも2巻の話つて詩織が性別バレイメント完了させないと参加させにくいんですよね……。

そもそも常夏コンビなんて、詩織が本気で排除しようと思つたら社会的に排除されちゃいますし。上手い具合にキレさせずに詩織を常夏コンビと戦わせる文章が思い浮かばない・・・・・！

のわりに自然に性別バレイメントが出来る場面がないし、今回は全開のようすに傍観しつづラブルで参加ではなく、学園祭を楽しむ過程で明久達と遭遇するといった方針にしたいと思います。

ちなみに性別バレイメントがいつになるかは既に決めています。

2・3 Aクラスの中心で怒りを示す

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか?』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのものを用意し裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくとも。

吉井明久の答え

『プラジャー』

教師のコメント
ブレザーの間違いだと信じています。

詩織＝レッドフィールドの答え

『ウーディングドレス』

教師のコメント

何かの衣装と勘違いしてませんか？

詩織は屋台の食べ物を買い食いをして、機嫌だつた。
学園祭当日までに認識阻害の術式を大幅に弄つていて期日に間に合
うか不安だつたが何とか完成させられたことも一押ししている。

「ん~」

鼻歌を歌いながらタ「ヤキを一口。

冷静に考えたら自分で作つたほうが何倍も美味しいのだが不思議と
学園祭で買った食べ物は結構美味しかった。
そして

「あわわわ」

それらの幸福度は横に黒谷綾香がいる」ことがさらに一押ししていた。

「綾香、はぐれないよ！」にしてくださいね」

「……詩織ちゃん、手を繋いでもいい。」

甘えぬよハレ正月にだれつこて上田遣い。

背が平均より若干低め（女子基準で）の詩織よりさらに背が低い綾香。

金髪碧眼のイギリス人と日本人のハーフだ。
もせや小学生ごとなーいが、と思つてら仕方

もはや小学生ではないかと思われても仕方がないほどの童顔でもある彼女を見て、詩織は言った。

「タコヤキのほうが大事です」

「ひどい!？」

ふーふー言つてゐる綾香だが、その顔はだらしない程綻んでゐる。綾香は詩織とは久々に会つたので一緒にいるだけでも嬉しいのだ。今日の詩織は少女趣味の白いワンピースを着ており、白いブラウスにチェックのミニスカートを着込んだ綾香が並ぶと姉妹に見える。

「詩織ちゃん詩織ちゃん！あれ食べたい！」

「チヨコバナナですか」

まだ学園祭は始まつたばかりで、昼前なので屋台に人通りは少ない。なので当然チョコバナナの屋台も人が並んでいることはなく、屋台で座っている学生も散発的に客が来るものの暇そうだ。

詩織は「一本ください」と綾香を連れてチョコバナナを買うために

財布を取り出す。

「ところで詩織ちゃん」

「はいなんですか？」

「クラスのほうは手伝わなくていいの？」

「ああ、そんなことですか。」

「私は物資的な部分で援助しましたので、Fクラス代表には来なく
ても大丈夫だといわれましたから」

Fクラスが中華喫茶を経営しようとした時点で問題になつたのがF
クラスの設備の悪さである。

どうオブラーートに包んでも飲食店を営んでいい衛生設備ではないの
で、雄一にそれを話すと彼も困った表情をしていた。

そこで詩織が提案したのが机や畳等の客からまず文句は言われない
レベルの喫茶店の備品の提供。

何を思ったのかは知らないが雄一はそれにとても食いつき、頷きな
がら「これで保険は大丈夫だろう」と言った。

何の懸念をしていたのかは知らないが、詩織の提案はかなり助かつ
たらしい。

「じゃあ今日明日は一日中一緒にいられるの？」

「いえ、召喚大会にちょっとだけ出ますから、少しだけ待つてもら
うことになりますね」

「そりなんだー。あ、詩織ちゃん！これ見て！」

「はい？」

綾香の持つていたパンフレットのある部分を指差し、詩織へと伝える。

【メイド喫茶『』主様とお呼びー。】

「…………」

メイドってこんなに高圧的なのがこの世界の常識なのだろうか。
少なくとも前世でメイドというと淫氣のような存在で、間違つても主人の邪魔や話し相手を担当する相手ではないはずだ。

「メイドってメイドー！綾香気になるよー。」

「お嬢様の綾香にとつては見慣れてるのではないのですか？」

「ふー。違うよー。綾香は素人のメイドが見たいんだよー。」

……何が違うんだろうか。

「素人のメイド、響きがいいよ……。し、詩織ちゃん？今日帰つたらメイド服きてみない？」

「…………」

「綾香見たいなどつても」

「…………」

小さい頃はまともだつたはずだ。

そう呟き、残念に育つた綾香を見て僅かに涙を零した。

綾香にせがまれてメイド喫茶に来た詩織。

2年Aクラスが経営している喫茶店だが、その内装はAクラスであること権利をフルに使って小奇麗であり、涼しげな空間が広がっている。

それにAクラスは女子が多いので、花もあって足を運びやすい喫茶店といえるだね!。

「…………おかえりなさいませ、お嬢様」

「翔子ちゃんじゃないですか。とても似合つてますよ」

「はるはるーーお久ー、しょーちゃん

手をブンブンと振つて全身でアピールする綾香に翔子は僅かに微笑む。

「……久しぶり。二人?」

「はい」

「……こつちか」

ウェイトレスをしている翔子の案内で席についた詩織と綾香は出されたメニューを一人で見る。

結構凝った装飾をしているメニューは、本当の喫茶店で使われても違和感のない代物だ。

「ん……私はレアチーズケーキにします。綾香はどうしますか?」

「ショートケーキ!」

「……」注文を繰り返します。レアチーズケーキが一つ、ショートケーキが一つ。以上でよろしいですか?」

「はい」

「うむ」

最初から決めていたらしに綾香は席を立ち上がってまで主張した。まあこの子はいつもこんな感じだし。

顔と背丈……というか外見が完全小学生なのだが、中身も小学生といつまるで成長していない少女なのだ。

それからしばらくして秀吉似の女の子　木下優子でしたつけ?が笑顔でケーキ二つとそれに合わせるように紅茶を置いてくれた。紅茶のほうは頼んでいないので聞いてみたのだが、翔子の奢りらしい。

「気を使わせちゃいましたかね」

「いいんじゃない別に。詩織ちゃんも似たような感じだし」

「そうですか?」

あ、このレアチーズケーキ美味しい。
プロレベルとまではいかないものの素人が作るにしてはそれなりの出来だ。

向こうのショートケーキはどうなんだろうか。

「綾香」

「うひー？」

「はい、あーん」

フォーカーに刺さったレアチーズケーキを綾香の口元に差し出すと綾香は素直に口を開けてそれを食べる。

「もぐもぐ。甘すぎず、酸っぱすぎず。悪くないね」

「でしょ? そつちはどうすか?」

「うー。あーん」

あーん、と口を小さく開けて出されたショートケーキを頬張る。
レアチーズケーキと同様なかなか美味しいが、若干甘すぎな気がするけどそこは好みの問題だらう。

ただ紅茶、てめーは駄目だ。

「残念ですね」

「うー。仕方ないよ。紅茶をマトモに淹れられる高校生って普通いないし」

ケーキの完成度に比べたら雲泥の差だ。

恐らくパックかなにかで作ってるのだろう。

まあ学生が喫茶店で出すならそれが一番手っ取り早い。

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！』

「はい？」

「うん？」

いきなり後ろの席で大声で話し始める一人の男。

こういうマナーのなつてない人はどこにでもいるもんだなと自己完結し、皿の前のケーキを一口頬張る。

『やつだな。やつをいった二・Fの中華喫茶は酷かったからな！』

『テーブルはちゃんと拭いてないし、埃がつもつたもんな！』

うるせえ。

綾香も同様のことを思つたのか困つたように顔をハの字にして綾香から見て正面の席をチラチラと気にしている。

『あの店、出している食い物もヤバいんじゃないのか？』

『言えてるな。食中毒でも引き起しちゃなればいいけどな！』

『二・Fには気をつけろってことだよなー。』

無視無視。

だいたいこんな悪評をばらまいてるからってFクラスの人間が過剰に反応すれば悪化するのが目に見えている。

たぶんFクラスに人が来なくなつた雄一が疑問に思つて対処してい る最中だろ。」

ならば詩織がするべきことはスルーだ。

イライライライライライライ

『とにかく汚い教室だつたよな』

ええ。今はともかく普段は汚いですよ。

『ま、教室のある旧校舎も汚いし、当然だよな』

そりやあ新校舎のほうが新しいんだから、比べれば汚いのは当然で すよ。

「…………」

「…………」

詩織の怒りが頂点に達しそうとしている時、綾香は静かにショート ケーキをパクついていた。

「ついこの時の詩織に下手なちょっかいをかけられれば巻き添えを食いつのめ自分だと学習していたからだ。

（「うーん。あの一人、死ななきゃいいんだけど）

「お姫様」

「なんだ？　へえ。こんな子もいたんだな」

「結構可愛いな」

「お姫様、足元を掃除しますので、少々よろしくでしょうか」

「掃除？」

男の一人が足元に一旦目を向けて

「さつあと済ませてくれよ」

立ち上がりうつとした時、ちょうど後ろにいた詩織の椅子に男が当たりそれは起きた。

「…………あ」

「うひー？」

「あん？」

「はあ？」

「ん？」

綾香、男一人と今テーブル下を拭こうとした店員。詩織の声につい顔を向け、その膝元を見る。

「…………」

そこにはレアチーズケーキで汚れた白いワンピースが。今日の詩織は男子の制服ではなく文物の服を着ており認識阻害もしない。

なのでマナーのなつていないうらしき男一人は素直に謝りつつと

「ふんー。」

「ペキゅー！？」

する前に拳で返礼された。

そしてもう一人の男が反応する前に

「ダークネスフインガー」

漆黒に染まつた右手が男を捕らえる。

頭を掴んだその手にどれだけの力を入れているのかメキメキと幻聴のよがよがしいまで聞こえている。

気がつけば最初の一撃で殴り倒した男の顔も左手でもつていい。

「「あだだだだだ！」」

「……イグニッショーン」

ボフン。

そんな擬音が似合う音がして詩織の黒く染まつていた両手が一気に濃くなり、そして小規模の爆発をした。

「え、えと。詩織？」

「……」

手足に力が入れられなくなつて人形のように重くなつた両手を離した詩織は光の灯つていない眼でウエイトレスを見た。ヤンデレアイやレイプ目とか言われそうな単色の目の詩織はそのウエイトレスを見た瞬間、すぐに正氣に戻る。

「……明久君」

「うん？」

「……もつ学校では私に話しかけないでくださいね」

「え？……ち、違つよ…誤解なんだよ詩織！雄一に頼まれたから着ただけだよ！」

「はい？……雄一君とそういう関係だったなんですか？」

『雄一』。浮気は許さない

『ちょっと待て翔子。お前は一部始終を見ていたはず』

その後、男一人は額に肉とかかれたり頭にブラジャーを瞬間接着剤をつけられたりしていたが、起きるとすぐに逃亡し、それを雄一と

明久が追つていった。

2・3 Aクラスの中心で怒りを示す（後書き）

綾香登場回。

通称『うにっ娘』。

……通称は今てきとうに考えた。

コンセプトは見た目は子供、中身も子供、性癖は変態。

バカテス2巻をおそらいで読んで介入ポイントを考えてたらやつぱり介入ポイント少なくて困りました。その中で悩んだのが2巻でどういう立ち位置にするかということですが

Fクラスでウェイター・ポジ 常夏コンビが死亡。プロ並の料理を作れるので料理人として覚醒 中華喫茶大繁盛 あれ?詩織の出番それだけにならね?

召喚大会に参加 前にも詩織が話した通り、なのなの召喚獣は苦手な教科では雑魚です。あれ?どうやって勝つの?

召喚大会そのもの自体、詩織参加で書き始めるとどうしても召喚獣バトルが多くなる予感がありますし、その場合ストーリーの関係上準決勝で常夏コンビ倒しちゃって決勝で盛り上がりにかけるんですね。いや、決勝は原作通りなんで描写しませんが。

ところでもし中華喫茶でホール班担当するとして、服は男か女かどっちにしたらいいんだろうか。

個人的にはチャイナ娘服着て恥ずかしそうにしてる詩織書きたいけど、まだシオなんだから自重必要なんだ。男装＆認識阻害でウェイターするのも面白くないですしねえ。

2・4 順序との併用……のままだった（前書き）

無視できないうらこりんな要素出でる気がするので（今更）、原作タグにリリなの加えました。

2・4 瑞希との会話……のはずだった

学園祭の出し物を決める為のアンケートに「協力下さい。『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのようになりますか？』

【？可愛らしさ　？統率力　？行動力　？その他（ ）】

また、その時のリーダーの候補も挙げてください。』

土屋康太の答え

『【？可愛らしさ】 候補……姫路瑞希＆島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうつかね。

吉井明久の答え

『【？可愛らしさ】 候補……姫路瑞希（×） 木下秀吾（×）

島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるところです。

詩織＝レッドフィールドの答え

『【？可愛らしさ】 候補……黒谷綾香 理由……小さくて口元

口と懷いてくるところが可愛くて少し苛めると涙目の上目遣いで睨みつけてくるのがとても可愛くて特に美味しいもの食べた時のフニヤリとした笑顔なんて最高で』

教師のコメント

裏面までびっしりと書いてありましたけど、自重してください。

坂本雄一の答え

『?その他（結婚相手）】 候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持つてきてくれたのでしょうか。

詩織は綾香を連れて各クラスの出し物を堪能しながら歩いた。さつきお化け屋敷に入った時に無銭入場客はメイド服をきた男だの話を偶然聞いたので詳しき聞いてみると明久であることが判明。さすがにFクラスであることがバレると悪評に繋がるのでお金は詩織が払つておいた。

何やつてるんだろうか明久と雄一は。

無銭入場してまでも入りたかったのか雄一は。

それも明久を女装させてまで。

「……変態ですか」

「「？」？詩織ちゃん？」

「なんでもないですよ。ただクラスメイトは馬鹿なだけじゃなくて変態だったんだなと思ってまして

「？」？」

「雄一と明久が『キて』いるところの話、案外笑い話にできないかもしない。

（とつあえず翔子ちゃんには学園祭が終わったら連絡してあげましょつか）

今連絡したら職務を放り出して肅清していくかもしれないで、黙だらう。

「詩織ちゃん、次は『』がいい！」

「2年Eクラスの中華喫茶ですね」

「詩織ちゃんのクラスでしょうか？」

「はー。まあ馬鹿の巣窟と化していますが、中々仲が良くて悪い連中です」

「…………？仲が良くて悪い？」

いつたいどつこつこつちや。

綾香が首を傾げていい気にせず繋いでいる手を引っ張つてFクラスへ向かう。

そしてFクラス前に着いた時、妙な光景を見る事になる。

「…………ぱつちり」

「つむ。これでこけるのじや」

「あれ、秀吉君ですよね」

Fクラスから出て行くのは何故か女子の制服を着た秀吉とカメラをもったムツツリー。

女子の制服を着てどこに行く気なんだ秀吉は。

そう思つた詩織はふと召喚大会のリストを取り出し、千里眼で対戦表と見比べる。

「…………翔子ちゃんと木下優子ですか」

双子だから入れ替わつて棄権でもする気なのだろうか。
さすがにそれはルール違反で失格の可能性高いですよね。
そう思った詩織は携帯電話を取り出して。

『…………もしもし』

「翔子ちゃん」

『…………詩織?』

「はい。木下優子さん、そこにいますか?」

『……いるけど、それがどうかした?』

「実は今」

「といつことなんですよ。さすがにFクラスが反則負けは勘弁したいので、注意しておいてくださいね」

『……わかった。ありがとひ』

「いえいえ。どういたしまして」

そう言い残して通話を切る。

仲間を売った形になるのだろうが、そもそも詩織にとってまだ翔子

> Fクラスの段階だ。

さすがにクラスメイトが負けるように仕込んだりはしないが入れ込む理由もない。

「中華喫茶バー ローランへよついそー。」

詩織と綾香を出迎えたのはチャイナ服をきた姫野瑞希。

ちょっと胸を出しすぎでH口くないかこれと疑問に思いながらも案内された席に座る。

案内を終えた姫野瑞希はそのまま別の席で注文を受けて急いで厨房へ伝えにいき、また新たに来たお客様の所へと行く。

先程秀吉とムツツリーーが出て、明久と雄一は召喚大会に参加している最中なので今は相当忙しいのだろう。

でもホールに女の子三人しかいなのはさすがに無用心…………三人？

「（）注文はお決まりですか？」「

元気よくツインテールの女の子。

こんな子はFクラスにいなかつたはずだが……外部協力者か？

「えっと、貴方はこのクラスの子じゃありませんよね？小学生ですか？」

少なくとも今の自分はシオ＝レッドフィールドではなく詩織＝レッドフィールドなのでそれ相応の聞き方になる。

「はいっ。葉月は小学生ですよ！」

小学生を働かせるのって高校生としていいのだろうか。

「Fクラスの人の関係者かな？綾香は黒谷綾香！あ、高校生だよ！」

「葉月は島田葉月です！」

キヤーと騒ぐ一人に苦笑をしてメニューに目を落とす。

この二人は波長……といつか精神年齢が非常に近いのか気が合いつようだ。

「オススメは胡麻団子でしたっけ」

「なら綾香それにする……」

「私もそれでお願いします」

「わかりました！」

元気よく応えた葉月は厨房へと小走りで行った。

「お待たせしました！」

「あれ？ 多いですよ？」

「これは葉月の分だけ言いました…もうすぐ馴鹿のお兄ちゃんが帰ってくるそつなので…」

よつあるヘルプ要員だったのだらつ葉月は馴鹿のお兄ちゃんをやらが帰つてくるから休憩しててこことこことだらつ。席に着いた瞬間綾香と喋り始める葉月に和みながらやひこくばと話しかける。

「その馬鹿のお兄ちゃんつてこいつのが、葉月ちゃんのトクラスの関係者ですか？」

そのお兄ちゃんとは仲が悪いのだらつか。

馬鹿のお兄ちゃんなんて……明久のことだらつか。

そういえば島田葉月と言っていたから、島田美波の妹だらつか。

あれ? なら馬鹿なお兄ちゃんは吉井明久って人で

「はーつー馬鹿なお兄ちゃんは吉井明久って人で

「ああ、やつぱつですか」

「チューをして将来を誓^{ハシメテ}い合^{ハシメル}た仲です!」

「うよつと待^{マダラフ}つひ。変態を殺^{ハサハス}してくる

あの糞野郎。

俺の裸を見ただけじゃなくて小学生を騙^{ハサハス}して源氏計画だと?
元男として、生かしておけん。

「し、詩織ちゃん落ち着いて! 男言葉になつてねー。」

「離せ綾香ー俺には変態を若狭湾に沈めるとこ^{アベ}崇高なる義務が!..」

「今の詩織ちゃん離すと絶対洒落にならな^{アベ}いことになるから駄目つ
ー!」

「H A N A S E!」

小さな身体で力いっぱい抱きついてくる綾香を出来るだけ傷つけず
に引き離そうとするも出来ない。

次第に綾香が抱きついてるので心が落ち着き溜息を吐いて席に座
る。

それを見て綾香も詩織が落ち着いたのが分かったのか同様に席へつ
いた。

「はあ……お手洗いで頭冷やしてきまーす」

「…………詩織ちゃん。そのまま闇討ちに行くのは駄目だよ」

「大丈夫ですよ」

2・4 瑞希との会話……のはずだった（後書き）

シオリン、雄一と秀吉を翔子に売るのお話。

ちなみにお気づきの人もいると思うのですが、シオリンはルール違反により失格を心配しており、ルールを破ることとは想定していません。

ようするにやるなら上手くやれって思っています。

今回はシオリンの判断で上手くこかないと思つたので辭退されました。

実際原作でも「」つ押しでしたからね……え？ 原作のほうはひとつなつた？

そりやあ元々情報提供者（たぶん教頭一派）がシオリンに変わっただけですから特に変化はありませんよ。

そして瑞希と会話をされたつたのに気付けば葉月と会話をしていた。

あるえー？

そして気付けばシオリンが男モード全開だった。

あるえー？

感想で書かれて初めて知ったんですが、戯言シリーズの青色サガヴァンとうちの綾香は無関係です。

Wikiで調べただけなのでどこまで似てるかは知りませんが、類似点があることは理解しました。

綾香について説明させてもらいますと、「元」「は本当に元」といつ考えた設定で、幼いなら舌つたらずだらつと女直に考えてできた口癖です。

登場人物を「 -ちゃん」と呼ぶのは綾香が幼いならこう呼ぶんじゃねと考えた結果です。

あと令嬢なのは詩織と昔からの知り合いの時点でそういうた類の人物であることが設定上殆どです。

バルセンは綾香をあくまで作者が考えたキャラと主張します。

2・5 ハキヤレシオソン降臨、満を持って（前書き）

やつ狂なこつて言つたのよ……。もうこいつはいた。

2・5 ブチギレシオリン降臨、満を持して

「ん……」

Fクラスへ戻る最中に軽く背伸びをして一息。頭は完全に冷えたようで、今では冷静に考えることができる。よくよく考えたら明久は馬鹿だが変態ではない…………はずだ。

「断言できないのが悪いと思つんですねよ」

他の人だつて同意してくれるはずだ。

そう自分を納得させながら綾香の下へと戻

「あれ？ 綾香がいませんね」

葉月ちゃんもいませんし、そう付け加えて椅子のところに綾香のシヨルダーバックが置かれていた。

バッグを置いてどこにいったんだろうか？

とりあえず待つてまじょう、そう思い席に座ろうとした時にムツツリーニの声が偶然届く。

「…………ウエイトレスが連れて行かれた」

「…………隨分物騒になりましたね」

本当に今日の文月学園の外来者のマナーは悪すぎではないだろ？
いや、Aクラスにいた男二人は内部の人間か。

「はあ。それで、誰が攫われたんですか？」

「…………？お前は確かに、Aクラスで常夏コンビを沈めてた…………」

「詩織＝レッズフィールドです」

「詩織だと？おい明久、この前言つてたあれだが、兄弟かなんかじゃないのか？」

あれってなんだろう。

そう思うが明久は苦笑いをしてその場を流す。

「シオとは同じ家で育つんですよ」

嘘は言つてない。

「で、誰が連れて行かれたんですか？場合によつては協力出来ると
思いますが」

「いや、それには及ばぬ。連れて行かれたのはFクラスの失態じや
からの。まったく、部外者が一人も連れて行かれるとは…………」

「部外者ですか…………部外者？一つ聞きたいんですけど」

「何だ」

「ひょっとして葉月ちゃんともう一人、同じ席に座つてた子が連れ
て行かれたなんてこと、ないですよね？私の連れなんですが」

「…………」「…………」「…………」

明久に雄一に秀吉の視線がムツツリーに集中する。

「…………連れて行かれた」

ムツツリーの返答にそれぞれが不甲斐ないと自分を責める。
あくまで部外者の人間、しかもFクラスの身内の連れなんてFクラスとは無関係といつても同じじゃないか。

そんな中、明久と詩織だけが違う反応をしていた。

「な…………」

「明久？」

「なんて愚かな…………」

「は？」

「どうしたのじゃ明久」

「…………？」

表情と身体を固めたままの明久の意味不明な言葉について明久の見ている方を見る。

「ふ、ふ、負腑負不腐譜」

「で、出たーつ！？」

詩織が魔法使いであることを知っている明久は右手が疼くのを感じながら思つた。

Bクラスの時の被害で済めばいいのだが……主に犯人の生命的な意味で。

明久達がムツツリーーの言葉に走り去るのを確認してからとある場所に電話をして、それを終えると文月学園を出る。

ズンズンと文月学園を出た詩織は坂道を下っていた。

目標は登校路の途中にあるカラオケボックス　そこにいるゴリの掃除。

社会のゴリといつも汚物を処理するための仕事に躊躇いなど必要ない。

「さて、じいですね」

にじつと満面の笑みでカラオケボックスの入り口に立てる詩織。

それは日常で見れたならば思わず見惚れてしまうこと間違いないしな笑みなのだが、いかんせん額にでつかい怒りマークが幻視できてしまう。

どこかコミカルな印象をそのマークだが、詩織のオーラが全てを台無しにして魔王様な印象を抱かせる。

カラオケボックスの中から出てきたお客が「ひい！管理局の白い魔王！」と本気で驚いているのを尻目にカウンターへ進む一同。

「男が数名にチャイナ服を来た女の子が3名、そしてこの写真の子

がーお。 ビーの部屋をとつましたか?」

「はー? その方々との御関係は……」

メキッ

唐突に聞こえた何かにビビが入る音。

受付嬢がその音の発信源をふと見てみればそれは詩織の手に持っていた携帯電話。

既に画面は外れ、ボタンはいくつかが外れ飛び、カバーは全体的に折れ曲がり、さらには中からバラバラになつた電子部品が飛び出している。

「ひつー!?

「まあいいです。だいたい分かりますから」

出会い数秒で怯えさせることに成功した詩織だが受付嬢には田もくれずそのまま階段を上がっていく。

「204.....205.....206.....見つけました」

カラオケボックスの中には田も向けずに廊下を歩いてくる最中に急に立ち止まり、その部屋を勢いよく開ける。

そしてあんまりに悪いタイミングでその光景を詩織は見てしまつ。

「坂本よお。このお嬢ちゃんがどうなつてもいいのかア?」

見知らぬ男が綾香を羽交い絞めにして雄一を脅していた。

「あ、詩織ちゃん！」

「綾香は少し黙つててくださいね。ところで貴方　ヤスオ君でしたっけ？」

「あん？誰だてめえ」

「教頭に依頼をされた不良の一人ですね。いくじゅもひつたのかは知りません」

「はあ？」

「ああ、ムツツリーー君。そー、ビートてくださいね」

バイトのフリをしていたのか店員の格好をしたムツツリーーは静かに灰皿を背中に隠した。

そして身の危険を感じたのかすぐさまヤスオとやらの男から距離をとる。

「誘拐に傷害に脅迫に……未遂も含まれてますが、まあなんでもいいです。貴方達は青春を楽しく遊ぶ金欲しさにこんなことしてるんじゃないのが」

表情のなくなつた顔で詩織は怪しく眼を輝かせた。

『思考誘導』の魔法　その中でも基本的な思考に空白を生み出す魔法。

数秒視線を合わせないといけないと発動前に魔力を簡単に感知される使いづらい魔法だが、魔法のないこの世界では十分に脅威だ。今この男はいわばずっと呆然としている状態で、考える思考がない

ので魔法を解かない限り植物人間のよつなものだ。

「その青春は牢屋で臭い飯を食つて過いります」とになります。心配いりません。私がそうさせますから」

「…………」

「綾香、一いちへきてください」

「うー、詩織ちりやん」

動かなくなつた男の拘束を簡単に外し、トテトテと詩織の下へと走り寄る。

そして詩織に抱きつくと胸に顔を埋めてグリグリと押し付けた。

「んん……くすぐつたいのでやめてください」

「やー」

はあと溜息を吐いて雄一を見ると既に人質は全て救出し終えたようだ、雄一が無双していた。

「綾香、一の肩じもは性的なことを実行しようとしましたか?」

「うー、みずけやんのお胸を触ろうとしてたよ」

「ほお、そうですかそうですか。

「じゃあ、『一生性交渉が出来なくなる呪い』でもかけましようか

呪いなら現代医学では治療不可能です」と言い、倒れている男一人一人に丁寧にかけていく。

ちなみに詩織は呪いをかけるのは得意だが解くのはあまり得意じゃないので本気で呪いをかけたら解けなくなるのだが、詩織は容赦なくかけた。

2・5 ブチギレシオリン降臨、満を持して（後書き）

今回再び降臨したブチギレシオリンですが、暴力的な手段は使いませんでした。

そもそもそつちは雄一がしていたのでする氣も起きなかつたの間違いですが。

その代わり『不能の呪い』をかけられ、十年ほど臭い飯を食つことになつたのでチンピラ涙目ですね。

正直魔法のない世界で一番強い魔法は何かって聞かれたら呪いの類だと思うんだ……単純な火力とかだとミサイルで代用できますしねえ。

今回明久達と協力をして綾香達を助け出すストーリーを書いたのですが、「なんか詩織に違和感がある……」と没にしてまたもや単独行動をすることになつたシオリンです。どうもブチギレシオリンはキャラが強すぎて明久達を潰してしまいますからね。

2・6 戦い、終わらず

夢を見る。

人の脳とはいわゆる記憶の保管庫だ。

そして記憶のバックアップは魂によつて為される。

だからこそ転生した詩織も当然魂に刻まれた記憶を垣間見ることがある。

『やはり貴様も犬か。國に忠誠を誓つ王といつ名の、な』

『…………』

『ふん、だんまりか。覚えておくといい。貴様は必ず後悔する。ここで引かなかつたことに。安寧に逃げなかつたことに。立ち止まらなかつたことに。』

覚えておくといい。その後悔は全て貴様のせいだ。貴様が、引き起こすのだ』

逃げるのは恥ずべきことじやない。

時には負けを受け入れる事もまた、大きな勇気なのだ。

そうだ、後悔している。

あの時何故友の忠告に耳を貸さなかつたのか。

そうすれば俺達は　俺とカーベラは最後まで何も失わなかつた。

意識が急に浮上し、水面に手を伸ばすように意識を覚醒させる。

『…………最悪です』

嫌な夢を見た。

今日は召喚大会も締めなので久々に朝稽古をしようと眠氣を振り払

つて身体を起こした。

朝田に照らされる庭の中央で静かに眼を閉じ、両手に集中する。右手には赤い炎、左手には青い氷。ゆっくりと眼を開け、さらに両手の炎と氷を大きくしながら武術の型をとる。

「…………」

籠つた光は、ふれることなく静かに両手に宿り、それが詩織の演舞のよつな訓練を幻想的にさせた。

「…………これでくらいいでいいしょ?」

行使していた魔法を消し、それを見たテラスに座っていたクリスが紅茶を注ぐ。

「それでも同時使つて凄いね。マルチタスク並列思考でしょ?」

「ええ。クリスちゃんが思つてゐるよつな便利な代物じゃありませんが」

クリスの入れてくれた紅茶を飲み一息。

「そうなの?」

「はい。並列思考とこうことは思考力を他の事に割くといふことですか」

アニメのように分割できる数が多いほど高度な魔法が使えるわけじやありません。むしろ分割しきると魔法なんて使えません」

違う処理をいくつも同時にいったんパソコンのよつなものだ。それぞれの処理が遅くなり、下手をすればフリーズしてしまつ。

「上級魔法使いでさえも使用しない使い勝手の悪い技術です。思考を分割すればその分戦いに割ける思考がへりますから」

「上級魔法使い……神にさえ匹敵する力を持つていて、本気を出せば町の一つや二つ、簡単に無くすことができる存在だつけ」

「はい。私が前いた世界は神さえも人間に倒される存在でした。それでもあの世界が存在していたのは、おそらくあそこが実験場だったからでしょう」

魔王であつた詩織とて正攻法で同時に発動できるのは一つまで。それ以上となると動きに支障が出るし、四つも魔法を使えば集中して動けなくなる。

「ふーん。ところで何であれやらないの?」

あれ、とは何だろうか。

「炎と氷といったあれでしょお姉ちゃん。メローラ」

「…………メドアって何ですか?」

「お姉ちゃん知らないの？今度貸してあげるね」

……今度は何を貸されるのだろうか。

前に貸されたのは某スタンドがガチンコ殴り合をする漫画で、頑張つて50巻以上ある漫画を読んだものだ。

「そういえばお姉ちゃん。あのチンピラ達、無事牢屋に入つたらしいよ？」

「へえ。そうですか。よかつたですね」

「うん。本当に……チンピラ達が死ななくて。さすがに田舎め悪いもんね」

本当にそう思つてゐるのかと問い合わせたくなるような妖しい笑みを浮かべたクリスに苦笑して

「私の点数稼ぎの為に肅清とかし始めちゃう方たちも存在しますから。私は現代に蘇った聖女じゃないんですが……」

以前のレッドフィールド家の詩織の誕生日に集まつた来賓客の数人の血走つた眼を思い出す。

その眼から感じ取れた感情は 崇拝。

あまり私生活に干渉しないように詩織は言つてあるのだが、今回のような誘拐事件までいくと彼らも動き出す。

前なんてレッドフィールド家へと敵対した同盟の盟主が気付けば拷問から晒し首のコンボを食らつていたくらいだ。

正直勘弁してくれと思ったのだが彼らは心理学でも学んでいるのか詩織がよっぽど不快に思わない限りは行動に移さない。

だから今回の誘拐事件は詩織にとつて文字通りよつぱいの」とだつたので、十分に肅清される可能性があつたのだ。

「彼らもさすがに一般人には手を出さないといづれ」とですか、……

「…………だといいけどね」

学園祭一日目、登校してきた詩織は校舎の階段でクリスに別れを告げてそのままFクラスへと入つた。

今日は女子制服を着て新たな認識阻害をかけている。

「おおシオ。びひしたのじゃ？」

「秀吉君。さすがに一日とも手伝わないのはどうかと思つたのでお手伝いにきました」

「つむ。それは助かるのじや。ウェイターの服はないので、そのままで手伝つてくれると嬉しいのじゃが」

「構いませんよ」

女性制服を着ているにも関わらず、自分がシオに見えていたことに静かに認識阻害の魔法の成功に喜ぶ。

今回の認識阻害の魔法はシオのことを知つていてる人物は詩織がシオに見えるという内容だ。

つまり知り合いは詩織がシオに見え、他の人物には女の子に見える。

「やついいえば雄一君と明久君はどうですか？」

「アキと坂本なら屋上で一人仲良く寝てるわよ」

「…………なんすと?」

島田美波からもたらされた新たな情報に思わず妙な返答をしてしまった詩織。

「やつぱりそういう関係なのでしょうか? レッドフィールド君はどう思いますか?」

「姫路ちゃん。貴方も染まつてきましたね本当?」

いや、B君が嫌いな女の子はいないと確かクリスが言っていたので、これは元々なのか?

「まあ昨日もわざわざ明久君を女装させて一人仲良くお化け屋敷に入つたらしいですよ」

「「詳細を!」」

何となく餌を撒いてみたら島田と姫路が釣れた。

客が来るピークの1~2時前後を過ぎ、時刻は既に1時を回っている。

文月学園学園祭の最大の特徴である召喚大会に来客は殆ど行っているのか、既に店内にお客は存在していない。

この状態になつてすぐにFクラスの主要メンバーは明久と雄一の応援に向かつた。

今残つているのは極々少數のFクラスメンバーのみだ。

「……そろそろ、ですか」

「何か言つたか？レッドファイールド」

「いえ」

クラスメイトになんでもないとアピールしながら千里眼の魔法を発動させる。

既に召喚大会の場は緊迫しており、Fクラス対Aクラスの戦いが始まるとしていた。まるで少し前に行つた試召戦争の焼き増しだな、と笑いながらFクラスの教室の扉に手をかける。

「私、そろそろ行きますね」

「おう」

元々シフトに入つてなかつた詩織はいてもいなくても大丈夫だ。

「詩織ちゃん」

「綾香？」

召喚大会の決勝戦が終わる前行こうとした詩織を呼び止める声は

綾香から。

無垢な笑みを浮かべた彼女はえへへと照れつつ詩織に抱きつく。

一
頑張つてね

「はい」

綾香に応援されただけでやる気が出る自分に現金だと苦笑いして今度こそ詩織は戦場へと向かつた。

いいタイミングで来た。
本当にそう思う。

『坂本・吉井ペアの勝利です!』

物足りなかつたのだろう。
思えば試召戦争でもやつたことといえば不意打ちだけ。
戦い足りなかつた。
満足できなかつたのだ。

今私を縛る魔法はいらない。
認識阻害なんて無駄な魔法はここに来る途中で切つてあるのは……

『さて特別試合に移りたいと思います』

「「は？」」

『優勝者である坂本・吉井ペア／Sレッドフィールド。最強の壁をFクラスタッグは壊せるか！？』

魔法使い 否、魔王詩織。

「さあ戦いましょうか雄一君、明久君」

2・6 戦い、終わらす（後書き）

今回は導入部分。

マルチタスクがやたら万能に書かれてる小説多くみかけますけど、あれ並列思考が前提なのでそこまで便利なものじゃないと思つんですよやっぱ。

魔法のみの固定砲台戦闘ならいくつも同時に魔法を使えるというメリットがありますが、魔法剣士みたいなタイプだとあんまりメリットないと思います。

2・7 レッドフイールドの魔女（前書き）

今日は語るのは不要です。

2・7 レッドフィールドの魔女

3年のコンペを打ち倒して最高の気分だった僕らは田が点になっていた。

優勝したと思つたら特別試合だとか言って何故か詩織が出てきていたからだ。

詩織は固まつてゐる僕達に腕輪をそれぞれ投げつける。

「う、うわっ！？……し、詩織？」

何とかそれを受け止め、呼びかける。

「はい」

「お前はシオの兄弟の……レッドフィールド。ビッグヒットもりだ？」

雄一が剣呑な目を向けているが、詩織はどこふく風でなんとも感じていなかのようにその視線を無視している。
事態に困惑していた僕等の耳に偶然観衆からの声が聞こえてきた。

『あれは魔女か？』

『何故ここに？』

『いや、ここにいるわけがない』

『いいや……あれこそが レッドフィールドの魔女だ』

レッドフィールドの魔女。

よくよく周囲を観察してみると、いつまでもいるのは年配の方々が多い。

でも一体何のためにこんなところに出てきたんだろ？

「安心してください。貴方達の優勝は既に決しました」

「なんだと？」

「ただ腕輪を起動させるだけじゃ味気ないじゃないですか。ですか
り、いつもお披露目のお場を作つたんですよ」

「……目的は何だ？」

「簡単なことです。ねえ、明久君

急に話を振られた僕は首を傾げて雄一を見る。
雄一は「いったい何をしたんだお前」と言わんばかりに見下すよ
うな視線を向けてくる。

「私を捨て駒扱いしたこと、まだ許してないんですね」

「へ？」

「だから、戦いましょう。全員の点数の持ち点は総合教科4000
点」

「うふ、うふと待つてよ！4000点なんて点数で起動したら…

…」

お披露目にならないじゃないか。

そう言おうとしたが雄一がガンを飛ばしていることに気付き、言葉を止める。

「安心してください。レッドフィールドの名にかけて、確實に安全です。雄一君、学園長から使い方は聞いているはずですよ。起動を」

そういうえば学園長が白金の腕輪の使い方を突然教えてきた。一体何の風の吹き回しかは知らないが、その時は特に疑問は持たなかつた。

だが今となつては馬鹿の僕でも分かる。

「あのクソババア……最初から計画済みだつたな」

「それは私が直しました。もう遠慮はいらないですよね」

「ああ、上等だ。^{アワヒイクン}起動！」

いつのまにか切られていた召喚フィールドが再び張られる。

「戦いましょう。試^{サモシ}獣召喚！」

「う、うん。試^{サモシ}獣召喚！」

「ちつ、行くぞ明久！ 試^{サモシ}獣召喚！」

『Fクラス 吉井明久&坂本雄一 VS ???クラス 詩織=レッドフィールド

総合教科 4000点&4000点 VS 4000点

雄一の腕輪が暴走しない……ということはバグを直したといつのは

本当のことなのだろうか。

それにして何で〇点から開始じゃないんだろう?

「さて、明久君。貴方の力は分かつてますよね?」

詩織は召喚獣の持つ杖を真っ直ぐ雄二と僕の召喚獣に向けながら聞いた。

さっきまであんなに右腕が痛かったのに、不思議と今は痛くない。むしろこれから戦う相手の強さを思い高揚感すらあふれ出る。

「^{ダブル}一重召喚」

僕の声に反応して召喚獣が一体に分裂する。

使ったのは初めてだが、何とか操作できそうだ。

「今日は白金の腕輪の『デモンストレーション』の為、4000点でも腕輪は出ないことになります。ルールは『スマッシュ。審判お願ひします』

『え?……そ、それでは始めてください!』

審判の言葉と共に僕は一気に詩織の召喚獣へと駆け抜ける。雄二は円を描いて遠回りするように走った。

「ディバイン……」

「明久!」

「うん!」

雄一の目を見て何を言いたいのか分かった僕は詩織の杖の向き先をしっかりと確かめ、ワンステップだけ右手にずれる。

「バスター」

先程までいた空間を桃色の光線が一瞬で通り過ぎる。

これは

「やはりな。部外者であるお前は召喚獣の操作に慣れていない。飛び道具という有利な武器も照準を合わせるまでしか出来ないってことだ！」

なるほどと納得して僕はそのまま木刀を撃ち終わったままの姿勢でいる詩織に振り下ろす。

ギンツ

しかし振り下ろされる木刀へ詩織は冷静に杖を横に構えてそれは防がれる。

ダブルで呼び出した片方を一旦放置してそのまま追撃に移る。

白金の腕輪の特性上、ダブルは点数を一分するので今は2000点しかないがそれでも操作に慣れていない詩織なら押し込める！

だが

「な

その全てを踊るように詩織はいなした。

「これは……慣れていない動きじゃないよ雄一！」

「その通りですよ。あの攻撃は単に一度照準をつけたら打ち終わるまで動けないだけです。仮にも今回は最強の壁ですから。そして

「

一気にバックステップ、距離をとつた詩織の召喚獣は向かつてきました雄二に手を向ける。

「 アクセルシューター」

「 「なー?」 」

出現したのは8つの桃色の光弾。

召喚獣の頭くらいの大きさのそれだが、それは詩織の周囲を自由に飛び交っていた。

「こきなさい」

「ちりー！」

それぞれが違う動きをしながら襲い掛かる光弾。

四方八方から来る光弾に上から召喚主が見ているので対応できるが、それでも8つは多い。

「詩織！」

「明久君ー?」

雄二にかかりつきになつていていた詩織に飛び掛ってきたのは僕の待機していた召喚獣。

密かに詩織の召喚獣にじりじり近づいていたのだが、気付かれなか

つたようで接近できた。

「まだ！」

光弾の半分の4つを雄一のところから戻し、そのまま僕の召喚獣へと向ける。

やばい……僕の召喚獣は腕輪の関係で2000点だけ、詩織の攻撃は4000点クラスだ。

「はあー！」

武器が折れるかもしれないが、それでも何もしないで受けるよりはマシだと思い光弾に向かって木刀をなぎ払う。すると予想外にもあっさりと光弾は消えた。

「さうか明久！」この光弾の攻撃力はたいしたことない！

今のうちに被弾覚悟でいけ！
そう曰で語る雄一に僅かに領いて迫る光弾を無視して詩織の前へと躍り出る。

顔や体勢が崩れる胸への攻撃のみ弾き、何度も光弾に攻撃され身体中に痛みが走るが気にせずに詩織に木刀で突く。

「！？ディバイン……」

僕の木刀が詩織のわき腹を突くと同時に杖が僕に向けられた。

「バスター！」

「がつー？」

一瞬で消滅した僕の召喚獣のフィードバックで激痛が走るが構わず召喚獣の点数を見る。

『Fクラス 吉井明久&坂本雄一 VS ???クラス 詩織＝レ
ツドファイールド

総合教科 1806点&2271点 VS 1319点』

急所を一撃された詩織はさすがに大幅に点数を削られたようで、総合点数では僕等が上回っていた。

このまま押せば勝てる そう思つた瞬間、棒立ちしている僕の召喚獣に詩織が既に杖を向けていることに気付く。

「ディバインバスター！」

避けることは既に間に合わないことを悟つた僕は迫る光線を木刀を盾にした。

しかしメキメキと嫌な音を木刀がたてたので、一瞬の判断で木刀を捨てて横へと滑り転がる。

すると間一髪で木刀は砕け消滅し、僕がいた空間を光線が過ぎ去つていった。

「馬鹿明久！集中しろ！」

「へ？」

雄一の声に光線を見送っていた僕はマヌケな声をあげて詩織を見る。そこにはいつのまにか放たれた二発の光弾のうち一発を拳でかき消す雄一の姿。

そしてもう一つが僕の召喚獣に向かつて放たれていた。

「ペ、ぶらー？」

見事に頭にクリーンヒット。

木刀さえあれば追撃できたのだが、それすらできずに頭に直撃を食らう僕の召喚獣。

『Fクラス 吉井明久&坂本雄一 VS ???クラス 詩織＝レ
ツドフィールド

総合教科 21点&2115点 VS 1152点』

「ちつ！生き残りましたか」

あ、危ない。

反応すらしてなかつたら消滅していたところだつた。
というか頭がガンガンしてて痛い。

「つっこめ明久！」

雄一はもはや僕を捨て駒にする気であることが分かつたが、もうそれしかない。

僕の召喚獣は既に殆ど攻撃力を失い、決定打は雄一しかいない。
チームの勝ちを狙うならば僕が囮になるのが一番だ。

「まつたく！」ここまで点数差があると防御しただけで削られますね

……』

雄一の猛攻を杖でガードしながら悪態をつく詩織。
光弾を拳で打ち消した時に雄一も若干ダメージを食っているものの
詩織ほどの勢いではない。

「これで！」

最初に比べてだいぶ動きが鈍くなつた僕の召喚獣だけど、牽制くらいはできる。

そう思い拳を振り上げて詩織へと飛び掛る。

「仕方ありませんね！」

詩織は一步下がり、雄一から距離をとろうとする。

しかし詩織の召喚獣が遠距離型だということを分かっている雄一は逃がすものかと詩織に食いついていく。

「雄一！」

詩織の顔めがけて拳を放つ。

しかしその攻撃は簡単に杖でいなされ、僕の召喚獣が詩織に一瞬だけ覆いかぶさるようになり

「ディバイン……」

その声を聞いた。

「危ない雄一！」

僕の召喚獣が覆いかぶさったことで僅かに出来た不可視時間。

僕が拳を振り切つて通り過ぎた時、既に詩織の持っていた杖は雄一に向けてチャージされていた。

「バスター！」

「なんだとー？」

僕と雄一が立っている側からすれば少し見えなくなつたと思つたら既に杖を構えた詩織の姿が。

発射された光線は真っ直ぐに雄一へと向かつていく。
慌てて避けようとするものの僕が攻撃を外した瞬間に追撃をしようとしていた雄一は既に遅く、飛び掛る寸前だった。
そんな体勢で避けられるわけがない雄一に僕は

「おおおおおおおお！」

既に拳を振り切つていた召喚獣を無理矢理動かして雄一を突き飛ばした。

明らかに人間であれば再現不可能な動きであったが、何とか雄一を突き飛ばすことができた。

「なつー!？」

詩織が驚きの声をあげ、雄一の召喚獣を見る。

僕は召喚獣を消し飛ばされ、全身に悪寒が走るような痛みを感じつつしつかりと雄一の召喚獣を見る。

発射後の硬直で動けない詩織に向かって滑るように右手を振り上げる。

それに対し慌てて詩織は向かってくる雄一に杖の照準を合わせる。
まだだ。まだ届かない。

ならば僕が詩織の注意を引くしかない。
でも既に召喚獣が消滅した僕に出来ることは……あつた！

「詩織ー！」

「……ディバイン」

ガン無視。

試合中だから当然のことだが、それでは負けてしまうので困る。
だから僕は 対詩織専用破壊呪文を唱えることにした。

「裸、とっても綺麗だつたよ！」

「ふえ？」

白熱していた会場全ての空気が凍りつく。

一瞬僕の言ったことを理解できなかつた詩織だが、理解するとよほど恥ずかしいのか顔を真つ赤にして自分の身を抱きしめた。胸が強調されるようなその格好を脳内フォルダに焼付ける。ついでに観客席から向けられる変質者を見るような冷たい視線はスルーする。

雄二も僕を信じられないような目で見て固まつていたが、すぐに意図を理解したのか詩織に向かつて高速で近づく。
今度こそ終幕だ。

詩織も雄二もお互いの攻撃を避ける気がない。
どちらが先に自分の攻撃を出し切るか。
それしか一人は考えていなかつた。

「これで……」

「ディバイン……」

雄二の拳と詩織の杖が交差する。

二人は吼えるように己の武器を信じた。

「終わりだああああ！」

「バスター！」

2・8 召喚大会その後（前書き）

超しつこいようですが、この作品において詩織と明久はくつつきません。絶対にくつつきません。くつかないつたらくつつきません。大事すぎるので4回言いました。

2・8 召喚大会その後

「…………」

「…………」

撤収が終わり、今は機材のみが残る屋上で詩織は寝転がっていた。スカートなので当然角度によっては中身が見えるのだが、そんなことを気にする余裕すら今の詩織にはない。

「…………ねえ綾香」

「うに」

「あれはないと思つんですよ」

あれ、とは当然明久が詩織の注意をひくために叫んだあれ。あの後当然の結果として明久はFクラス連中に肅清されていた。その中に詩織と綾香が加わっていたのもある意味当然だ。フルボッコにして病院送りレベルにしたが、最後に回復魔法をかけておいたので今頃けろつとしてるだろう。

「私、とってもシリアルアスだつたんですよ?」

「…………だね」

「…………。…………あやか~」

困った顔をしている綾香に抱きつく詩織。

頭を撫でながら顔をこすり付けている辺り、相当参っているのだろう。

「だいたいですね、私の召喚獣弱すぎなんですよ。そりゃあ卑怯くさい武器もありますけど、弱点だらけですし複数相手には弱いです」

うじうじと詩織らしからぬ愚痴を黙つて聞く綾香。

間違つても「それ詩織ちゃんが設定したんじゃ？」とか言つてはいけない。

「そうだね。うーん、そう思つ」

「ですよね。だいたい明久君だって観衆の中での発言はないと思うんですよ。何ですか？私にとつての羞恥プレイですか？」

だいたいあの馬鹿は…… そう前置きしてから始まる不満の数々。全力ではなかつたが本気であつたあの勝負に負けたのがとても悔しいのだ。

愚痴を言い続けること5分弱、そろそろ止めないと不味いかなと思つた綾香は相槌ではない言葉を言つ。

「綾香は可愛い詩織ちゃん見れて満足だつたけど」

「ふえ？」

一瞬でボンと顔が赤くなる詩織を見て悪戯が成功した子供のように笑う綾香。

その様子を見てからかわれたことに気付いた詩織は自身の不甲斐なさに呻いてから立ち上がる。

そして屋上端のフロансまで向かい、撤収作業をしてくる生徒達を見る。

「……平和ですね」

「どしたの詩織ちゃん」

「今朝夢を見たんです。友達に忠告されたのに、聞かなかつた夢を

「…………」

「言われたんですよ。いずれ必ず後悔する、と。あの時は勝てず後悔したこと、今は負けて後悔していない。どうこうことなんでしょうね」

「今は平氣?」

「色々と思つてるのはありますが、負けたのは私の未熟です」

これで次は全力を出せる。
その時にも負けてしまえば、さすがに不敗伝説は返上しなくてはならないか。

そこまで考えて不意に笑つ。

前世では不敗にあれほど拘つていたのに今となつてはただの称号くらいにしか思つていない。

「…………いえ」

不敗伝説は既にない、か。

目の前の少女、綾香には負けっぱなしだ。

既にないなら拘つていないので当然だ。

「綾香」

「詩織ちゃん……」

どこかピンク色の空気が流しながら屋上の隅で彼女達は見詰め合つ。もはや完全に一人の世界に入つていた。だからこそ気付かなかつたのだろう。

「夏川、そつちの準備は大丈夫か?」

「大丈夫だ。へへっ。これが流れりや俺達の逆転勝利だな」

屋上のドアが開いて放送設備を弄つてゐる一人に。
そして

『それじゃ、雄一。ようしへ』

『了解だ 起動』
アウェイクン

不穏な動きをしている撤収作業をしている生徒達から離れたところ
にいる怪しい一人の生徒を。

「し、詩織ちゃん今日は格好良かったよ。だから、しゃがんでくれ
る?」

「……はい」

頬を赤く染めて綾香の身長に合わせて膝に手をつく。

もはや背景に百合の花が咲いていたが、聞こえてきたのは何かの飛来音。

ドオン！ パラパラパラ

「 「え？」

近くに何かが着弾したかのような爆発音にキヨロキヨロと周囲を見回す二人。

何だ、いつたい何があったと混乱する一人に無情の一撃目が放たれた。

しかもかなり近くで

ドオン！

「 「やああああああああああ！」

「ひう！？」詩織ちゃん！」

背中で何かが爆発したような衝撃をうけ、屋上を転がっていく詩織。強い爆発を正面から見た綾香は咄嗟に防御魔法を発動するが、詩織は転がっている通り、間に合っていない。

「しおりちゃん！？」

詩織はそのままフェンスの足元にある隙間を潜つて屋上から落ちていった。

side：明久

シャワーを浴びながら考える。

今日は色々あつた。

とにかく姫路さんの転校を阻止できたのが最大の成果だろう。
Fクラスの設備はよくなるし、姫路さんもFクラスに留まってくれるらしいことだらけだ。

最後に美波に袋にされたのはいつものことだしね。

……自分で考えて泣きそうになつた。

「でも最後に詩織が出てきたのには驚いたなあ」

あの試合は本当に辛勝だった。

僕の咄嗟の機転がなければ雄一の攻撃は間に合わずに打ち落とされていた。

実際攻撃を受けてみてわかつたんだけど、ディバインバスターは低得点相手には卑怯だ。

ある程度点数があれば照準から攻撃までのタイムラグの間に避けることができるけど、得点が低いとそれもままならない。

戦つてわかつたけど、詩織の召喚獣は点数が上の相手とか複数相手には致命的に向いていない。

後方支援に向いている召喚獣なんだろう。

まあ詩織は総合教科で10000点をとれる大天才だから接近戦でも点数の関係から無敵なんだろうけど

「とにかく強かつた……詩織がFクラスにいてくれて本当によかつ

たよ

詩織が例えばAクラスにいたならばあの試召戦争でも雄一が戦う前に一敗増えてただろう。

BクラスにいたならばFクラスの面々相手に無双していたかもしない。

そんな詩織がFクラスにいるのは心強いといえる。

だが

「……明日、僕生きてるかな」

公衆の面前で堂々と彼女を辱めた。

詩織は自称魔法使い 少なくとも妹のクリスちゃんは謎の光る拳をもつていた である。

ふと根元相手にブチギレた詩織の姿を思い出す。

……あれ？

なんだか美波より優しい気がする。

「きっと許してくれるかな」

「そうですね。明久君は許してもういいと黙つてるんですか？」

「うん。だつて美波より優しいし」

「へえ……比較対象があれなので素直に喜べませんね」

あれ？僕は今誰と話してんのだろう。

「……」

さび付いた機械のよじてギギギと風呂場にやけに響く高い声の発生源に顔を向ける。

そこには肉切り包丁を持つメイド姿で全裸の僕を見下ろしている詩織の姿が。

……え、何この状況。

咄嗟に傍においてあるタオルで女の子に見せられない部分を隠す。

「明久君」

「え。あ、うん」

肉切り包丁を片手にポンポンと軽く叩きながら冷笑を浮かべる。ぶつちやけちょっとちびつた。

「私が何を怒ってるかわかりますか？」

「召喚大会の時に詩織の裸が綺麗だつ

「違います」

「え？」

即座に否定されて疑問の声をあげる。
ならなんなんだろう。

首を傾げる僕にピッとは詩織は携帯電話を操作してその画面を見せた。

『ま、待て翔子。確かに俺は明久を女装させてお化け屋敷に入った。
だがだな、それには事情がある』

『……浮氣は、許さない』

『し……死んでたまるかあああああああつー。』

「…………」

いつたいこれを僕に見せて何が言いたいのだろうか。
はつ！？まさか……

「詩織、僕が雄二とお化け屋敷に入つたことに嫉妬して……」

ギンッ

風呂場の壁に肉切り包丁が突き刺さつた。
腰が抜けた。

「察しが悪いですね。明久君には雄二君と同様の罰を受けてもらおうかと思いました。雄二君のほうは翔子ちゃんに任せました」

「何でー？」

「…………召喚大会のあと、私がどこにいたか教えてあげましょう」

それがどうしたんだろ？

「屋上ですよ。理解しましたか？」

「…………」

召喚大会の後、屋上。

このキー「ワードで導き出される答えは

すなわち、花火による爆

撃。

「…………

考えろ明久。

ここでの返答はまさに命に関わる。

よし、この美少年の僕が詩織を惚れさせれば全てが丸く収まるー。(かなり混乱している)

「詩織ー!」

「…………なんですか」

「好きだ!」

「遺言は以上でよろしいでしちゃうか

駄目だった。

シャワーの音のみが流れる風呂場で殴り飛ばされた明久は気絶している。ちなみに殺傷沙汰はさすがに駄目だと思ったので肉切り包丁は使っていない。

持つてきたのも明久を脅すための小道具のよつなものだ。

「しかし、水シャワーですか……」

風邪ひいたらどうするんですか。

そう内心で呟きシャワーをとめてからその身体を洗面所まで引っ張る。

このまま放置してもいいが、それでは風邪をひくことは確実だろう。

「えっと、下着は……あら、明久君はパジャマ派ですか」

あらかじめ用意してあつた服を確認してから詩織は明久の身体を同じく用意してあつたタオルで拭く。

そして寒そうに震えていたので魔法で布団に暖かいと思う程度の熱を与えて、パジャマを着せた明久を放り込んだ。

翌朝起きた明久が女の子の手によつて身体を拭かれて服を着せられた事実に気付き、顔を真つ赤にしながら登校してきた。

2・8 召喚大会その後（後書き）

なんかもう明久の介護する詩織をヒロインに加えてもいいかがしてきた。

だめだ落ち着くんだ俺。

というか明久をお仕置きするシーン書こうと思つたのにどうしてこうなつた。

詩織はなんだかんだで面倒見がいいからなあ……。

2巻と3巻の間のハイランド事件とプール事件とバイト事件は全て飛ばします。

かわりに一つオリ話をいれてお茶を濁します。

……だってさ、ハイランド事件って介入して面白くできるような余地ないし、プールなんてもろに地雷じゃないですか。性別バレイベントしてない詩織にとって。バイト話はあれ男だけで行つてるので、一応ちよろつと書きますが詩織がバイトにいくとかはあります。

なのでバイト後の明久達の話を書こうと思つてます。

2・5・1 詩織と翔子の関係（前書き）

テイルズやつてたら予約忘れてた……。
とりあえず徹夜明けで主人公男選択でクリアしたので投稿。
二週目行く前にストック頑張るぜ……。

2・5・1 詩織と翔子の関係

『困った電話』

霧島翔子は昔からの友人の電話をかけていた。

電話の呼び出し音が鳴り響くこと数秒、いつもならすぐ出る詩織に小首を傾げる。

プライベート用の携帯電話にかけているので余程忙しい用事じゃない限りは出てくれるはずなのだが

頭に疑問符を浮かべているとよつやく繋がったのか電子音を鳴らして、通話が通じる。

『ん、はあ……も、もしもしです』

「……詩織」

『翔子ちゃんですか。どうかしましたか?』

何か電話越しに聞こえてくる息が荒いのだが、どうしたのだ？。

「……風邪?」

『ふえ?違いますけど……なんですか?』

「……息が乱れてる」

『……『気のせいじゃないですか?それはそいつ、何か用ですか?』』

いまいち納得がいかないが、用事をすませなくてはならない。

「……明日、暇？」

『明日ですか……えっと、だいじょひやつ！』

「……？詩織？」

いきなり悲鳴をあげた詩織に呼びかけてみるもの

『だ、駄目ですよ綾香。今電話中なんですから……ちよつ、そこは
ひやつりーっ』

『ふふふー。詩織ちゃん。綾香じゃなくて『主人様でしょ？』

『』、『主人様あ……』

「……」

反応に困る。

とりあえず御取り込み中みたいなので、無言で通話を切つた。

『困った電話、その後』

詩織は昨日に電話で呼び出された通り霧島翔子の家を訪ねていた。昨日は気付けば電話がきていたが、その後かけ直したらどうやら料理の練習がしたいらしい。

それで料理が上手い友人である詩織に電話をかけたのだが

「…………どんな顔して呑わせればいいんでしょうね」

あれから一通り襲われた後、正氣に戻った詩織は綾香に催眠魔法をかけて放置しておいた。

今日だつてご飯を作り置きしてきてないし、屋敷に駐在している連中にも決してご飯を作らないようにと言い含めている。

つまり兵糧攻めだ。

空腹に苦しめばいいのだあんな色情魔。

冷蔵庫の中は空にして屋敷に全力の結界を張つて出られないようしている。

特に綾香にはロック式の呪いと誓約と思考誘導を使って絶対に出られないようにしてあるので安心だ。

とりあえず入り口から念話で翔子を呼び出し、扉を開けてもらひ。顔を合わせた時、双方若干顔が赤かつたがどちらもそれに関してつっこまなかつた。

「翔子ちゃん、お弁当作りたいって言つてましたけど」

「…………？」

「普通に料理作れませんでした？」

翔子も一応名家の生まれなので家事全般はこなせるはずだ。

まあ結構両親が親馬鹿なのでだいぶ甘い隣になつてゐるが、それでも基本的なことくらいは出来る。

「……出されば美味しいの作りたい」

「ああ、なるほど。雄二君ですか」

雄二の為にお弁当を作るといつのなら納得だ。
一途な翔子のことなので文字通り手を抜くことはないだらう。

「テートにでも行くんですか？」

「……」

翔子の顔が赤くなり、無言で頷く。

なんでこんな可愛い子を雄二は拒否するのだろうかと一瞬考え、そういえばと思い出す。

(あの上級生を殴り飛ばした事件ですか)

もうあの時には既に詩織は一人の下を離れていたので資料でしか知らないが、おおまかな流れは知っている。

おそらくだが自分のせいでは翔子に迷惑がかかる」と恐れているので引け目があるのだらう。

「あれ？」

引け目……雄二が翔子に対して引け目だけじゃなくて恐怖とかも感じていたのはなんなんだらう。

……強引すぎる翔子も悪いんじゃないかな。

「テートはいつですか？」

「……明日」

「え、明日ですか。

「……早くないですか？」

「……恋はいつだって唐突」

「用法間違つてますよねそれ。まあいいです。なら今日の晩に仕込みをして、明日の早朝に作りますよ。今田の昼御飯と晩御飯はその練習です」

時間がないならお弁当を作るときにアドバイスすればいい。手伝つてあげてもいいが翔子は自分で雄一にお手製弁当を作りたいのだひづ。

「……いいの？家のまつせ

「……いんですよ。あんな馬鹿、飢え死にさせとおけばいいんです」

クリスちゃんも食いつぱべられるのは心苦しいが、昨日助けにこなかつたから綾香と回転です。

「……ありがと」

「……いんですよ。親友ですから」

「……うそ」

『ハイランド編後日談』

「へえ。雄二君も格好良いですね。……浮氣しまじょうか」

「駄目」

最近の綾香の変態っぷりに当たられては正気に戻つて落ち込むことを繰り返しているので綾香株が下がっている詩織であった。

現在ハイランドから帰つて来たばかりの翔子に呼ばれてお茶会をしている最中で、詩織は優雅に紅茶を飲んでいる。

だらしなく飲んだほうが楽なのが、両親から受けて淑女狂育がそれを許さない。

しかし、いきなり呼び出されて「……」と差し出されたヴォールに保護魔法をかけてほしいと言わた時は何事かと思った。

乙女の顔をして保護魔法のかかったヴェールを大切そうに抱えている翔子に話を聞いてみると、聞いてほしかったのかペラペラ話し始めた。

ハイランドには翔子を補佐してくれる親切な係員が多くいたらしい。話を聞いてみると、それ絶対Fクラスメンバーだろと思つたのだが特につこまなかつた。

(しかし……)

お化け屋敷で『姫路のほうが翔子よりも好みだな。胸も大きいし』と流し、しかも釘バットまで流すとは……そんなに雄二が嫌いなのだろうかFクラスの連中は。

そういう行為が雄二を追い詰めているように見えるのだが、ヘタレな雄二なことなので押しに押さないと射止めるのは不可能だらう。

「結婚式ですか……私もいざれあの変態と……はあ」

「……詩織」

そんな哀れみのこもつた目で見ないで頂きたい。

「そりやあ惚れていますよ? 恋れてるんですよ? でもですね、あの変態性だけはどうも受け入れられません。

なんで魔法には変態を治す術式が存在しないんですか! 魂復元とか死者復活とか出来るくせになんて変態は治ないんですか!」

一気に紅茶を飲み干す詩織。

淑女にあるまじき姿だが、そうでもしないとやつてられない。

「ワイン!」

「……未成年」

「いいの! 私が許可するからいいの!」

翔子は詩織が完全に仮面を外して癪癩を起こしているのを見てワインを持つてくるように指示する。

凄く万能で頼りになる親友なのだが、癪癩をおこした時等に精神年齢が5歳並になるのはどうにかならないだろうか。

世の中は上手こといかないものと詩織の愚痴を聞きながらヴァールを抱きしめる。

詩織の愚痴を無表情で聞き、相槌をうちながら親友としてその話を聞き続けた。

その後のレッドフィールド家

「うう……頭が痛いです。飲みすぎました……」

「な、何で私まで御飯抜き……？」

「かゆ……うめ……」

三者二様の苦しみ方をしていた。

2・5・1 詩織と翔子の関係（後書き）

予防線としてはつておいたR-15タグはつてあるのでこのレベルなら余裕ですよね。

今回原作に直接は関わらないけど間接的に関わる回です。

2・5・2 バイト（前書き）

またもや定時投稿ではない。

まあ定時投稿でないときは「ストック十分にないんだな」と思つてもらつていいです。

書き始めればストック常に4つくらい抱えるとか余裕なんだけどね。今はなんとなく筆が乗らない。

詩織は気分転換にウイングウショッピングをしながら困っていた。ところのモレッジドフィールド家当主である詩織の仕事が滞つてゐるからだ。

クリスに手伝つてもうおつと思つたのだが、この前の兵糧攻めの巻き添えを食らつたことに拗ねて家出している。
どうせ婚約者のところに行つてるので、特に心配はしていない。

「問題はあの書類の山ですね……」

基本的に詩織のチエックの必要のない書類の確認等が主で、時間がかかる仕事ばかりだ。

ちなみに面倒な書類は既に詩織が全て片付けているので問題ない。

「どうしましょう」

「…………アアア」

「うーん……アルバイトでも募集しましようか? そういうえば募集つてどうするんですかね……張り紙?」

でもレッドフィールド家の手伝いなんて怪しいものにはたしてバイトがくるのだろうか。

ただでさえ一ヶ月に数人くらいの頻度で侵入者が結界にひつかつて焼け死んでるといふのに。

バイトに来るのはスパイとかのような気がする。

安すぎたら来ないだろうし、高すぎたら引かれる可能性が高い上、来たとしても守秘義務を守つてくれるか微妙だ。

「………… タア アアアアアアアアーツ！－」

「どこかに守秘義務を守つて、お金が欲しくて信頼できる人つていませんかね」

ないものねだりなのは分かつているが、あの量の書類を見ればやる気がなくなるのは仕方がない。

普段はちゃんとした役職の人人が処理しているのだが、最近欲が出たのか詩織の情報を他者に売ろうとしたので断罪している。

今頃病院でレッドフォイールド家に就職してから全ての記憶を失つて混乱していることだらう。

まあ記憶を消しただけで今まで稼いだ財産はそのままだからたぶん一ート生活を送ることだらう。

「ティア・マイ・ドウタアアアアアアアアーツ！－」

「さつきからひむといですね。どこの野蛮人ですか本当」

激しく自己主張している中年らしき人物の声にうごめくしながら声の主を探す。

探査魔法の結果、発信源は店の中。

外からみたところなかなか立派な喫茶店だ。
最近喫茶店で騒ぐのが流行っているのか？

「ち、違つのよおじさん…つむは美春じやなくてアキと

「み、美波！僕を巻き込まないでよーつて、どうして店長が僕に襲い掛かってくるのー？誰か、助け つ！」

「…………また、ですか」

どれだけ明久はトラブルに巻き込まれればすむのだろう。
明久がいるということは雄一とマッソリーと秀吉もいるだらう。
そしてそこに美波という人物が加わったのならば姫路瑞希がいるのも容易く想像できる。

またFクラスが他所に迷惑をかけているのか。
詩織が溜息を吐くと同時に明久が仕事着なのかウェイター服を着たまま店から出てきた。

そして

「し、詩織ー？助けて！…」

「…………何やつてるんですか」

「いいから僕をあの変態から助けて…」

そりゃあ真面目から『ディアマイドターなどと高々にやつやつとは変態だらうぢや。』
つて

「ディア・マイ・ド・ウタアアアアアアアアアーツ…」

「なんだいっちくくるんですか……はあ」

拳を前に突き出す。

体術はあまり得意じやないんですがと呴き変態が詩織に襲い掛かつ瞬間

「ぶべつ…？」

席を巻き込みながら吹っ飛んでいった。

そのまましばらく観察したが、起き上がりないとこのを見ると氣絶したようだ。

「で、何ですか」の状況は?」

とりあえず隣で呆然としている明久の首根っこを捕まえて聞いた。

「店長が氣絶した時点でバイトやめましたよ」

「もうじゅの……」

Fクラスのノリを学校外に持ち出すのは……いや、この変態店長のことだから構わないか。

ついでに言えばFクラスの面々は明久と雄一を除いて直接は初対面という設定なので先程自己紹介をすませた。

「新しい女の子です」

「アキ、妙な」としてなければいいんだけど

何か後ろで不穏な会話が聞こえるが気のせいだ。

「レッドフィールド凄いな。スタンガンでもなかなか氣絶しなかつ

た店長が一撃だ

「……雄一」詩織は古武術の使い手

確かに古武術の使い手ですが

「私、体術苦手ですよ?」

「嘘だー!」

「嘘だと言われましても……」

実際魔法とかに比べてだいぶレベルが低いのだ。

「あの、レッジフィールドさん?」

「何ですか姫路さん」

「さつきのどうやつたんですか?触れただけで吹き飛んだように見えましたけど」

「あれですか。寸頃ですよ」

「すんけ……?」

「動かずに触れた場所に瞬発的な力を加える技術のことですよ」

一部じゃわりと一般的ですよ。
そう付け加えてふとFクラスメンバーの男達を見る。

……ふむ。

「明久君に雄一君に秀吉君にムツツリ」

「………… ムツツリツ違つ」

「私のところでバイトしませんか?」このあたりさまじやお金なんでも
らえそうにありませんし」

ムツツリニーの言葉を華麗にスルーしての提案。

Fクラスの面々なら話すなと言われたら…… 明久だけは信用ならなかつた。

まあ誓約の魔法でもかけておけばいいだろ?と思つたのでそのまま誘つことにした。

結果、日曜で終わるならと4人ともレッドフィールド家へと来るこ
とになる。

「今回の雇用条件です」

日曜日、レッドフィールド家を初めて見る3人はその大きさに唖然
と……雄一だけは翔子の家で慣れたのか特に驚きは少なかった。
4人を応接室へと案内し、そこで書類を出す。

労働時間、仕事が終わるまで。
日給、2万円。

当仕事で見たことを外部に漏らした場合、死刑。

「 「 「 「 おかしいだろー?」 」「 」「 」

「え、そりですか？」

ある意味ヤクザな仕事をすることの多い詩織は守秘義務はある意味当然と思っていたのでそこにつっこまれるとは思わなかつた。

「…………詩織が非常識だつてことくらい分かつてただけさ。それで詩織、この仕事が終わるまでつて何すればいいの?」

「書類の整理やチェックです。だいたい数字が合つてるかとか見てくればいいですよ」

本来ならあとそこに不正しているかどうかなどと見分けないといけないのだが、そこまでは期待していない。

時間はかかるが寝ながら魔法でチェックすればいいだらう。

「す、数字……」

明久が自信なさそうに咳くのを見て詩織は言つた。

「安心してください。無理矢理頭良くしますので」

「へ?」

そつと詩織は集中の魔法を使い、4人の頭を明晰にする。
戦闘中の詠唱速度や精度を上げたりする魔法なのだが、こっちにも使えるだらう。

「おおー！凄いのじゃー！今ならどんな問題でも解けやうな気がするの
じゃー！」

「……今ならどんなパンチアリとて撮つてみせる」

ナチュラルハイになつてしまつのがある意味副作用なのだが、こう
でもしないと使い物にならないのでいいか。
そして大量の書類を部下に持つてこさせたせとそれと入れ替わるよう
して部屋を後にした。

2・5・2 バイト（後書き）

今回原作で言うバイト編の後の話。
この場には優子と美春もいたはずなのですが、特に喋りひせむ言葉な
かつたのでスルー。
それでいいのか！？

2・5・3 バイト……したつけ？

夢を見ていた。

前世の、懐かしい夢。

主觀時間では十数年の話だが、実際にはもう数百年も前の出来事の話。

222代目魔王、グラスト。

通称『アインザッソグルツ移動殺戮』。

よく「ぞろ目なのに何故666代目じゃなくて222代目なんだ…」と愚痴たものだが、今ではいい思い出だ。

しかしそれも遙か昔の話。

もう今はあの頃のように絶対的な魔力を保有していない。

前世に比べると魔力量は十分の一以下だ。

中規模魔法なら使えるが大規模魔法ともなると保有魔力の関係上難しいだろう。

前世で言つ上級魔法使いにはギリギリ届かないレベルだ。

それでもこの世界では過ぎたる力。

「全ては過去の話」

今でも魔法の研究はしているがそれらも補佐的なものばかりだ。破壊系の魔法を研究ばかりしていたあの頃とは違う。そういえば認識阻害の魔法も上手くなつたものだと一人感心する。ああいつた小技的なものは全て部下に任せていたものだ。魔法使いが自分一人になつてからはそのありがたみが良く分かる。というか魔法のない世界で認識阻害が便利すぎてつい頼ってしまうのは自分でもどうかと思う。

「ん……」

意識が浮上する。

一晩二日くらい徹夜していたので仮眠をとつていたのだが、もう十分のようだ。

魔法でいくらでも誤魔化しあきくのだが、やはり見えないとこに疲労が溜まつていたらしい。

そんな時にただ単調なチェックをこなせる自信がなかつたからバイトを呼ぶとまで考えたのだ。

起きたらとりあえず彼らにデザーテーでも持つてこいつ。そう思いながら彼女は目覚めた。

詩織が夢の中にいる間、明久達は書類を片付けていた。
しかし

「もつとーもつと早くいける……！」

明久は書類を無駄に大きなアクションをつけつつ取り、

「まだだ……俺の速さはこんなもんじゃねえ！」

雄一は両手が見えないほどのスピードで動き続け、

「今なら姉上にも勝てる気がするのじゃーちょっと行つてくるのじやー！」

秀吉は何故かバイトを放棄して優子を討ちに行き、

「…………」Jの数値はふつくしい

ムツツリーーは数字にエロスを見出していた。
この現場を見れば詩織は「……やりすぎました」と反省することだ
ろうが、今彼女はいない。

4人から3人に減ったアルバイター達はそのことに不満を言わず、
むしろヒートアップしていた。

ナチュラルハイ恐い。

というかナチュラルハイってレベルじゃない。

「雄一いいいいいいいいつ！」

「明久ああああああああつ！」

「……黄金比、だと？」

場はカオスへと変化していた。

寝起きの詩織はしつかりと疲労が取れて思考がはつきりしているの
を感じ取つてから頭をフルフルと振つた。

それに連動して長い髪の毛が尻尾のように揺れる。

ベッドから降りて鏡を見てみると裸ワイシャツの詩織の長い髪が少
し乱れているのでセットしないといけないなと思い、そのまま洗面

所へ向かう。

「ふああああ……本音を言えばもう少し寝ていたいですね」

3徹明けの睡眠はとても気持ちよかつた。

このままアルバイトーどもを放つて寝続けたいと思つほどに。

でも一応彼ら4人の雇い主なのだからその責は果たさなければいけない。

「とりあえずお湯沸かさないと……あとケーキ確かありましたよね」

詩織もお気に入りの職人のケーキ。

あまりお菓子類を作るのが得意じやない詩織の数少ないお抱え料理人だ。

まあお抱えといつても彼らは普通に店を持つており、詩織の無理のない依頼を優先的に受けて作ってくれるという契約を交えているだけだが。

店の先行投資をしたのだからそれくらいの役得はあってもいいはずだ。

雄一は翔子の関係で食べなれているかもしれないが、明久達は喜ぶことだろう。

髪の毛をセツトしながら詩織は差し入れのメニューを考え始めた。

「僕達にかかれ巴この程度の敵、造作もないよ」

「ふつ。俺も翔子に仕返しをしたいこつか」

「……仕返し、だと？（ブシャアアアアッ）」

クリスは困惑していた。

婚約者のところへ逃げていたのだが、そろそろ姉と綾香も仲直りしているだろうと戻ってきたのだ。

しかし戻ってきて最初に出会ったのはやけにテンションが高くて漢オトコ臭い明久と見知らぬ二人。

詳細は分からぬが何かしらの魔法がかかっているようなので姉が関係しているのだろう。

ならばおそらく問題はないはずなのだが——このテンションはいったい何の魔法をかけたんだ。

精神高揚……片付けてある書類から察するに手伝いとして呼ばれたのは容易く理解できるが、そつな理由が分からぬ。

「……部屋に籠つてよ」

厄介^{レバ}ことに臭いを感じたクリスは見なかつたこととした。

「…………」

「…………」

「…………？」

ドアをノックするが何の返答もなことには疑問符を浮かべながらドアを開ける。

そして詩織の視界に入ってきたのは

「…………誰もいませんね」

どこにいたのあのアルバイトービーも、見たところ仕事は終わってたようだが、そのまま屋敷探索でもしているのだろうか。

一階には見られて困るようなものはないが、一階だけだ困る。明久には前に説明していふはずなので上がらないはずだが

チユドオーンツ！

「…………」

一階のトラップが発動した音だった。

思わず頭を抱える。

何やつてんだあいつら、と。

それに探査魔法を使ってみたら入り口付近で秀吉が捕縛魔法に捕まつていた。

レッドフィールド家の人の許可なしに出ようとすれば作動するトラップなのだが、急用でもできたのだろうか。

とにかく一階で『あれ』を見たかもしれない全員の記憶を……面倒だから秀吉も消しちゃえればいいか。

幸い屋敷に来た時を基点にして記憶を消すための魔法の印をつけておいたので楽勝だらう。

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

۱۰۷

「せじめのうわが」

「……（スツ）」

「おせむじ」
二十九

「おはようアキ」

詩織を除くいつものFクラスの主要メンバーが集う。教室に入った明久は真新しい卓袱台に感動しながら自分の席に荷物を置く。

「そういえばアキ」

「うん？」

「昨日のバイト、どうだったの？坂本達レッズフィールドさんの家に行つて来たんでしょ？」

「あ、それ私も気になります」

バイト……？

「何の話？」

「はい？」

「アキ？」

昨日は確か……

「小学校で運動会をしてたはずだよ」

「俺はエステに通っていた

「ワシはプロレスを観っていたのじゃ」

「…………教会でお祈り」

「…………」「…………」「…………」

姫路さんと美波が凍り付いている。
いつたこどつしたんだろう。

「おまよひじやこまわ」

あ、詩織だ。

「シシシシシオー！？いつたこどつなつてのアキ達ー！？」

「何してたんですか昨日はー!？」

二人ともいつたいどうしたんだろうか。
詩織はその一人の剣幕に困ったように首を傾げ、ポンと思いつくと
口元に人差し指を持つて行き

「禁則事項です」

とオチャメに言った。

翌日、僕のお金を横領していた母さんから仕送りがちゃんとされて
いた。
いつもより2万ほど多めに送られてきたのでやはりなんだかんだで
お金を横領したこと反省したいんだなと思った。

2・5・3 バイト……したつけ？（後書き）

この小説って結構原作読んでること前提なんですね。
詩織が介入しない部分多くあつてしかしその部分を知つてること
前提で話が進んでる部分もありますから。

ようやく3巻に入る前の話終了。
次は合宿編ですね。

3・1 問題発生（前書き）

今回短めです。

3・1 問題発生

「good bye old satan」

謳ひよひに一言。

同時に胸を貫く熱い閃光。

『俺』の顔をした奴が私に向かつて手をかざしていた。
そうか。

ようやく分かった。

何故私が女として転生したのか。

全ては

「貴様のせい……だつたのか！」

前世の自分の顔をした『奴』を睨みつけて傷の確認をする前に転移魔力を発動させる。

場所はランダム　途中に何回か別の地点を中継することによって本拠地を悟らせない為に飛んだ。

「とまあこうこうことがあつたんですよ」

「軽つー?お姉ちゃん軽いよー?内容と反比例して語り方が軽すぎ
るよー。」

と言われても、幸い治癒阻害の術式は組み込まれていなかつたみた

いだからすぐに治癒できたり……。

「心臓に当たらなかつたのが命の分け目でしたね。さすがに即死したら治癒するものもできませんし」

「やついつ問題！？」

そういう問題なのだ。

そもそも上級魔法使いというのは神に匹敵する力をもつて理外の存在であることが非常に多い。

見た目人間でも中身が化け物とかよくある話だ。

そんな者達が一見致命傷をうけても次の瞬間には再生しているなんてのもよくある話なので、即死さえしなきゃ死なないのだ。

「で、お姉ちゃんの前世が男とかいう妄言の理由がわかつたの？」

「あくまで妄言なんですね……まあいいです。いえ、よくありますんが話がすすまないので置いておきます。

さて、私が女として転生した理由はただ一つ。あのクソッタレが私が本来転生するはずだった肉体を奪い取つたからですよ」

あの畜生。

人の胸貫きやがって。

「じゃあその身体は何なの？」

「この世界の神々がどういう世界の管理をしているのかは知りませんが、たぶんどつかから適等な肉体をもつてきたんでしちゃう。どうせ『魔王繫がりでいいんじやね』とかてきとうな理由ですよ」

「……神様つて偉いてきとうなんだね」

「そうですよ？そりゃあ世界の管理をしなきや自分達が困るからしますが、その他はボランティアになるので意欲的ではありません。たまに使命感に燃えてる神様が頑張つて人間を管理するんですが、千年くらいたつたら大抵他の神々に毒されて二一〇になります」

「そんな夢のない話は聞きたくなかったよ……」

神様つて仕事すればするほど格があがるけどそれで上るのは権力と腕っ節だけなので皆たまにしかしようとしない。

まあ詩織が前世で魔王だった時代にいつた異世界の神から聞いた話なのでどこまで本当かは知らないが。

詩織が幼い頃に会つた成り立ての神に聞いた話も合わせればそんなに間違つてないと思う。

「そういえばお姉ちゃん、そろそろ強化合宿だよね？」

「…………？ そうですね。それがどうかしました？」

「…………男のままで？」

「……それは考えてなかつた。

だがしかし、教職員は詩織の性別を分かつてるので部屋は女部屋にいれるのが普通なのだが

「そういえば明久君達と同じ部屋ですね……」

あの時は何も考えずにそのまま同じ部屋に入れられたのだが、今考えると問題だ。

西村先生が微妙な目で見ていたことをじやんと考へて、れば」のよ
うなことにほならなかつただう。

「あ、お風呂へいりましょ」

「あ、じやないよお姉ちゃん!？」

考へてから露見する問題の数々。

認識阻害で男風呂に入つても別にバレやしないのだが、さすがに女
として16年生きてきた詩織は抵抗があつた。
男を捨てたわけじやないがそこまで女を捨てたわけでもない。

「ん……学園長に話して時間外にひょりょと使わせてもういま
しゅう」

「……男風呂に入るとかやめてよ? お姉ちゃんを覗き魔として警察
に突き出したくないから」

「私は痴女じやありませんよ」

「あと移動手段はひとつあるお姉ちゃん。エクラスは現地集合なん
でしょ?」

Aクラスは文用学園からバスで移動らしい あまりの待遇の差に
泣いた。

「転移魔法を使います」

「え、おねえちや」

「転移魔法を使います」

「……いいの？それって」

「世の中の法律には合宿の集合場所に魔法を使って行つてはいけないなんてありません」

「それ屁理屈だよ！？」

「だつて明久君達と行くことになつたらどんでもない目に合つたて私の感が囁いてるんですよ！？」

明久と一緒にいかないかと誘われた時に真っ先に襲われたのは悪寒。そして信じられずに占つてみた結果、毒殺の相が出てきた。意味が分からぬが明久達が死ぬわけでもないことを占いで確認したので放置をすることにする。

詩織は巻き込まれたくないで別のルートで行くこととなつたのだった。

夕飯時、各クラスに分かれての食事。

誰が作ったかは知らないがなかなか美味しい。

この合宿所は文月学園が旅館を買い取つて作り変えたらしく、快適に過ごせそうだ。

「しかし……明久君はどういつたんですか？」

彼の食事事情ならば身体を引き摺つてでも食べに来ると思つたが。
Fクラスの主要男メンバ一は詩織の言葉にさつと視線を逸らす。

「明久君ならお皿」はんをこっぽい食べすぎたみたいで、まだ寝てますよ」

「アキつたら、食いしん坊なんだから」

……食べすぎ?

毒殺の相が出ていたのを知つてゐる詩織としてはどうしても疑わしい田で見てしまつ。

「……雄一君?」

「レッジフィールドか……知りたいか?」

「はい。そういえば私、未来予知ができまして　どうも毒殺されるリアルな夢を見たんですが、何か関係が?」

占いで未来の情報を限定的に現在へと流出させたのだが、細かい説明は省く。

「…………実は姫路の弁当がな、毒薬なんてレベルでは計りきれないほどの代物でな」

つまり明久はそんな毒薬を食べて倒れ付したらしい。あれ?

「置いてきたんですか?」

「…………飯抜きは困る」

「明久なら大丈夫じやろ」

「だな」

Fクラスメンバーって本当に仲が良いけど悪いですね。

3・1 問題発生（後書き）

詩織がTTSした理由を書きました。

そのうち番外編で裏サイドとか書くかもしれませんねー。

ちなみにですが3章は綾香が出来ませんが、別に裏サイドで死んだとかではありません。

綾香はお嬢様学校に通つて外出が厳しいので来れなかつただけです。

クリスにいたつては学年違いますしねえ。

3・2 卷を添え……え、まじですか？

強化合宿一日田の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌

『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れました。風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街とは違う場所で、何か素敵なことが起きるような、そんな予感がしました』

教師のコメント

環境が変わることで良い刺激が得られたようですね。姫路さんに高校一年生といつ今この時にしか作ることのできない思い出が沢山できることを願っています。

詩織＝レッドフィールドの日誌

『合宿所につき、誰もいなくて暇だったので中を探検した。探索の結果、赤のオーブと盗賊の小箱を入れられたので満足だった』

教師のコメント

いつたいどくを探索したんですか。

土屋康太の日誌

『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れた。あの感覚はなんだつたのだろうか』

教師のコメント

乗り物酔いです。

坂本雄一の日誌

『駅のホームで大きく息を吸い込むと、少し甘いような、仄かに酸っぱいような、不思議な何かの香りがした。これがこの街の持つ匂いなんだな、と感慨深く思った』

教師のコメント

隣で土屋君が吐いていなければもっと違った香りがしたかもしだせんね。

「明久、起きたか！ 良かった……電気ショックが効いたようだな」

わざわざ合宿所のどこからAEDを持ってきた雄一は明久が目を覚ましたのを確認するとそれをしまう。かなり心配しているフリをしているが詩織は雄一が明久を放置して晩御飯を食べていたのを忘れていない。

「…… 合宿所？」

「ああ、そうだ。全く贅沢な所だよな文翔学園が丸ごと買い取って、合宿所にしているんだとよ」

「でもそのおかげで快適じゃないですか。少なくとも私はのんびりできます」

「……シオ？」

「はい。なんでしょう？」

「……………え、同じ部屋？」

この部屋は8人部屋だが明久達と詩織で5人部屋として使っている。といのも厄介なメンバーを一纏めにして監視したい意図と、詩織は余つたのでいれられたのだろう。

「……いいの？」

「自衛手段は完璧です。なんなら私が寝てる時に触つてみますか？
消し飛びますけど」

ブンブン

残念、高速で首を振られてしまった。

「む、明久、無事じやつたか！良かつたのう……。お主がうわ言で前世の罪を懺悔し始めた時には、正直もうダメじゃと……」

そんな友人を放置して外出してゐる秀吉まじ外道とかちょっと思つた

詩織だが、決して口には出さない。

明久も生へと喜びを感じてゐるようなのでそれに水を差すことはないだろう。

それにもしても……と何か嫌な予感が詩織の警鐘を鳴らしていた。
とにかく嫌な予感がする。

「…………ただいま」

「お帰りムツツリーーー」

「…………明久。無事で何より」

「あ、心配してくれたんだ。ありがとう」

「…………情報も無駄にならずに済む」

「情報？昨日俺と明久がお前に頼んだ件か。随分早いな」

「あの、何の話ですか？」

試召戦争でもないのに今更何の情報が必要なのか。
つい気になった詩織が聞いてみると

「先日、明久の下に脅迫状が。雄一は盗聴の被害にあったのじゃ」

「…………はあ」

「…………犯人の痕跡を発見した。手口や使用機器から同一人物の
犯行と断言できる」

「まあそんな奴、二年の中に一人いるだけでも嫌だしきつと同じ人
だよね」

詩織も盗聴をやうづと思えば魔法で一発なのだが下品な気がしてや
つていない。

「それで、その犯人は誰だつたの？」

「…………（プルプル）」

「あ、やっぱり犯人は分からなかつたの？」

「…………すまない」

「いや、そんな。協力してくれるだけでも感謝だよ」

話を聞いている限りではムツツリーは善意の協力者のようだ。詩織は協力すべきか否かを会話を聞きながら考えている。

「…………『犯人は女生徒でお尻に火傷の跡がある』といつことしかわからなかつた」

「君は一体何を調べたんだ」

「今すぐ変態として突き出してもいいんですよ？」

それに対してもツツリーは網をはつたといふとその成果を流す。

『『いらっしゃい』』

『…………雄二のプロポーズを、もつ一つお願ひ』

「つてこれ翔子ちゃんじゃないですか」

「しょ、翔子……あいつもう動いてたのか！」

「よつまど手に入れたいんだね」

雄一ももつ認めちやえばいいのにと思つもの、そこは当人の問題だろア。

『毎度、一度目だから安くするよ』

『……値段はどうでもいいから、早く』

『わすがはお嬢様、太っ腹だね。それじゃあ明日 と言つたいとこだけど、明日からは強化合宿だから引越しは来週の月曜で』

『……わかった。我慢する』

「あ、危ねえ……強化合宿があつて助かつた」

「別にいいじゃ ないですか結婚するくらい……」

聞こえないよつに呟き、實際に腰掛け「嫌いじゃ ないでしょ」と付け加える。

男のツンデレとか誰得だよ本当。

あ、翔子得か。

そして次に犯人へのヒントとなる会話を聞いてみると、確かにお尻に火傷がある女生徒らしい。

どうも母親に盗聴のことがばれてお尻にお灸をすえられたらしい。

「やつだーもつあぐお風呂の時間だし秀吉に見てきてもうればー！」

「明久、何故ワシが女風呂に入る事が前提になつておるのじゃ？」

「やつですよ。こへらなんでも裸になつたりはれるでしょ」

雄一ももつと叫んでやつてやだせ。

「明久、それは無理だ」

「どうして無理なのさ？」

「いや、じゃから「シ」は野じゃと」

「3ページ目を見てみる」

～合宿中の入浴について～

男子ABCクラス	20	00	21	00
男子DEFクラス	21	00	22	00
女子ABCクラス	20	00	21	00
女子DEFクラス	21	00	22	00
大浴場（男）				
大浴場（女）				
大浴場（女）				

Fクラス木下秀吉：21：00～22：00 個室風呂？

「へそりー。」れじや秀吉に見てきてもいいのかどうかできないー。」

「やうこさんだ」

「なんでワシだけが個室風呂なんじゃー!?」

「……私との待遇の差に怒りを感じますね」

そりやあ男として登校しているのだが、男の秀吉は……つてこれは学園長の嫌がらせか。

あの腐れババアめ……

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！木下は！」ちへー・そこ」の
3馬鹿とその付属品は大人しくしなさい！」

付属品って私のことですか？

「仰々しぐゾロゾロと、一体何のまねだ？」

女生徒十数名がこの部屋に流れ込んでくる　え、何この状況。
「よくもまあ、そんなシラがきれるものね。あなたたちが犯人だつ
てことくらいすぐ分かるのに」

「はあ……犯人ですか」

先程から犯人だの盗聴だのよく聞くが、文月学園は実は犯罪者の巣
窟なのだろうか。

「コレのことよ」

「……CCDカメラと小型集音マイク」

「これが女子の脱衣所に設置されていたの」

「えー？それって犯罪じゃないか！一体誰がそんなことを

「とほけないで！一體貴方達以外の誰がこんなことをするつていう
のー！」

そんな」と言われても

「明久君達は犯人じゃありませんよ。だいたい女子風呂へ設置しにいく時間がなかつたじゃ ないですか」

明久君「氣絶してましたし。

「ふん、知ってるのよ。吉井が晩御飯食べにこづに女子風呂へ設置にいつてきたことをね」

「……はい？」

「それだけじやないわ。シオ、あんたでしょ。短時間で犯行を可能にする為にこの合宿所の詳細な位置取りを覚えたのは。その為に一番に合宿所に辿りついた」

「……え？ はい？ ちょっと……」

氣付けば明久は姫路瑞希と島田美波の両名に折檻されており、雄一は既に翔子にアイアンクローをくらつていてる。

ムツツリー二はどこの時代の拷問だと言わんばかりに右片を正座で抱かされていた。

そして疑惑がかかっている詩織も当然

「や、やめ……」

「大人しくしなさい！」

「り、理不尽です！」

拷問は30分程続けられた。

3・2 卷き添え……え、まじですか？（後書き）

あんまり変えるところなかつたや。

次の話あたりから詩織が本格的に動き始めます。

今回は傍観者ではなく犯人を追い詰める側として参加するでしょう。
魔法を使われたら一発で判明しそうだが　そこは何とかしよう。

3・3 お尻派（前書き）

なんかタイトルで10分くらい迷ってたけど、もう何も考えずにつけました。

3・3 お尻派

強化合宿一日田の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌

『今日は少し苦手な物理を重点的に勉強しました。いつもと違つてAクラスの人たちと交流しながら勉強もできだし、とても有意義な時間を過ごせました』

教師のコメント

Aクラスと一緒に勉強することで姫路さんに得られるものがあつたようで何よりです。今度の振り分け試験の結果次第ではクラスメイトになるかもしれない人たちと交流を深めておくと良いでしょう。

土屋康太の日誌

『前略。夜になつて寝た』

教師のコメント

前略はやつやつて使うものではありません。

吉井明久の日誌

『全略』

教師のコメント

あまりに豪快な手抜きに一瞬言葉を失いました。

詩織＝レッドフイールドの日誌

『女の子なのに女風呂の覗き疑惑をかけられ、合宿所を魔法で吹っ飛ばそうかと思つくらい暗黒面に落ちていきました。私だって女の子なんですよ。そりゃあ女の子っぽくないといろもありますけど、もう感性は完全に女の子なんですよ』

教師のコメント

……レッドフイールドではお気の毒でした。

詩織は悲しみの淵に立っていた。

他のメンバーもいるから聞こえなによい一言。

「私……女の子、なんですよ？」

昨日は普段こいつた折檻を受けていない詩織を雄一達は心配そうにしていたが、意気揚々と女子風呂へと覗きに行つた。

結果西村先生に補習を受けて疲労困憊といった感じで戻ってきてすぐ寝た。

今この部屋にいるのは女の子にも関わらず女子風呂への覗き疑惑をかけられた一人の被害者。

ぶつちやけ認識阻害なんかで男のフリして登校していたのが悪いのだが、無実の罪で罰せられた詩織はどこまでもネガネガしていた。膝を抱えて横になつてシクシクと漏れ出てくる声が第三者がこの場にいれば居たたまれなくなること間違いなしだ。

といふか同じ部屋のメンバーが力いっぱい詩織から田を逸らしていく。

「しゃしゃしゃ」

「……シオは案外打たれ弱いのじゃ」

「みたいだな。これは作戦には組み込めんな」

雄一は冷静に詩織の状況を把握し、部屋で待機してもいいことにした。

根元に制裁を加えていた姿を考えるとここまでガラスのハートだと
は思わなかつた雄一は思わぬ戦力外に頭を抱える。

Bクラスのメンバーを腕輪の力一つで吹き飛ばした力は伊達ではないのだ。

「とりあえず合同学習だよね。ほらシオ。立ち上がり

「いいんですよーだ。私は女の子の裸を覗きに行く変態なんですよ

「…………」

「…………」

「翔子ちゃん…………」

「…………詩織。大丈夫?」

切なそうに翔子を呼びながら抱きつく詩織。

その姿を執拗に構われなくて安心したようなモヤモヤするような気持ちで見つめる雄一。

(シオ＝レッドフィールドか。俺と会ったことあるんだよな？何時だ？翔子とも面識があるということは小学校低学年くらいの話だよな？……待て、翔子は何て言つた？)

クラスメイトの女顔の男が翔子に抱きついて慰めてもうつているのを注意深く観察する。

「私は悪くないんですよ…といつか私が覗くはずないじゃないですかあ……」

「……うん。分かつてる。詩織はやつてない」

(……詩織？詩織ってあの召喚大会で出てきたシオの兄弟だよな。……同一人物か。ならシオって名前は偽名か？待て。おかしい。召喚大会で見たレッドフィールドは間違いなく女だった。……)

もう一度注意深く詩織を確認する雄一。

(……俺の目の錯覚か？何だあの胸のふくらみ)

よくよく見てみると詩織の男子制服の胸辺りが膨らんでいた。
あれをどうして男だと俺達は思つてたんだと雄一はさらに考へる。

(詩織……詩織……どこかで聞いたような気がするんだが。……！？)

唐突に襲い掛かるフラッシュバック。

その姿は

『詩織が男の名前で何が悪いっ……』

「雄一どうしたの！？ 滅茶苦茶震えるよ！」

「い、いや。何でもない」

自身をフルボッコにするかつての女の子の蛮行に恐怖が蘇ったとは言えない雄一は口を噤む。

そういえば明久が以前シオが女で魔法使いだと戯言を言っていたが、もしそれが本当ならば全てに納得がいく。

というか何であそこまで詩織が落ち込んでいたのかやつと納得した。そりゃあ女の子なのに女子風呂の覗き疑惑をかけられてしかも無実の罪で折檻されたら落ち込む。

「はい？」

翔子に抱きついて悲しみを癒していたら唐突に近くの誰かが認識阻害の対象外となつた。

何でこのタイミングで、と思い周囲を見回して、その人を見つける。

「雄一君ですか」

「……雄一？」

呴いた言葉に翔子が首を傾げる。

「いえですね、昔に私と会つたことを思い出したようですね」

「……そう」

部屋の男子が4人中2人が詩織の性別を知つてゐることになる。これ以上増えたらさすがに問題になりそうで秀吉とマッシュリーにはバレないようになつたらしいのだ。

「工藤さんだつけ？」

「そうだよ、君は吉井君だつけ？久しぶり」

見るとAクラスらしきボーイッシュな女の子が明久に話しかけていた。

女の子の服を着てるので間違いなくAクラスだらう。

「それじゃ、改めて紹介させてもらひうね。Aクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から7・8・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物はショーキームだよ」

「ショーキームと聞きまして！」

「……お主、案外安いのじゃな」

落ち込んでいた詩織が飛び込んできたのを見て呴く秀吉。

「ん? ビリしたの吉井君」

「いや、別に工藤さんの特技を疑ってるわけじゃないんだ。ただ、その……」

「はい。特技はショークリームですね」

「シオはもつと人の話ちゃんと聞こえよー! ?」

「え? 違うんですか?」

がっかりです、と言い放ち勉強机に座り教科書を取り出す詩織。後ろではスペツツがどうのとか話しているが、奴らに羞恥心はないのだろうか。

工藤さん 僕 こんなにドキドキしてるんだ やらない?

「…………」

ない、んだろうなあ。

音をつなぎ合わせて一つの言葉にしていくようだが、なかなか上手い。

そもそも明久だってそんな変態的な言葉を勉強中の人たちの中で

「キミが 僕にお尻を見せてくれると嬉しい!」

「…………」

明久は変態のようだ。

「なるほど。明久君はお尻派ですか……」

「何感慨深げに咳いてるのセシオー！違つよー違つからねー…？」

お願い工藤さん！　僕にお尻を見せて

「隠さなくていいんですよ。男の子の趣味嗜好は人それぞれですか？」

「その辺に満ちた顔で許容するのやめて…」

「……今の、何かしらね？瑞希」

「なんでしううね？美波ちゃん

私刑執行人のお出ましのようだ。

「まさか、ただでさえ問題クラスとして注意されてるのに、これ以上問題を起こすような発言をしたバカがいるのかしら？」

「困りましたね。そんな人がいるなら、厳しいお仕置きが必要ですよね」

最近姫路瑞希が完全にFクラスに染まったと思う。

FFFF団といい、染まった原因はたぶんそこいらへんだと思つ。

「一人ともこれは誤解なんだ！僕は問題を起こす気はないで、ただ純粋に　お尻が好きって　だけなんだ　待つて！　今のは途中に音を重ねられたんだ！お願いだから僕を後ろ手に縛らないでーあとそっちの皆も笑つてないで助けてよー特に雄一とシオー！」

「いえ、いつまでたつても答えを出さない、しかも気付かない明久君にも落ち度はあるのかと」

「何の」「ムツツリーー助けてー。」

「上藤愛子。悪ふざけが過ぎる。……、つまくやつてみせる」

「つづりとムツツリーーは上藤愛子と回りよつに小型録音機を構えた。

「姫路さん。美波。よく聞いて。さつきのは誤解で、僕は お尻が好き って言いたかったんだ。特に雄一 とシオ の が好き ってムツツリイーイイーッ！後半は貴様の仕業だなー上手くやるつて、上藤さんよりも上手に僕を追い込むことなのーー！」

ところがそこに何で私の名前が ああ、彼らには男に見えてるんだっけ。

「…………上藤愛子、お前はまだ甘い」

「…………さすがはムツツリーー痴…………ー。」

まったく何やつてるんだろうこの一人。

「…………吉井。雄一は渡さない」

「しょ、翔子ちゃん？」

まさか合成に気付いて ないんだろうなあ。

「いいですか翔子ちゃん。あれは……」

「同性愛を馬鹿にしないでください…」

「うう やこですー。」

いきなり入室してきたコルネ頭を反射的に殴り飛ばす。
蛙が潰れたような声を出して崩れ落ちたその人物を廊下に放り出し、
今度こそ勉強を再会させる。

「ありがとうシオー！これからもよろしくねー！」

「…………？は、はい？」

何故か島田美波にとても感謝された。

3・4 観き準備前 私は興味ありませんよ（前書き）

今回も短め。キリのいいところで終わるとどうしても短めになりがちなのは確かだが、今回は単に筆が進まなかつただけともいう。

3・4 観き準備前 私は興味ありませんよ

「とにかく雄一・起きあわせアラタッ！」

明久の叫び声に渋々ながら目を覚ます。何事かと見てみると雄一が明久の寝ている布団のすぐ傍で寝ていた。翔子から聞いていたが寝相が悪いのはまだ直っていないらしい。

「ふああああ……今日も自習ですか……」

毎日似たようなスケジュールにつきだりするが、ある意味その為の合宿なので文句は言えない。

ルームメイトは昨夜も覗き騒ぎを起こして補習で散々だったようだ。にも関わらずやたら元気なのは、馬鹿だから疲れなんて知らないのか。

隣で明久が雄一を撲滅しようとしているが、この一人の仲が悪いのはいつもの事なので放つておく。

「さて」

今日は参加しますか。

朝食の時は明久達と離れて食事をして、自習中はやめておこうと思
い引き伸ばし続けてお風呂の時間前。

自習中の後半に少しだけ話そうかなとも思ったのだが、いつのまに

か明久達が消えていた。

「しかしあ前が参加してくれるのは思わなかつたぞ」

「つむ。あまり不正とか好きやつじやなをやつだからの」

実際魔法でかなり好き勝手やつますが、と詩織は心の中で呟いた。

「それで昨日はFクラスで特攻したよつですが、今日はどうするんですか?」

「今日はD・Eクラスをこけらに引き込むことに成功した。戦力がイーブンとは言いがたいが、昨日よりはマシだな」

「だよね。Fクラスメンバーだけだと相手によつては瞬殺されちゃうしね」

ここにいるFクラス主要メンバーと姫路瑞希以外は特に長けた教科や操作技術があるわけではないので点数差で普通に負けてしまう。ならば人数を増やすというのは当然の結果なのだが、あまりそれは賢い選択ではない気がする。

「人数を増やすのは構わないんですが、それならAかBを引き込むべきでは?」

「…………Aは説得に失敗。Bは纏まつてない。Cは代表が女子だから尻込みしている」

「なるほど。まあ犯罪ですから尻込みしないほうがおかしいんですけど……」

「でもここまで騒ぎになると入浴 자체中止になつたりしないのかな？」

「それはないだろ。教師側にもプライドがあるからな。『覗きが阻止できないかもしないので入浴は控えてください』なんて言つと思つか？」

「ああ、そつか」

……待てよ？

それなら最終的に出てくるのは教師陣ということになる。本当にD・E・Fクラスの戦力だけで足りるのだろうか。

「それとこれは憶測だが……教師側はこの事態を好ましく思つてゐる可能性もあるな」

「え？ 僕らの覗きを？」

「ああ。あくまでこの合宿の目的は『生徒の学習意欲の向上』だからな。目的がなんであれ、召喚獣を使った戦闘を行う以上は勉強をせざるを得ない。女子側も同様だ。防衛のために召喚獣が必要不可欠だからな」

なるほど
詩織はそろそろ教師側が明久達をこの部屋で監視すると思つたのだが、その考えは杞憂らしい。

本当に雄一の考え方なら最後まで好きにさせてもらえるだろ。

「吉井っ、大変だ！」

もつすぐ作戦開始時間といつとひで須川亮が部屋に飛び込んでくる。

聞くといふると大食堂で待ち伏せされて戦力を分断されたようだ。

ムツツリーによると情報は漏れてないらしいが明らかに先手、情報が漏れたのではなく雄一の思考を完全に読んだのが前提だとすると……

「翔子ちゃんですか」

「よっぽど雄一の覗きが許せないんだね

やはり翔子は反対か……まあ当然だろ。詩織が話しおれば翔子とて理解して力を貸してくれると思つたが、それは希望的観測だ。

雄一がとある理由で脱衣所へ行きたいので手伝つてくれと言つたところでの、そのまま覗きに行かないという保障はない。むしろFクラスメンバーだし嬉々として覗きにいくだらう。

「とにかく出るだー！」

作戦はもうなじようなもの、とにかく分断された戦力を練り直す。そう言い放ち雄一は部屋を飛び出した。それに続く明久達を見てから小走りでついていく。

「…………そりゃ召喚獣はどうしましょ。」

前回の大会の時に〇点召喚ではなく通常召喚にしたのだが、今はまた〇点召喚だ。

まあ今日はそれを補う為に一つ技をつけておいたので大丈夫だろ？

「あの明久が一撃で……噂に違わぬ才女だな」

「はい？」

明久が一撃つて……………彼は操作技術に長けているだけでまともに攻撃を食らえば一撃で死ぬだけの点数なんですが。そう思い相対している者とその点数を見て吹いた。

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 吉井明久
総合科目 7791点 VS 902点』

「…………」

「あ、レッドフィールドさんですか。貴方も防衛に参加するんですか？」

詩織の姿を確認した高橋先生は召喚獣のフィードバックによる痛みでのた打ち回っている明久を一瞥してから話かけた。
しかし

「防衛に参加？何なまっちょろい」と言つてるんですか

「レッドフィールドさん？」

「私は貴方の敵です。試験召喚」^{サモン}

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 詩織=レッドフィールド
総合科目 7791点 VS 0点』

「レッシュフィールドさん。いくら無実の罪で痛めつけられたからって自棄になつては……」

「自棄？違いますよ。これは……」

ゆづくと杖を高橋先生の召喚獣に向ける。

「ハツ挡たりとこつのですよ」

「余計悪いですよー。」

3・4 観き準備前 私は興味ありませんよ（後書き）

次回詩織VS高橋先生の巻。
まだ作者の頭は何も考えてないのでたぶんノリで決まる。

3・5 強者達の戦い（前書き）

もつといい文章書けるんじゃないかと思つナビ、これが限界なんだ
……。

戦闘つて文才がよく関係するから理系の俺には厳しいんだぜ。

3・5 強者達の戦い

0点開始召喚、そして点数は相手のほうが遥か上 悪条件に悪条件が重なつたようなものだ。

詩織の召喚獣は圧倒的に格上相手には弱い。

ディバインバスター やスター ライトブレイカーなど当たれば格上相手でも消滅させられる。

しかし格上である相手はまず点数の関係上素早いので当たらない。その為にバインドといつものがあるがこれの拘束力は自分の点数に比例するのだ。

つまり格上相手ならばすぐに破られる代物である。

もしも詩織の持ち点数が高橋先生に匹敵するならばやつよつはあつた。

しかし詩織の総合科目の保持点数は4200点前後……腕輪保持より少し上程度だ。

他の教科だけでいえば学年で首位をはれるほど優秀なのだが、世界史と日本史と地理、古典が足を引っ張っている。

だからこそ総合力では翔子に勝てないのだ。

本当は総合科目ではなく苦手科目以外で勝負したかったのだがそうも言つていられない。

「…………」

高橋先生の手がぶれたのを見て『プロテクション』をはる。するとほぼ同時に何かが詩織の召喚獣の近くで打たれる音がする。圧倒的な点数に鞭 もはやその攻撃は不可視の領域だ。

「よく防ぎましたね」

「鞭は確かに細いし慣れた人が使えば防御も回避も難しいです。しかし鞭には決定的な欠点があります」

「何ですか?」

「それは鞭を打つためには身体を大きく動かさないといけないということです。小さな動きだけで鞭を扱うのは不可能ですからね。そして」

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 詩織=レッドフィールド
総合科目 7791点 VS 0点』

「……ダメージをうけてませんね」

「はい。プロテクション 発生時間は僅か0・1秒ですが、全ての攻撃をシャットアウトすることが可能です」

動きが鈍い召喚獣を防御面で強化する。

それが0点召喚という欠点を抱えている詩織の秘策だった。

「ではいきます プラスターシステム、コミットー、2.リレー
ス」

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 詩織=レッドフィールド
総合科目 7791点 VS 2000点』

本来ならば4000点まで一気にブーストしたいのだが、高橋先生の武器は鞭だ。

何回も打たれるならともかく一発一発の攻撃力はあまり高くない。しかしその分速さが十分に高いので4000点までブーストして後

がないような状況は作りたくなかった。

「アクセルシューター」

4つの弾が宙に浮かぶ。

高橋先生も鞭を振るために大きく右手を振り上げる。

「…………いきなさい！」

「田を覚ましなさいレッズフィールドさん！」

同時に放たれる攻撃。

相手の召喚獣の動きから鞭の軌道を予想した詩織はその位置に光弾を配置、手元にさりに一つ残して残りの二つを弧を描かせながら飛ばす。

左右から迫り来る光弾に高橋先生は鞭を一度高速で振ることで排除しようとする。

「ディバインバスター」

一発目が消える直前でアクセルシューターの魔法を取り消し、すぐさま次の魔法にかかる。

もちろん目標は 召喚獣を一撃で消せる頭。

「早い！？」

高橋先生が予想以上の攻撃の早さに驚き、桃色の光線をサイドステップで避ける。

そしてそのまま一回転し、鞭をなぎ払つかのように振るった。

「ディバインバスター」

それを予想していたかのようにスライディングで鞭を潜りながらの砲撃。

「！？」

鞭を振り終わった状態の僅かな隙に迫り来る砲撃。

それを高橋先生は避けられないと判断したのか左手で光線を受けながら射線から避けた。

左手でかばわなければ顔に当たつて勝ちだつたかもしれないが、やはり一筋縄ではいかないよう

「つ

不味い、失敗した。

そう直感的に悟つた瞬間鞭に打たれる詩織の召喚獣。

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 詩織＝レッドフィールド
総合科目 5814点 VS 2937点』

こちらが削れたのは2000点程に削られたのが1000点程上出来だろ。

しかしこちらの点数が削られたのは明らかに判断ミスだ。

高橋先生程の点数になると砲撃を撃つた後の硬直すら命取りだ。プロテクションで防ごうとしたのだが設定した硬直時間ではあることも出来ず、そのまま受けてしまった。

「アクセルシューター」

今度は五つに増えた光弾の一つを手元に残して三つを相手に向かわせる。

そして

「な」

同時に召喚獣を高橋先生の下へと走らせる。

どちらも遠距離型なのは分かっているもののこのままで負けるのは確実にこちらだ。

ならば突破口を開く意味でも接近するしかない。

一瞬で消される三つの光弾を確認すると手持ちの光弾も消し、相手の拳動全てに神経を集中させる。

「つ！」

突っ込む詩織の召喚獣に放たれる鞭の連撃をプロテクションのみで防ぐ。

0・1秒のみ展開可能なこれにはクールタイムは基本ないがある制約が存在している。

それは展開後の0・1秒間に相手の攻撃を防がなければ20秒間のクールタイムが発生するというものだ。

つまり確実に相手の攻撃を防がなければプロテクションは次の攻撃を防げない。

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 詩織＝レッドフィールド
総合科目 5814点 VS 4109点』

足や手にだが、一度ずつ鞭を受け損なったのを確認するがそれでも十分に接近できた。

あと一撃で詩織の召喚獣は消滅するが、この距離なら十分。

足や手にだが、一度ずつ鞭を受け損なったのを確認するがそれでも十分に接近できた。

あと一撃で詩織の召喚獣は消滅するが、この距離なら十分。

接近する詩織を嫌がったのか高橋先生は後退しようとすると前に杖を相手に向かって槍投げの要領で投げる。

「投げた！？」

「武器なんて使えてなんぼです！そして バインド！」

杖が高橋先生の召喚獣の胸に当たり、200点程削ると同時にピンク色の帶が全身を包む。

そして落ちた杖に手を伸ばしながら

「アクセルシューター」

「同時行使できるんですかそれ！？」

実は詩織の召喚獣の技の中でもバインドのみ特別なものだ。この技だけは他の魔法の使用中でも使うことができ、またこの魔法を使っている最中でも他の魔法を使用できる。

だからこそアクセルシューターで八つの光弾を出し

「これで終わりです！」

全てを高橋先生の召喚獣にぶつけた。

細かいコントロールを全て投げ捨て、落ちている杖を拾いながらの攻撃。

そしてそのまま杖を流れるような動作で相手に向け

「デイベインバスター」

砲撃でもつて貫いた。

「で、私は勝つたというのになんですかその体たらく」

「……」「めん」

「高橋先生を抑えられたのは今回だけですよ? 次はきっと容赦の欠片もなく殲滅していくと思います」

「すまん」

「下手すればチャンスは今日が最後だつたかもしません。だとうのに勝てそうになかったから降参?」

「……申し訳ない」

「馬鹿ですか? ~~下~~座すればいいとでも思つてゐるんですか?」

「すまぬ」

明久、雄一、ムツツリーに秀吉を正座させての説教。

自分があんなに頑張ったのに降参なんて結果で負けたのだけは許せない。

確かにハツ当たりという目的があつたもののそれも高橋先生を相手にすれば明久達がなんとかしてくれると思つたからだ。

今回の最終目標は断じて高橋先生にハツ当たりするためではない。

「おひこです。寝るのです。寝るつたひ寝のんです

そして詩織は不貞寝を決め込んだ。

3・5 強者達の戦い（後書き）

原作知ってる人は予想通りかもしませんが、この戦いにおいて高橋先生は最強戦力ではありますが最終防衛には携わってません。だからシオリンは頑張つてますがこの勝負の勝敗は大して関係ありません。

まあシオリンすねちゃいましたけど。

強化合宿三日田の日誌を書きなさい。

土屋康太の日誌

『前略（坂本雄一に続く）』

教師の「メント

今度はリレー形式ですか。次から次へとよく思いつくものです。

坂本雄一の日誌

『そして翔子が俺の前で浴衣の帯を緩めようとした。俺は慌ててその手を押さえつけ、思い止まるように説得した。ところが、隣では島田が明久に迫つていて妙な雰囲気になつており（詩織＝レッドフィールドに続く）』

教師の「メント

君たちに一体何があつたのですか？　土屋君が略した部分がとても気になります。

詩織＝レッドフィールドの日誌

『物音に起きてみればそこには既に雄一に馬乗りになつてR18寸前の翔子と思考を読んでみると妙な食い違いをしている明久と島田美波がいた。空氣を読んで部屋に結界を張りつか迷っていた時、それは起きた（吉井明久に続く）』

教師のコメント

あまりポンポン魔法を使わないようにしてください。……吉井君の日誌はどうでしょ？

吉井明久の日誌

『後略』

教師のコメント

ここがその引きはないでしょう。

「ふに？」

隣で誰かが話す声と激しく動く音に田を覚ます。

合宿所なので人の出入りや話す声くらいには反応しないように警戒レベルを下げていたのだが、それを越えたようだ。まったく深夜に誰だと思い周囲の状態を確認する。

明久 島田美波に迫られている。もげる。

雄二 翔子に迫られている。いいぞもつとやれ。

ムツツリーニ カメラを構えている。ふざけんな。

秀吉 寝てる。特になし。

「…………」

いつたい何が起こったんだね？

翔子はいつものことだとして、何で明久は島田美波に迫られているんだ。

いや、一方通行だが好意があるのは知っていたが 明久は何をしたんだろ？

「…………リーディング」

思うように頭が動かない。

とりあえず明久の頭の中と島田美波の頭の中を覗き、考えていろ」とを読み取ると

「えっと」

明久は島田美波を刺客か何かと思つており、島田美波は明久に誘われてホイホイ乗り込んできている。
……本当に明久は何をしたんだ。

「ふう。…………」

「…………」

溜息を吐き、ふと翔子のほうはどうなっているか見ると雄一と田が合った。

その雄一の視線を辿つて翔子がこちらを見ている。

「…………（スツ）」

指を一本。

「…………（「クニ）」

「ちよつと待て！？」

一時間でいい？な詩織にの問い合わせに頷いて返した翔子のやり取りにツツ「ミミを入れる雄」。

とりあえず……

「ムツツリー！」これは没収です」

「……………？」

ガーンとバックに大きく出そなぐらいショックを受けているムツツリーを尻目に奪い取ったカメラを自分の鞄の中に入れる。そしてふとそのカメラのメモリーが気になつて再び取り出してから中身を確認すると

「……………ムツツリー！」盗撮は犯罪ですよ？」

「……………盗撮じゃない」

「なら何ですか？」

「……………芸術だ」

「えい」

不健全なものを全て消去しておぐ。

もちろん後でデータの残骸から復旧できないように魔法まで使って。

「あーっ！？」

キャラすり捨てて叫ぶムツツローーの声に反応したのか島田美波が
よつやく秀吉以外が起きていることに気付く。

どれだけ畠田なんだと前とシッコリを入れたいといふのだ。
だがその前に部屋に結界を張つて部外者が来れないようつけておこ
うか迷ひ。

がその決断をする前にあれが入ってきた。

「お姉さま無事ですか!? 美春が助けに来ましたよーー。」

「み、美春ー? どうしてあんたがここに来るのよー。」

「せつときお姉さまのお布団の中に入つたら誰もいなかつたから、も
しゃと思つたり………やつぱつ」も探しにきて正解ですー。」

「あの……一応今は睡眠時間なんですが」

詩織がオズオズと申告してみると当然のことながら無視される。

「あ、危なかつたわ……。昨日で懲りたと思つて完全に油断してた
のに……」

「お姉さまー男の部屋に来るなんて不潔ですーおとなしく美春と一緒に裸で寝ましづーいえ、勿論色々するので寝かせませんがー!」

「やめるんだ清水さんーそれ以上の会話はムツツローーの命に関わ
るー。」

「…………（ボタボタボタボタ）」

「雄一」、とにかく続報

「翔子、お前は本当にマイペースだな！」

「翔子ちゃん？さすがにチャンスだからといつても初めてが他の人に見られながらはどうかと思うんですが」

「な、なんじゃ！？田が覚めたら女子が三名もある上に雄一は押し倒されてムツツリーは布団を血で赤く染めておるぞ！？」

血つて落ちにくいんですね……。

「ああああっ…皆してそんなに騒いじゃダメだよっー！」のままじや、鉄人に気付かれて「

『なに』とだつ…今吉井の声が聞こえたぞっー』

廊下から響き渡つてくる西村先生の声。

今就寝時間中なんだから貴方も少しさは自重してください。

「　　」…………「　　」

「え？なに？なんで全員が『吉井が声を出したせいで見付かっただけ』みたいなの？」「

いや、実にそのとおりなのだが。

再び溜息を吐いてからどうやって西村先生に見付からずに逃げられるか話し始める一同を見る。

「アホですか貴方達。こうすれば万事解決です」

「男の分際で私の首根っこを掴むなんて不潔です！やめてください！」

「はいはー」

清水美春が暴れるものの浴衣を掴んでいるので帯を抑えないと脱げる。

だから暴れるとこでもそこまで激しいものではない。

ガチャリとドアを開け、廊下に出るといこうに向かって走り去る西村先生に向かつて手に持つそれを差し出す。

「どうしたレッズフィールド。吉井の声が聞こえたが

「はい西村先生。これが明久君に闇討ちしようとしたので歎獲しました。補習室で反省させておこして貰ひたい」

「なつーーー」この男は嘘をつ『ああ、弁明はしないことです。島田美波に迷惑をかけてくなければ』つ……

今この場で正しい弁明をすれば部屋は確認され、島田美波も補習を受けるだろう。

そのことを理解したのか

「なんて下劣なんですかー私が言つ事を聞かなければお姉さまに手を出すなんて……ーーー」

「……西村先生これとつとつていてください。日本語通じませんし、

「…………」

西村先生はこちらを疑わしそうに見やり、そして今も暴れようとしている清水美春を見る。

「……まあいいだろ。問題は起こしてないな?」

「はい。大丈夫です」

しつかりとそう答えると西村先生は一つ頷いてから廊下を去つていった。

片手にコルネ髪のあれ、清水美春を引き摺りながらやっと寝れる、と思いながら部屋の中に入る。

そこには西村先生がいなくなつたので再び雄一に襲い掛かろうとしている翔子の姿が。

「……翔子ちゃん」

「……何。今忙しい」

「レッドフィールド助けてくれ!」

「そんなことはいいか『明久君は黙つてくださいね』う……はい」

「はあ。あまり私を困らせないでください」

「…………わかった」

すうじい泣々と引き下がる翔子を見て雄一は詩織がまるで救世主かのように見えた。

今分かつた。

翔子にとつて詩織はストップバーだと。

翔子対策が分かつた雄一はガッツポーズをとつてから詩織に感謝を告げた。

3・6 夜這い編（後書き）

今回は描写するか迷つたんですが、夜這い編。綾香が夜這いに行くパターンも考えてみたんですが、カオスになつて收拾がつかなくなる可能性高いので今回は見送り。ちなみにシオリンは翔子を超応援してるので雄一の期待はあまり意味ないものだつたりします。

3・7 観光の結末（前書き）

……やついいんだ。

3・7 観きの結末

「この強化合宿全体についてのまとめを書きなさい。」

詩織＝レッドフィールドのまとめ

『初めて男という生き物そのものに嫌悪感を覚えた。清水美春の気持ちが少しだけ分かった気がする』

教師のコメント

強化合宿中の男子達の行動は確かに田^だが余るものがありました、が、同性愛に走るのはまだ早いと思います。あとまとめなのでもう少し長めに書いて欲しいんですけど、提出しにきたレッドフィールドさんがとても怖かったのでこれでいいです。

今日は強化合宿最後の夜、つまりは観きの最後のチャンスがある。会話を聞いていると雄一は女子の写真を男子達で回して戦意の高揚を田指しているらしい。

あわよくばA・B・Cクラスの男子達も加勢させようとつい魂胆だらう。

しかし横から写真を見せてもらつたが、確かに可憐こと可憐いがそれだけじゃないだろうか。

ひょっとして転生して感性までもが女になつたのでそつ感じるだけなのか？

「むづ

既に雄一達は作戦開始時刻を待つばかりで、明久がソワソワと時計をチラチラ見ていた。

「明久。今更ジタバタするな。補充のテストも全て受けたし、写真も回した。やるべきことは全てやつたのだから、あとは何も考えずに戦うだけだ」

しかし雄一は無駄に男らしい……目的が覗きといふことを考えるとあれだが。

あれ？ 観きが目的ならそれも男らしいといつてもいいのか？

「D・E・Fクラスは昨日に続いて全員参加のようじや。あとはA・B・Cクラスが協力してくれるがどうか、じゃな」

「今日は特に防衛が厳しそうですね」

先程買つてきた緑茶のペットボトルで喉を潤しながら呟く。
それを耳ざとく聞いた雄一は興味深げに詩織を見た。

「ほう。分かるか？」

「当たり前です。D・E・Fクラスが補充テストを受けたということはまだ覗きを続行するということが教師達に丸分かりです。さらによれば今日が最後のチャンスな上、昨日と同じではないのは確実なのでその分防衛力を強化するのは当然の結果です」

下手をすれば内密に女子の入浴時間ずらして入ってるんじゃないかな。
そう思ったものの口には出さない。

雄一もその可能性に気付いているだろうが、そもそも彼らの目的は

風呂場ではなく脱衣室だ。

そりゃあ雄一とて男の子なので覗けるなら覗きたいだらつが、それでも田的を逸する」とはしないはずだ。

「ああ、その通りだ。今日の戦いは今までより厳しいものになるだろつな。で、レッドフィールドはどうするんだ?」

「ふむ」

正直もう昨日高橋先生を倒した時点でお腹一杯だ。
それに雄一は詩織の性別を知っているのでそもそも士気が低いのは承知している。
だからこそ断るのは簡単だらつ。

「…………むむむ」

ピキーンと直感がきた。

……よし。

「今日は部屋でお留守番してますね」

「やうか。無理強いは出来ないしな」

占つてみた結果、『彼らの望みは失敗する』どちらにこの彼ら、といつのは文月学園男子のことだ。

であるならば覗きは失敗する確立が非常に高いのだらつ。
詩織がそのことを踏まえて動けば成功する確率も上がるのだらつが、敗戦濃厚の戦いに手を出すほど詩織は愚かではない。
となれば傍観が一番だらつ。

家から手元に転送した本を読み終え、背伸びをしてから時計を見る。既に時刻は9時を過ぎている。どうやら一時間近く集中していたようだ。

「サーチ、つと」

女子風呂の脱衣所の生体反応を調べ、誰もいないことを確認する。やはり入浴時間をずらしたようだ。

となれば教師陣はこの事実を伝えるだけで男子達の士気を簡単に削ぐことができる。

なるほど、こりゃあ負けだな。

そう思いながら「転移の魔法陣を

「つと、いけないですね」

そういうえば脱衣所にはカメラが仕掛けられているのだった。
記録媒体への認識阻害をはつてから「転移」を行う。

一瞬の浮遊感の後に変わる視界。

「ん、さてと……」

服を脱いでタオルを巻いてから……

「つと何で学園長がいるんですか」

「ああん? そつちにそ何でいるんだい

お互いいにじにいにいことが疑問のようだ。

浴室に音が反響し、しばらく見詰め合つが詩織は興味を失ったかの
ようにまず身体を洗い始める。

ちなみに詩織はお風呂セットを持ち込んでおり、ボディソープやシ
ヤンプーは全て自作の代物だ。

まあ自作といつても肌に優しいとかの効能はないで、全て魔法関連
の品なのだ。

「~~~~~」

無意識のうちに歌を歌っている詩織を学園長は胡乱な目で見てから
溜息を吐く。

まあ一人で独占できると思つていたら厄介なガキがきたとかその辺
だろ？

髪と身体を洗い終え、湯船につかりほつと一息。

「ふうー。癒されます……」

この瞬間、詩織は心身ともにタレきっていた。

超油断していたといつてもいいだろ？

だからこそ大声で行われていたそのやり取りに気付くことなく、湯
船に身を沈めていた。

「全員、心して見ろ！これが俺達の勝ち取った栄光だ！」

ガラリと扉が開けられる。

ここで詩織にとつての不幸は最近男として活動しそぎて男の声に何
も反応しないことだ。

つまり雄一の声に慣れすぎて、タレきった頭ではそれが女子風呂に

入ってきたことに気付かなかつたのだ。

「な、なんだいアンタたちは！？雁首揃えて老人の裸見に来たのか
い！？」

『割にあわねえーつ……』

だからこそ詩織は不幸だった。

その声をひるめることと思い、何も考えずに注意しないことに困ったか
ら。

「いひぬせこですね。少しは静かにしてて……つて何を見て　」

湯船から立ち上がり、入り口に集まっている男子生徒たちに注意を
してからその視線がこちらに集まっていることに気付く。

自分　裸。

タオルは？　かるうじてかかっており、下はかるうじて隠れてい
るが上は丸見え。

……

「ふ……」

『…………』

ガン見であった。

「ふつとおん－ジョンサイドフォーム！」

詩織の身体が光つたかと思うとそこには白いブラウスにチエ
ックのスカート、そして黒いマントを着た詩織の姿が。

一瞬で着替えるといつ怪奇現象を見てよひやへ我に返つた男子生徒は田を逸らす、が

「今更ですね、それ！瞬きなる陽光、青き地にて恵みとなりて、全てを照らせ！」

詠唱によつて詩織の手から出されたのは熱線 つまりはビームだ。本来この程度の魔法に詠唱はこらないのだが今回は魔法陣を弄りながらの詠唱だ。

威力は死なないよう弱めてある理性くらい詩織には存在していた。「死ねつ！死ねつ！死ね……つー貴方達の価値は死ぬことで上がるんです！」

「ちよつーし、詩織！？」あ、あ、あーつー！」

「^{ハリ}明久撃破！」

「落ち着けレッドファイールドー争いは何もつつかあああああつー！」

「^{ハリ}雄一消毒！」

「……つー」

「そこ」の鼻血流しながらよけてるムツツリー！今肅清おしきよしてあげますから動くんじゃねええええつー！」

言靈を使って鼻血まみれながらのムツツリーの身体を縛つてからビームを放つ。

いきなり身体が動かなくなつたことに驚いている奴の顔に一撃。

鼻血の花が咲いた。

数十秒後、風呂場の脱衣室には男子の死体

生きてる

が転が

つっていた。

それを見て詩織は

処分通知

文月学園第一学年総勢 149名

上記の者達を一週間の停学処分とする

文月学園学園長 藤堂カヲル

ついムラツときてやつた。

覗いた女子生徒に裸にされてロビーで正座して徹夜を強要された身

としては心の底から後悔している。

写真はやめて欲しかった。

～とある生徒の反省文より抜粋～

3・7 観きの結末（後書き）

ブチギレシオリンがまた出てきました。
もういいや。

今回最後の戦いなのでシオリン参加すると思いまや、 参加しません
でした。

そもそも敗戦濃厚な勝負では詩織は逃げをうります。
そして……そう、 性別バレイベントです。

半月くらい前からシオリンは作者によつて男子生徒に裸を見られる
ことが決定されました。

超番外編・聖杯戦争（前書き）

ネタです。

10分ちょっとくらいで書いたネタです。
作者は原作をやったことがあります、今原作もってないのでかなり勢いで誤魔化しています。

ドクン

心臓が高鳴る音。

彼女、詩織は戦闘服である白いブラウスにチェックのミニスカート、そしてマントを羽織つて待機していた。

先日部下の下級神がある世界で失態をおかしたらしく、その責任を取るために詩織はここにいる。

向こうの管理者は笑つて許してくれたのだが、戦神として無理矢理責任を取ることを決めてしまった。

管理者は悩みながらある一つの仕事を持ちかけた。

すなわち、第五次聖杯戦争に参加すること。

なんでもその世界に間違つてドラゴンを投入してしまったので討伐してほしいらしい。

本来なら神が介入して瞬殺で終了なのだが、その世界は神が降りるにはあまりよくない世界らしい。

まあドラゴンが幻獣種とやらで最強だとか言われる世界なので、神の降臨はよくない結果を及ぼすのだろう。

「きましたね」

神域の端で静かに佇む詩織の足元に魔方陣が紡がれる。

神としての降臨はよろしくないので聖杯戦争というものに参加する形で降臨することとなつたのだ。

「では、いつてきます」

「サーヴァントサタン。契約により召喚に応じました」

自らが何かに召喚されたという感覚は実に久々だ。

同時に必要な知識も頭に流し込まれ、聖杯戦争のルールをしつかりと確かめる。

そしてその内容を整理しながら待つこと十数秒。

「…………？」

下げていた顔を上げ、周囲を見渡す。

「…………あれ？ マスターは？」

そりゃあいなくとも困らないけど、いないと聖杯戦争のルールとして駄目なんじやないだろうか。

魔法を使って自身のリンクを探したり周囲の生体反応を探査したりして状況を調べる。

結論、野良サーヴァントでした。

「あんた……何者？ サーヴァントなのは間違いないんだけど」

「凛。クラスは分かれますか？」

「分からないわ。剣だけで戦つてたからセイバーって言いたいんだけど……」

「剣を使うからセイバー……ですか。まったく、人々の人間界で魔法使いに出会ったと思えば、下級魔法使いばかりですか？」

「魔法使いですって？」

「そうですよ魔術師風情。正直貴方達、雑魚いんですよ」

自重しない戦神シオリンの猛攻は続く。

「^{ゲイ・ボルク}刺し穿つ死刺の槍！」

「はいはい。プロテクトプロテクト」

「何……我が必殺の一撃をたかが障壁で弾いただと？」

「とかか格が違すぎるって呪いがまったく通つてませんよ。まあ英

雄といつてもたかが人間レベルですね」

少しは自重しようと誰かが言つべきだがシオリンは目的もなしにサー
ヴァントにちよつかいを出し始める。

「貴様……何者だ！？」

「戦神詩織です。クラスはサタン

「ならば天の鎖ヘルキドウよ！」

「はいはい。『テスフレア』『テスフレア』

「ば、馬鹿な……神が鎖を……？」

「まあ神としての……貴方がたで言つなら神性なんていくらでも自
分でコントロールできますし。そもそも私、上級魔法使いですよ？」

何か喧嘩を売つてきた金ぴかを持っていた宝具全て奪つてから消滅
させむシオリン。自重しろ。

「くつ…… I am the born of my sword」

「あ、知っていますよそれ！私の故郷でよく見た奴です！なるほど、貴方が原点ですか……」

「何を言つて……なー？」

「でも」「めんなさい。その能力の弱点は知つてるんですよ。その芸術的ともいえる剣製、精製中にちょっとちづかいをかけられれば上手く剣を作れないんですよ」

「ミヤさんに剣製を一度も成功させずに歪な剣を量産させるジオリン。まじで自重しろ。

「約束された勝利の剣！」

「大聖杯がやつと壊されましたね……で、ドラゴンはいつになつたら登場するんでしょ？」「」

「貴様、サタン！？何故」「」「……」

「あらあらセイバーさん。……聖杯が消えたといふのに何故貴方は消えないんですか？」

「本当だ。セイバー、どうこう」となんだ?」

「私にも何がなんだか……」

「…………まだ、何か裏があるようですね」

来年春、Fate/stay night 自重しない魔法少女
シオリン～もう少女って年齢じゃない編上映開始。

超番外編：聖杯戦争（後書き）

上映開始とか書いてるけど、予定ないですよ。
騙されないでくださいね。

番外編・戦神シオリンの転生担当代理（前書き）

時間軸で言えば「バカテス編終了」の2億年後くらい。

あんまり需要ないだろうなと思いつつ書いた作品だけど、今日の分
が脳前に書ける気しないのでとりあえずで投稿。

本編は明日から作る（キリッ）。

気が向けばまた夕方くらいに本編書き終わって投稿するかも……？

番外編・戦神シオリンの転生担当代理

トントン

重なつた書類の横を机に軽く叩く」とで揃え、一枚目の顔写真と前世の情報を確かめる。

その書類をしばらく眺めていると

「戦神様。一人目入りますよ」

「わかりました」

自身の右腕ともいえる補佐官からの連絡に返事をする。
そして目の前に音もなく現れたのは

「うわ！？何だこの和室！？」

ギヤー、ギヤーと叫ぶ人間だった。

「こんにちわ△さん。貴方は死にました」

「え？え？と、貴方は……」

「神です」

「神！？結構綺麗な人だな……って死んだってどういつことだ？」

「この人間は死んだことを自覚していないタイプ……と。

「そのままです。ちょっと世界の揺らぎに巻き込まれて死んでしま

つたんですよ。まあ転生特典ありますので『気にしないでください』

「気にするなって気にするよー。」

「それで特典は何がよろしいですか？」

書類の数を見るに一人一人に時間をかけてるわけにはいかない。

「何でもいいの?」

「何でも構いませんが、自身の身の丈にあつた能力をオススメします」

「身の丈?ビリーハーツ?」

この転生者めんどい。

そう思いながらも聞かれたら答えなきやいけないので渋々ながら説明することに。

「貴方の魂の格……いわゆる力の器ですね。その器に入りきる能力じゃないと器そのものが碎け散るんですよ」

「…………つまり?」

「死にます。魂が碎け散り、消滅します」

「ちよつー?」

いいからひとつ決めてくれ。

「で、何がいいですか？」

「うーん……世界から先に決めていいか？」

「駄目です」

「何でーー？」

「世界によつて持ち込んではいけない能力がありますから。当然でしょー！」

世界には管理する神がいる。

転生者をそこに送るのは自由だが世界の理そのものを変えるような能力を与えるわけにもいかない。

「んー……じゃあ魔力を無限で」

「無理です」

「ーJの程度でーー？」

「貴方どんだけ自分の器大きいと過信してるんですか」

魔力無限なんて上級魔法使いでもありえませんよまったく。

「じゃあゼロ魔の4系統全部スクエアの才能で」

「む。それだとゼロ魔世界に行くことになりますが、いいですか？」

「ああ。構わない」

……美形にしてくれだのナ「トポつけてくれだの言わないな。
なら素直に転生させてあげればいいでしょう。」

「分かりました。他に何かありますか?」

「……名前を教えてくれないか?」

「名前はまあ結構ありますが 詩織と呼んでください」

「ああ。詩織、またな」

そう言つと最初の転生者は消えた。
「うやうやしい転生者ばかりだとやうやしいのだが
うやうやしいのチャンペーンだ。

「次です」

「はい」

次の人は…………なんだこいつは。

「ビリだ!!。アーリのアマ、リリがどこか知つてるか?」

「うやうやしいのチャンペーンだ。

「ここに立ちわせた。貴方は死にました」

「ああん? ふざけんなじゃねえぞ」

「死因は世界の搖りきです。うう」とで貴方には転生してもら

おうと思こます。何か特典は

「

「聞いてんのかオラア！」

Bが殴りかかってきた。
なので

「……」

無言で炎の魔法をBに放つ。

Bは断末魔をあげながら和室を転がり、最後に詩織に手を伸ばして消滅した。

「さて、次です」

まったく神相手に殴りかかるとかして馬鹿なんじやないですかね。

あれから世界の揺らぎが神の管理不届きということを説明に加えると5人中3人くらいが殴りかかってきたので消滅させつつ転生を進める。

転生させるよりそつちのほうが楽なものだ。

というか前世で善行を積んでない人物は全員記憶消して転生でいいじゃないかと思う。

「次です」

「はい」

そして現れたのは

「む？」「はゞ」だ

いかにもなスースをきた厳つい顔をした人物。

書類をみた限りでは最終戦争とやらで世界の滅亡を防いだ人物らしい。

その後英雄扱いされているので相当の器があるだろう。

「（中略）」

説明をし終えると転生者は少し考へた後、最初の転生者と同じように何でもいいのかと聞いてきた。

「魂の器に応じた能力なら何でも構いません。貴方は世界を救つたようなのでその分結構な無茶できますよ」

「そうか。なら全てを癒す力をくれ」

「……？構いませんが、理由を聞いても？」

「俺は人を殺すことでしか人を救えなかつた。だから来世では人を治す力が欲しい」

……こんな人ばかりだと転生課も神々が就職しようと思つん
ですけどねえ。

「ふむ……貴方程の人間なら、世界に対して有益でしょうね。いいでしよう。私の権限において全ての世界への転生を認めます」

そう言つて転生者の前に現れたのは世界の名前と詳細が書かれたモニター。

世界に有益な人物ならびこの世界に転生させてもいい。
だがこれまでにもたくさんいたが、ハーレムだの無双だの言い始める奴は大抵世界に対して有害だ。

即詩織の故郷、世界021に送つてやつた。

あそこは転生者は善悪と正しく認識されているので10歳になる前に上級魔法使いに見つかって殺されることだろう。

「いいがいい」

「…………戦争真っ只中の世界ですが、よろしいんですか？」

「構わない。それだけ救わなければならぬ人がいるといつことだ」

なにこの聖人。

怪しく思つたので記憶をリードしてみたが嘘を言つていないようだ。
むしろ前世のことを本気で悔いており、やり直したいという気持ち
が大きい。

「わかりました。サービスとして貴方が前世で残してきた家族に祝福を与えますね」

「…………助かる」

いやいやいや、今までの我慢な転生者に比べれば十分楽ですよ。

たまに、おーるふいくしょん? とやうを望む馬鹿な転生者がいるのだ。

そんな奴にはそれっぽい能力を与えて転生先で2・3年で死んでもらつた。

といふか魂の器が耐え切れず一回使つただけで死んだ。

その分この転生者は何回能力を使つても死なないだろひ。

「他に何か能力ありますか? まだまだ器には余裕ありますけど」

「…………ならば俺の愛用していた装備が欲しいな」

「本当に無欲ですね」

「何。俺の家族まで気にかけてくれるのだ。それ以上望むのは欲張りというものだ」

凄く危険な香りのする男だが、これは転生先でハーレム作つても仕方がないくらいいい男だ。

ふと書類の履歴を見てみると相当な…………… 9角関係
つて何だ。

これで一途に幼馴染のことを愛したらしい。

まあ神としてみてきたけど、ハーレムつて作るのは魅力があれば簡単だけど維持するのが難しいんだよね。絶対不満でるし。

「それでは、良い旅路を」

「ああ。世話になつたな」

「ふう。これで頼まれた仕事は終わりですね」

「はい戦神様。しかし転生課の人たちも戦神様に代理で担当をやらせるなんて……なんて不敬な奴らでしょうね」

「構いませんよ。そのおかげで今日は素晴らしい人物と出会えました」

「ああ、あの最後の男ですか。確かに素晴らしい色をした魂でしたね」

「はい。彼の経歴と先程の会話のログは消しましたよね?」

「ええ。彼に関する記録は全て抹消しました」

「……………神に到達するだけの下地を『えましたし、いざ
れは神へと至るでしょう。その時はもちろん」

「はい。勧誘すればいいのですね?私達のグループに

「ええそうですよ。まったく代理なんて仕事面倒だと思つてました
が、とんだ棚ボタです。」

疲れましたが、数十人の魂を消し去った甲斐がありました

「まあ殴りかかってくる人間を相手にするの面倒ですからね」

番外編・戦神シオリンの転生担当代理（後書き）

戦神シオリンの転生者に対する扱い。

文中に出てる世界〇二一といつのは詩織の魔王時代に生きた世界のことです。

他の作品へりこのチート転生者なんて『ハリ』のよひに殺されちゃいます。

まあ世界そのものの法則がチート転生に向いてない世界でもあるのですが。

あと実はAの転生でチートに4系統スクエアを選んだ時に世界を詩織が決めてますが、たかが魔法の才能を与えるだけなので他の世界でも本当は大丈夫です。

面倒なので世界決めて放り込んだだけです。まじシオリン外道。

3・5・1 シオコノニ変化（前書き）

結構勢いで書いた。反省は少ししている。

『はつちやけシオリン』

カンカンキンキリカンカン

「お姉ちゃん何してるの？」

今朝、庭から聞こえてくる謎の音に起きて覗いてみればそこには複数の機械を弄っている詩織の姿が。

電車っぽい何かやドリルのついた戦車に航空機、そして極め付けに謎のメカメカしいライオンが鎮座していた。

「これですか？全てを説明すれば、話は長くなるんですが……実は先日ガオ イガーというアニメの再放送を見たんです」

「うん」

「格好良くて作っちゃいました」

「短いよお姉ちゃんっ！？後そんな軽いノリで巨大ロボット作るのやめて！」

誰もが見惚れる笑顔を振りまいている詩織に心の底からツッコムクリス。

魔法の秘匿を人に押し付けるくせに自重しない姉に溜息を吐いてから急いで部屋を出て階段を下りる。

止めないとんでもない目に合つから急いで急いで急ぐ。

「お姉ちゃん待って！」

庭にたどり着いてみれば既にメカライオンの口に入ろうとしていたところだった。

「何ですかクリスちゃん」

「いや何ですかじゃないでしょー。ビッグセレーニーで合体しようと思つてるんでしょうー？」

「軽くなんかありませんよ。しっかり成功率は確保します」

ふとガオガイ一とのある台詞を思い出し、まさかと思い聞いてみる。

「…………ねえお姉ちゃん

「はい」

「合体の成功率、いくつ？」

「もちろん……60%ですー！」

「ちよっと待つたあああああっー！」

メカライオンの口に消えていく姉を全力で引きとめようとするも間に合わず、立ち上がったメカライオンを呆然と見やる。

「何、足りない分は勇氣で補えばいいんですよー！」

「お姉ちゃんちょっと冷静に考えてよーそれ本当に命かけていい確率じゃないでしょー?」

「さあ行きますよ行きますよ。簡単に許可が通るファイナルヒュージョン! 承認! ガガイガー!」

メカラライオンから響く声にクリスは慌てて家中に退避する。そしてドアを閉め、衝撃に耐えるべく身体を縮め、全力で障壁を張つた。

その直後に庭から連続で鳴り響く謎の爆発音。また近所の人達に「またレッドフィールド家か……」と言われることを覚悟しながら、クリスは溜息を吐いた。

『はつちやけ……てない冷酷シオリン

『ぐ、来るなー。

パン

『つあああああー。

『ジヨーーー。

『行くなマイケル！あれは罠だ！』

『しかし…』

ポリポリとポテトチップス一枚袋から取り、噛み碎く。隣ではクリスが寝転びながら画面に魅入っていた。

「ねえお姉ちゃん」

「何ですか？」

「確かにこの手足を撃つて動けない仲間をいたぶつて、敵が出てく
るのを待つスナイパーの戦術は正しいけどな」

「はー」

「お姉ちゃんならどうするの？やっぱり見捨てるの？」

「私レベルになるとスナイプなんて余裕で防御できますから助けますよ」

「いや、そういう訳なくて。助けられない場合どうするの？」

助けられない場合、か。

「撃ちます」

「何を？」

「動けない仲間を」

「…………え？」

「いたゞられぬへりこなら、思ひにサクシと殺してあげます」

「…………結構シビアなんだね」

「まあ困ります。手もありますが、仲間が拷問されるつて分かって放置はできませんからねえ」

『綾香との通話記録』

「もしもし?」

『詩織ちりやん詩織ちりやん詩織ちりやん…』

「…………何ですか? メイド服は着ませんよ。」

『そんな話してないよー。やっぱよ、やっぱいんだよー。』

「はあ。どうしたのですか?」

『あのね、つい……』

「…………?」

『つこお父さん倒しちゃつ 』

「 プツ、ツーシー……ペロロロロロ

「 はじもしもし」

『 詩織ちゃん切らな』でお願いだからー』

「 アホですか貴方。アホなんですよね。先生を倒すなんてそんな…
…面倒なことを」

『 だよね。あれで大人としてのプライドが高い人だから、田に見えて落ち込んでる』

「 それで何故私に電話を?」

『 もりやあキヤバ嬢の』とくお父さん』接待を 』

「 プツ、ツーシー……ペロロロロロ

「 お掛けになつた電話は、電波の届かなこと』あるか 』

『 声で分かるんだよ詩織ちゃん!…?』

『 黙りなさい。何婚約者を実父に売り飛ばしてるんですか』

『 でも詩織ちゃんのことと一緒に飯に入つているのせお父さんなんだよ…』

一
は
あ

「もちろん性的な意味でも気に入つて

「娘の婚約者に性的な意味でつてやばくないですか？」

『一九四九』

「今更気付いたんですか！？」

「父さん、お手紙を書くよ!」

「先程まで売り飛ばそうとしてましたよね？しかもさつきのセリフから察するに肉欲的な意味で売り飛ばそうとしてましたよね！？」

『氣のせい氣のせい。仕方ない。この前の詩織ちゃんの裸ワイシャツ奉仕プレイのビデオを』

「ちゅうとそこで待つてろ綾香。今すぐお仕置きだ」

え。し、詩織ちゃん?男モードというかどうモード入つてな

「vvv……安心した。さて、鞭とロウソクはどうだったかな」

『ひーーへやややややややめでよ詩織ちゃん！詩織ちゃん回復魔法使えるからって本当に無茶するんだからー！』

「 そ う だ な …… 確 か に S M は や り す ぎ か 」

『アーヴィング』

「認識阻害もあることだし、ペントプレイにするか」

『……………ペント…』

「裸の綾香にリードをつけて公園を散歩だ。なあに、見られたとしても公園を出たら既に見られてるさ」

『……………やああああああああ…』

「あ、リード発見。じゃあ、ここで待つてろよ綾香」

『……………』

『……………やあああああああ…』

3・5・1 シオリンニア変化（後書き）

後半は完全に作者の暴走です。

工口ゲンと/or/言われても否定できないくらい暴走しています。

まあ作者はSMとか露出プレイはあまり好きじゃ
ン。

羞恥に身悶える女の子はイイと思つたどね！

4・1 温度差がはげしい

以下の問いに答えなさい。

『西暦1492年、アメリカ大陸を発見した人物の名前をフルネームで答えなさい』

姫路瑞希の答え

『クリストファー・コロンブス』

教師のコメント

正解です卵の逸話で有名な偉人ですね。コロンブスという名前は有名ですが、意外とファーストネームが知られてないことが多いです。意地悪問題のつもりでしたが、姫路さんには関係なかつたようですね。よくできました。

清水美春の答え

『コロン・ブス』

教師のコメント

フルネームはわかりませんでしたか。コロンブスは一語でファミリーネームであって、コロン・ブスでフルネームというわけではありません。気を付けましょう。

詩織『レッドフィールドの答え

『アメリカ・ディスカバリー』

教師のコメント

アメリカがファーストネームの時点で疑問を持つてください。

島田美波の答え

『バス』

教師のコメント

過去の偉人になんてことを。

「面倒臭いです……」

「お姉ちゃん不登校なんてやめてー!」

もう朝だというのに布団から出ないで丸まっている詩織を説得するクリス。

かれこれ一週間は不登校生徒をしている。
まあ無断欠席しても文月学園は重要人物である詩織に文句など言つたりしないのだが。

「もういいんですよ。どうせ私なんて裸を見られるのがお約束のキヤラなんです」

「落ち込むのは分かるけど立ち上がりってー!」

「……どうせ私なんて」

「お姉ちゃん?」

「パーфュクトもハーモニーもないんですよ……ふふ、ふふふふふ
ふふ」

こいつあやべえ。

たまにテンションが高くなつておかしくなる姉だが、ここまでネガ
ネガしているのは初めてだ。

頑なに原因を話さうとしないのでビリ慰めていいか分からない。

「綾香さんはここに来れないし……ビリじみつ本當」

結局クリスが詩織を説得して登校できたのがそれから1時間過ぎだ
ったといつ。

一時間田の授業が終わるチャイムが鳴り響き、ちよつと良かつたと
詩織は自分の教室の障子を開ける。

「おはよー」「やれこれかず」

『…………え？』

「つてなんですか」の雰囲気

女の子の制服を着た詩織に驚きの声をあげる一同を無視して視線はまっすぐ異様な雰囲気を出している一人へと向かう。そこには明久と島田美波が付き合ってたての男女のよつよつお互いを意識しあっていた。

「……レッドフィールド……いや、詩織か。久しぶりだな」

「はい。お久しぶりです雄一君」

「どうが若干の恐怖が見えるのは氣のせいだろうか。

「ぬ？ 雄一。詩織とはいつたい誰の？」…………誰じや？

今気付いたのだらう秀吉が「チラを見て固まる。

「んー、血口紹介しておいたほうがいいですかね、これ

「やうじておけ」

「では。シホ＝レッドフィールド改め詩織＝レッドフィールドです」

『な、なんだつてえーつー！？』

Fクラスの面々が『胸が……』と勝手な評価をするやら『俺の嫁になつてくれ』といきなり求婚するだの『ふつーふつーふつー』と何故か筋トレでアピールをしだす。

「合宿所では……よくも人の裸を見たなこの野郎ども」

空気が一瞬で冷える。

詩織の周囲には氷柱が浮かんでおり、物理的な意味でも冷えていた
がそれをどうするのかと問い合わせたい。

「だつて、ウチはアキと付き合っているんだから！」

「畠返しつ！……あれ？」

島田美波が爆弾発言を言い放ち、嫉妬に狂ったFFF団の攻撃を予
見した明久が畠で防壁を作る。
が、今の教室は一角を除いて完全に冷え込んでいたので誰もそっち
を見ていない。

「……貴方達　私の下僕でいいですよね？」

『イエッサー！』

「私は女です」

『イエス・マム！』

他クラスの人間にも後で釘を刺しにいかなければ。

「そここの下僕A」

「え？俺は須川りょ

「

口答えしようとした瞬間風弾を撃ち込んで沈黙する下僕A。

「ヤ」の下僕B。朝ご飯まだですからパン買ってきてください」

「今校門しまつてから外に出れな」

名前で口答えすることはなかつたが他の「」とで口答えする下僕B。当然風弾で畳の上に転がしておいた。

「ヤ」の下僕C。分かつてますよね?」

「イエス・マム!」

良い笑顔を浮かべて下僕Cは教室から出て行つた。
走つていくあたり、ちゃんと立場を理解しているようだ。

「男なんかが存在するからお姉さまが惑わされるんですーっ!」

急に聞こえた声、清水美春は明久を睨みつけながら叫びをあげていた。

「」の豚野郎を始末します!そして美春が第一の吉井明久としてお姉さまと結ばれるのです!」

明久も必死になだめようとするも、清水美春は明久の皮を剥いで成り代わるとまでいい出す。
一体何があつたんだこいつ!」

「雄二君」

「あ、ああ。何だ？」

「あれ、何があつたんですか？」

聞いてみるとどうやら吉井明久は島田美波なる人物に今朝、キスをされたそうだ。

その話がこじれるにこじれて今に至るといつ。

「アホですね」

「助けてムツツリーーー！ 清水さんを止めて！」

そういうばムツツリーーーがせつきから静かだが、いつたいどうした

「…………今、消しゴムのカスで練り消しを作るのに忙しい」

「くそつー！ 練り消し作ってるフリをして飛び回る清水さんのスカートを田で追つてるムツツリーーーなんて大ツ嫌いだ！」

「…………ーー（ブンブン）」

「ああ、なるほど。
そういうことか。

「助けて詩織ー！」

「二度も人の裸を覗いておいて、よくもまあぬけぬけど……」

詩織の発言に言葉に詰まつた明久は視線を漂わせてからじばらくし

て清水美春を地力で抑える」としたらじ。

「とにかく豚野郎は消えるべきです。そして美春はお姉さまと結婚して、生まれてくる娘にお姉さまの『美波』から字を取つて、『美来』と名付けるのです!」

「待つんだ清水さん! 男が生めたらどうするんだ!」

「男なんかが生まれるのなら『波平』で十分です!」

「そんな、あんまりだよ!」

「二人ともーその前にウチと美春じや子供ができるないって気付きなさいよ!」

「んー、私の魔法を使えばできますよ? 女同士でも」

「本当ですか! ?」

いやまあ、綾香と女同士にも関わらず婚約者なのってその辺が理由ですし。

「まあ男か女かの片方がいなくなつた時に子孫を残す為の秘伝ですけどね」

「それを美春に是非!」

「ちよつヒシオ! 教えないでよー絶対教えないでよー!」

そもそも魔法なんだから教えても習得できない可能性のほうが高い。

見たところ清水美春の魔力量は平均より若干高いものの、才能は平均そのものだ。

大雑把に言えば召喚獣の動かし方が上手ければ上手いほど魔法の扱いは上手いのだが 清水美春の扱いは平均そのもの。そういう意味で言えばおそらく学年では雄一が一番才能あるだろ？。

「俺が？」

「ええ。私の下で5年も習えば町一つを1時間で壊滅できるくらいになりますよ」

「物騒だなおい」

4・1 溫度差がはげしい（後書き）

意外と雄一が魔法の才能あり設定。
まあ魔法教えるイベントはないんですけどね、ある事情から。

4・2 女王

今この授業をもしクリスが見ていたならば、唖然としただろう。
そしてこのつ書つたに違いない。

「お姉ちゃんがぐれた……」

と。

西村先生のよる英語の授業中、普通なら誰もが制裁を恐れて真面目に取り組む授業だがこの時は違つた。

「紅茶」

「はいただいまー」

「お茶請けはどうしたんですか?..」

「我々の手持ちはポテチだけで

「……へえ」

「今すぐ買いに行って来ます!」

暴君がいた。

詩織と卓袱台を共有している姫路瑞希がひたすら居心地悪そうしているのが印象的である。

堂々と教室を出て行った生徒に西村先生は視線を送るも何もしない。さつきとレッドフィールドもストレスが溜まってるのだろうとスルーしたのだ。

「不味いです」

「は？」

「紅茶。「ゴールデンルールも知らないんですか？」

「ゴールデンボール？」

「…………握りつぶされたいんですね？」

「（ブンブン）」

絶対零度だった視線がもはや魔眼となりつつある。

その空氣の中、隣で明久と島田美波がイチャついている。

姫路瑞希は「どうしてこうなったんですか」と頭を抱えて身を小さくしていた。

「もういいです。」「コア買つてきてください。」「コアなら貴方みたいに愚鈍でどうしようもない屑でも入れられるでしょうから」

「イエスマム！」

罵倒に対しても文句を言わない。

詩織の周囲に転がっているFクラス男子半分の屍が彼らにそれを悟

らせていた。

「…………レッドフィールド」

「何でしじう西村先生」

「そろそろ機嫌を直せんのか?」

「西村先生は年頃の女性の肌がそんなに安いと?」

「むう」

そう言われては何も言い返せない。

あまりもの光景に見かねたので助け舟を出してみたのだが、意味が
なかつたらしい。

普段が真面目なだけに無理矢理やめさせるのは気が進まないのだ。

「ところで西村先生」

「なんだ」

「清水美春、大丈夫なんですか?」

実は先程清水美春が授業中にも関わらず乱入してきたのだ。

なんか明久と島田美波のイチャつき具合が初々しい恋人レベルに達したのでついでに怒りゲームもマックスに達したFクラスの面々と共に明久を攻撃していた。

そこを西村先生が授業中だからと場を鎮めたのだが、どうも清水美春は納得していないように見えた。

「三角関係で話が拗れると結構酷いことになるんですよ？」

「まるで体験したかのよつた口ぶりだな」

「…………」

「すまなかつた」

悲痛そうな顔をした詩織の雰囲気に耐え切れず謝る西村先生。

「吉井だし大丈夫だらう」

「それは明久君なら大丈夫だらう、か明久君だし大丈夫だらう、の
どつちなんですか？正確には」

「え？ それどう違うの詩織？」

「『なら』、だと明久君ならこれくらいの争いは自分で何とかする
だらうという信用になります。」

逆に『だし』、なら明久君なんてどつなつてもいいだらうといふ
無関心になります」

「はは。鉄人だつて先生なんだから当然『なら』じゃ」

「『だし』だ」

「畜生つーそういうと思つてたよー」

休み時間、島田美波な姫路瑞希を連れて教室を出て行き女王様気分を味わっていた詩織はクラスの隅で話し合いをしていた雄一に呼ばれた。

「何でじょう雄一君」

「実はだな……」

急に呼ばれたことに不思議に思つてゐるどどつやら清水美春が所属してゐるクラスが試召戦争の準備をしてゐるらしい。

それも合宿で覗きの主導をしていたFクラスを制裁する名目でだ。だがDクラスの目的はともかくそなつた引き金は全て清水美春にあるらしい。

ようするに明久が愛しの美波と仲よさひつで眞に入らんといつゝことだろう。

「で、何か問題あるんですか?」

「む?大問題だと思うのじゃが」

「…………//カン箱に戻つてしまつ」

「はい?」

「あの、雄一君」

「何だ」

「Jの卓袱台つてクラスの出し物で稼いだ金を使って買ったものなんですね?」

「ああ」

「つまりこの卓袱台はFクラス生徒の私物ですよね。いくら学校側でも取り上げることは不可能では?」

「」「…………」「…………」「…………」「…………」

雄一以外の全員が沈黙する。
雄一以外?

「それでも駄目だ」

「…………理由を聞いてもいいですか?」

「俺達の最終目標はAクラスの設備だ。3ヶ月の空白期間は痛い」

「…………思うところはありますが、いいでしょ。それで私に何をしてほしいんですか?」

「翔子と秘密裏に契約をしてきてほしい。具体的にはDクラスがもしFクラスに攻め込んだらAクラスがDクラスを攻撃すると」

「雄一君。分かってて言ってますよね?」

「…………やはり駄目か」

「当然です。私は翔子ちゃんの親友です。代表がFクラスに試召戦争で肩入れしているなんて良い結果を招きません」

「詩織、そこを何とかお願ひできないかな」

明久が本当に申し訳なさそうに言つた

「すいません。私は雄一君や明久君程クラスの設備にこだわってないんですよ。だいたい〇クラスくらいなら私一人でじゅうぶ」

そういえば一週間近く部屋に引き籠もつてたから補充テスト受けてないつけ。

「…………まあ何にせよ、卓袱台は私物です。ミカン箱にならないので私にとつて今回の試召戦争はどうでもいいんですよ」

「やうか

元々雄一も駄目で元々だつたようであまりつゝ「んでもない。

「そんなことより明久君」

「ん?」

「三角関係は本当に舐めないほつがいいですよ。NTRとか余裕ですか」

「ねぬていー……？」

「三角関係だと?そういうれば詩織。昔言つてたお前の婚約者つてい

「ハジマハシタリハ」

「おひさ、へん?」

「…………なんでもない」

4・2 女王（後書き）

女王シオリン降臨。

クリスの感想の通りグレてるだけです。

そのうち元に戻ります。

まあ今回でFクラスのサブメンバー達との上下関係が出来上がった感がありますが。

作者はNTRが大嫌いです。

ドロドロしたのはちょっと……と思つてゐる人なので、あからさまなのは嫌いなのです。

そしてシオリンが実は……？なフラグをたてておきました。

4巻読んだ時から思つてたんですけど、この時点でのFクラスの卓袱台つて売り上げで買った私物ですよね？

なのにクラスの設備が下がる云々つて話、正直原作者のミスだと思うんですよ。

雄二だつて卓袱台を買った本人ですからそれに気付かないはずありませんし。

4・3 ホント、調理室は地獄だぜ

以下の状況を想像して質問に答えなさい

『あなたは大好きな彼と二人きりで旅行に行くことになりました。ところが飛行機に乗つていざ出発、といつとひりで忘れ物に気が付きます。

さて、あなたは一体何を忘れたでしょう?』

姫路瑞希の答え

『頭痛薬や胃薬などの医療品』

教師のコメント

これは『あなたが好きな人に何を求めているか』についてわかる心理テストです。忘れ物はあなたに欠けているものを表し、忘れても気が付かず出発してしまつたということは、一緒にいる彼がそれを補つてくれるとあなたが考えているからなのです。どうやら姫路さんは好きな人に安らぎを求めているようですね。

詩織=レッドフィールドの答え

『武器』

霧島翔子の答え

『手錠』

教師のコメント

忘れ物の前に、持つて行こうとする時点で間違っています

工藤愛子の答え

『下着を穿はしていくこと』

教師のコメント

あなたは好きな人に何を求めているのですか

あれから明久達は何やら「チャチャしつつ、昼休みになると屋上へと向かつていった。

台本がどうのとか言っていたが……何のことだろうか。

「美味しそうだねそれ」

「食べますか?」

「うん。……だけど惜しいなあ本当。キミが男の子だったら食べちゃいたいんだけど」

Fクラス主要メンバーが緊迫した雰囲気を曝しだす一方、詩織はAクラスで優雅にお弁当を食べていた。

工藤愛子なる人物と木下優子という人物達と仲良くなり、翔子と彼

彼らとの4人で昼食をとっていた。

「やつにえはそつちはいこの?」

「何の話ですか? 優子ちゃん」

「Eクラスのこと。DクラスだけじゃなくてBクラスからも狙われてるみたいだけど、詩織は大丈夫なの?」

「いいんじゃないですか?」

「投げやりだね……」

まああれで雄一は中々の策士だ。

DクラスとBクラスを試合戦争で下したその実力は伊達ではないだろ?」

「そういうえば翔子ちゃん。あれから雄一君とは進展しましたか?」

「…………まだ」

本当に雄一は翔子の何が不満なのだろうか。
こんなに可愛いのに。

「そういうえばキスがどうのとか雄一君が愚痴を言つてきたんですけど、何したんです?」

「…………寝てる間にキス」

「はあ」

「じょりとしたけど、できなかつた」

何だよ今のタメとつっこみたいが翔子のやるひとつかつこんでいる時間がいくらあっても足りない。

「じゃあファーストキスはまだなんだね」

「もうこいつ愛子はどうなのよ？」

「ボク？そりゃあ……数え切れない程 妄想でならあるよ」

でしょうねえ。

愛子は口では結構過激なこと言つが実は男性経験皆無だ。
直接聞いたことはないが、明らかに男慣れした感じではないので間違つていないと思つ。

「私は興味ないわね。詩織はどうなのよ」

ふと優子に聞かれてびつ答えたものかと考える。

「ふむ。既に一度すませてあります」

「ファーストで一度つて何！？」

「詩織もボクと同じで妄想で？」

「いえ、リアルです」

前世と現世でです。

「…………最初のほうは、どんな？」

「そういうですね……」

本当の意味でのファーストキスは前世の…………どれだけ。
確か……

「つこムラッときて暴れる幼馴染の唇を無理矢理」「

「妄想だよね！？それ妄想なんだよね！？ボク警察呼びたくないよ
？」

「まあ誤解と嫉妬で泣きながら暴れる幼馴染を押さえつけてですが。
その後はベッド直行です」

「…………野らしい」

そりやあ前世は男ですし。

「さすがに聖剣で左手を細切れにされた時は死を覚悟しましたけど
ね」

「…………詩織、妄想だよねそれ？」

愛子が汗をたらつと流しながら質問していたのが印象的だった。

弁当を片付けた詩織は翔子達に別れを告げて一人校舎を散歩していた。

お昼御飯は普段はFクラスの教室で食べるのだが今日は翔子に呼ばれたので行ったのだ。

曰く料理の出来を見て欲しかつたらしい。

詩織としては前回見たときより上達しているのが分かつたので、このままいけば雄一も墮ちるだらうと言つておいた。

「…………？」

廊下を歩いていると不審な一人がどこかの部屋を覗いていることに気付く。

不審な一人といふかもろ明久と雄一だった。

「どうかしたんですか？」

「む、詩織か」

「しししし詩織！解毒の魔法とか持つてない！？」

いきなりアンチポイズンな魔法を要求された。

囁き声だが、いつたいどうしたんだろう。

「何を言つてはいるのか分かりませんが、毒といつても色んな種類があるんですよ？例えば痺れ毒の類の解毒魔法をとある魔法薬にかけたら術式が干渉しあつて周囲の魔力を根こそぎ つて」

『えーっと……まずは、ココアの粉末をローンポタージュで溶いて』

「…………」「…………」

3人が扉の前で沈黙する。

「こ」は調理室で、中では姫野瑞希が何やら不可思議なものを作つているようだ。

「ねえ雄二ー！彼女は何を作つているのー？いきなりゼリーから遠く離れた何かになつているような気がするんだけどー！」

「静かにしろ明久。姫路に見つかるぞ」

「…………」

ガラッと音をたてて開けた扉を潜る。
するとそこには驚いた顔をした姫野瑞希が一つの食材を手にしていた。

「レッドフィールドちゃん？」

「詩織でいいですよ瑞希ちゃん。で、それは何なんですか？」

「あ、はい詩織ちゃん。オレンジとネギのどっちを入れると明久君が喜んでくれるか迷つて……」

「…………何を、作るんですか？」

「え？ゼリーですけど」

見て分からぬの？とでも言つたげにボウルの中身を見せる。
既にココアの茶色とポタージュの黄色であんまりな色になつていた。

「…………ネギオススメです」

「やうなんですか?」

「はい。明久君はネギが大好きです。いつかお金持になつたら一日三食ネギ料理を食べるんだと語つていましたから」

もちろん嘘つぱちである。

覗きの主犯である明久なんて謎の料理を食つてしまえばいいんだ。ちなみに扉の外から詩織達を止めようとする明久とそれを抑える雄一がいた。

「じゃあふんだんに使いましょ。あとは、隠し味にタバ

『これ以上は聞くな明久。食えなくなるぞ』

『待つて!せめて最後に入れられたのが『タバコ』なのか『タバスコ』なのかだけでも確認させてよ!』

とこうような声が聞こえたが詩織は結界で完全に調理室と外との音を遮断した。

「スコを使おうと思つんです。これで喜んでもらえますよね!」

(明久君。普通に考えて瑞希ちゃんは高校生なんだからタバコなんて持つてるはずないでしょ)

そういうえば雄一もなんでそれに関して弁明しなかつたんだろう。まるで瑞希が普段から危険物を手にしていてそれを材料に料理を作つてゐみたいじゃないか。

そんな非現実的な　と詩織は思つもの、　詩織こそ非現実な代表
だということを忘れていた。

4・3 ホント、調理室は地獄だぜ（後書き）

屋上についていつて皆白の演技に詩織を加えようかなと思つたんですけど、今のシオリンはそんな~~お~~居に付き合つほど明久に対しても嫌が良くなので却下しました。

そんなわけでBクラスの怪しい動きと、屋上での偽装恋人イベントはマルマル飛ばされました。

シオリンは瑞希の料理の恐ろしさを知りません。
せいぜい材料を選ぶセンスが致命的になくて不味い料理を作るくらいの認識です。

そもそも不定期更新になるかもしけぬ。

4・4 ゼリーの行方、そしてFクラスの行方

「あ。家の決まりですか」

「はい。家訓で学生時代に一度は男装すべきだと」

呼吸するかの如くあまりにも堂々とした詩織の嘘は変な説得力があった。

この場限りしか誤魔化せず、家に帰つてからよくよく考えればどう考へてもおかしいのだがこの場を凌げば勝ちなのだ。

何に勝つのは知らないが。

「とにかく瑞希ちゃん。この豚肉はどうしますか？生ですけど入れます？」 作つてるのはゼリーです

「そうですね……男の子なのでやっぱりお肉のほうがいいですね」

「それならコーラも一緒にいれましょ。何かお肉が柔らかくなるとか聞いたような聞いてないよつな……まあどっちでもいいですね」

どす黒い色になり始めたボウルの中身にトプトプとコーラを投入する。

ショワショワと炭酸がはじける音がするが、ボウルの中身とあわせればそれはまさに地獄の釜の音。

「後は……何いれたらいいと思いますか？」

「後は固まるようにゼラチンを投入……固める時間が面倒なので魔

法でポイポイと凝縮して固めちゃいましょうか

「便利ですね魔法」

「ちちんぷいぷい」

あえてふざけた詠唱でボウルの中身を凝縮させる。
デーティーとバックにつきそうなそのゼリーは、某テイルズなグミの
如く食べば即死効果をもたらすだろ？

「少し多くなりましたね……これビビりますか？」

「私がいくつかもらいましょう。後はFクラスの数人にあげますか」

「はい」

「…………とりあえず家に帰つたら綾香に食べさせてみますか」

「何か言いました？」

「いえ、何も」

ワイワイとゼリーカップと氷を入れた袋を持って瑞希と共にFクラスへ向かう途中、雄一と明久がいることに気付く。
今日はよく一人に会うなと思い声をかけよう

「気にするな。姫路の料理を選んだのは俺の趣味だ」

「…………」

ひょっとして雄一は自殺志願者なのだろうか。

「え？ 坂本君、私の料理が好きなんですか？」

ああ、やつちやつたと天を仰ぐもののどのみち雄一にも渡す予定だったでのそのまま話を進めることが。

「ひ、ひめ、じ……？」

「良かつた。そう言つてもうれると嬉しいです。けど、霧島さんこ聞かれたら怒られちゃいますよ？」

「私は翔子ちゃんの味方ですけど、今回は報告しないでおきましょう。…………しなくともお仕置きになりますし」

「は、はは、は」

頬を引き攣らせて無理矢理笑う雄一に明久が一言。

「ウハルカム（グツ）」

「てめえ、そのムカつくほど爽やかな笑顔はなんだ……！」

「本当に仲がいいですねお二人ともー」

詩織の棒読みに雄一が忌々しげに明久と交互に睨みつける。
そして瑞希は十分に量を余させているゼリー袋を見て

「坂本君の分もありますので、良かつたらどうぞ」

「…………。そ、そうか。すまないな。後で腹が減った時にでもも
らおう」

「ほ、僕もそりするよ。姫路さんありがとうございました。そして詩織は滅びれ
ばいいんだ……」

「いいえ。これくらいお安い御用です。あと最後何か言いました?」

「いや、なんでもないよ」

明久君……その態度はよろしくないんじゃないの?
ちょっと立場とこっちのものを分からせなければいけないようだ。

「んじゃ、行くぞ明久。ムツツリーーー」

「了解」

「…………わかった」

「御三方、待つてください」

「…………」

詩織のオーラが黒くなつたのを感じたと同時に逃げようとした3人
を引き止める。

「ゼリーが3人では食べれないほどあると思いますが……くれぐれも他の人に全部食べさせないよつこしてくくださいね」

「あ、ああ。 もううんだ」

「ちなみに呪いをかけましたので、今日の夕食前までに最低一つは食べないと……」

「 「 「」「」」

「クスッ。 行きましたようか瑞希ちゃん」

「あ、はいわかりました」

「 「 「ちよつと待て!…いつたい何の呪いをかけたんだ!…?」「」」

あれから戦々恐々としている雄一達を「一見ながら週」こと数時間。

休み時間の合間合間にE・D・Cクラスと順に男子達に立場を分かれるために周っていた。

Bクラスへは放課後になるが……そこまでやる気はないので明日でもいいだろう。

ちなみにAクラスへは既に昼休みに釘を刺し終わっている。

「ん？」

苦手な日本史の教科書をじっと見詰めていてふと誰かが出て行く音に振り向くとそこには雄一を連れて出て行く翔子の姿が。

いつたいどうしたんだろうか。

やけに慌てた様子だつたが。

「詩織」

「そ……なんですか明久君？」

「ちょっとといいかな？」

さんをつけろよこの「助野郎」といかけた詩織だが、真剣な顔をしている明久に何かを感じ取つて態度を改める。

「実は……」

明久が今までの経緯を話し、秀吉とマッチリーーがそれに付け足すようにフォローする。

どうやらBクラスが攻めてこようとしているので準備時間を設けるためにもDクラスを激昂させて試召戦争を起させようとしているらしい。

その為にも清水美春を怒らせるために明久は島田美波と付き合つたりをしていたという。

そしてDクラスとの話し合いの場を設けたはいいがBクラスの陰謀でFクラスの頭脳である雄一が帰つてしまつた。

「…………しかし気に入りませんね」

「へ？」

「人の不幸を捏造して噂を流すなんて、心優しい翔子ちゃんを馬鹿にしています」「

またお前が根元。立場を分からせる必要が一番あるのはどうやらBクラスだったようだ。しかも

「そして貴方もです明久君」

「僕？」

「…………自覚なしだですか。まあいいです。どうせ思い知ることになるでしょだから」

正直な話、今回の明久の行動が詩織は気に入らなかった。
女の子がキスまでしたというのにやつたのは『付き合ってるフリ』なんて相手を馬鹿にしたことだ。

誤解で云々はまあ仕方ないとしても明久は島田美波に大して誠実に答えるべきだつた。

誤解とはいえキスまでしてくれた女の子にそんなことを要求する明久が気に入らない。

「…………今日は騙された雄二君に変わつて交渉の場に同席してあげます。Dクラスを怒らせればいいんですね？」

「うむ。まああまり乗り気ではないみたいじゃから、程々協力してくれれば嬉しいのじや」

4・4 ゼリーの行方、そしてFクラスの行方（後書き）

今回シオリンが明久に対してちょっと厳しめです。

第三者から見たらこの明久の行動って結構最低だと思うんですよ。
まあ本人は真面目なんんですけど。

お茶を濁す超番外編を書こうかなと思って活動記録のほうでアンケート出してみましたが誰も見ないだろ？からこいつちに書いておくことに。

f a t eみたいに何か詩織に入して欲しい作品があれば感想でも
らえれば書くかもしれません。

まあ既にI Sは書いちゃったんですが。え？原作読んだことありますよ？

あとこれもアンケートかもしれないけど、10万PV記念何がいいですかね？

詩織の前世話か幼少時の話かクリス幼少時視点か一章と二章の間で省略したバトル部分を書こうか迷ってるんですが。

他にも「こんなの書けよ」とかあつたら感想もらえると書くかもしれません。たぶんですが。

4・5 交渉と見せかけてフルボッコ会（前書き）

今回殆ど原作通りです。

ちらちらっと詩織の考察が入ってる程度なので、原作知ってる人とかは読み飛ばしても実は平気な回だつたりします。

あえて言うなら詩織が明久をどう思っているか、くらいでしょう書かれているのは。

4・5 交渉と見せかけてフルボッコ会

放課後、空き教室の前に立つ詩織の隣には明久と秀吉と島田美波がいた。

Dクラスとの交渉の場 相手を上手く怒らせて試合戦争に持ち込ませなければいけない。

Fクラスは試合戦争を起こす挑戦権を失っているのでDクラスに挑戦権を使わせようということだ。

「待たせたね」

明久が空き教室の扉を開けると中にはDクラス代表の平賀と清水美春が椅子に座つて待っていた。

というか明久、ひょっとしてそれで挑発してゐるつもりなのか。

まさか相手より遅く着いたことに形だけの謝罪することが挑発に繋がるとでも？

確かに時間にうるさい相手ならそれも有効かもしれないが、そんな人物は普通交渉の場につかない。

つかせてもらえない、が正しいのだが。

「お姉さまっ！お会いしたかつたですっ！」

「美春！？ちょっと、暑苦しいからひつつかないでよっ！」

ふむ。

ここで交渉の場でありながら とか繋げて罵倒してもいいが、それがFクラスそのものを叩き潰す云々になるかは微妙だ。

というか清水美春は現在の状況ではまず間違いない聞くかいし、この前上下関係を分からせたばかりの平賀も大して反応はないだろう。

「とにかく離れなさいっ！」

明久が目の前にいるにも関わらず猛烈なアピールをしている清水美春を強引に引き剥がす島田美波。

先程から一度も明久を罵倒していないし、存在すら忘れているような感じがする。

これは……

（なるほど。もう吉井明久は眼中にない、ということですか）

これはもう無理。

清水美春を怒らせたところで宣戦布告まで行く」ではない。
そう悟つた詩織は目線で何かを訴えている明久から視線を逸らし、興味なさそうに窓の外を見始めた。

「清水よ、そこまでにしておくのじゃな。島田は明久の恋人じゃ。むやみやたらと手を出すでない」

（んー……秀吉君。そういう忠告は明久君が言つべきであつて……自分から島田美波と明久君は恋人関係じゃないって言つてるようなもんですよ？）

一見すれば明久が言い出せないことを見かねた秀吉が変わりに言ったと取れるが、それはありえない。
何故なら島田美波がそのことを言い出さないからだ。

もし本当に明久と島田美波が恋人ならば島田美波はこゝぞとばかりにその関係をアピールして清水美春を引き剥がすだろう。
だからこそ一人が恋人だというのはありえない。

もしここに雄一がいたならば秀吉を連れてきたことに頭を抱えてい

「何をふざけたことを言つてゐるのです？お姉さまとやこの豚野郎の間にはなんの関係もない」とくら、お姉さまの顔を見れば一目瞭然です」

清水美春が島田美波を本氣で好きならばそれは当然の結果だ。好きな人だからこそ分かることがあるということだらう。

「それは……」

「だいたい、やこの豚野郎がお姉さまに相応しいとは思えません」

確かに今回はちょっとどうかと思う行動が目立つ明久だが、それまさすがに早計ではないかと詩織は思った。

明久は馬鹿だ。

馬鹿すぎてこいつ本当に将来どうすんだと不安になるくらい馬鹿だ。しかし馬鹿だからこそ、明久はここまで愚直に進めるのだ。ただの馬鹿なら救いようがないが、こいつた馬鹿はそれを長所とするときすらある。

もしも明久に恋人が出来ればどこまでもその人物を真っ直ぐ愛することができるだろう。

それくらい素直な馬鹿なのだ。

「そりや、僕は勉強も出来ないし部活もやってないけど」

そういう問題じゃない。

明久の馬鹿は確かに長所となる時もあるが、短所となる時もあるのだ。

今がまさにそれだ。

「勉強？部活？違いますね。美春が言いたいのはそんなことじゃありません。それ以前の問題です」

そう、恋愛においてそれは『言い訳』にすぎない。

「美春は前々から一人の関係を見てきましたが、その豚野郎の態度は最悪です。同じクラスの姫路さんに対する態度とお姉さまへの態度があまりに違います」

確かにそうだが、それは違う。

明久はただ一人を同じに扱っていないだけだ。

馬鹿だから明久はどうちも大事と思っているに決まっている。

だが詩織は決して変わって弁明する気はない。

それを詩織が言ったところで何になるのだ。

これは明久が撒いた種であり、清水美春のよつに端から見れば確かにそれは区別していたのだから。

「姫路さんには優しく気を遣い、まるでお姫様を相手にするかのような態度。それに大してお姉さまへの態度はどうですか？全く気遣いもなければ、異性に対する最低限の優しさすら見れないじゃないですか？」

「…………それは、まあ」

「詩織！？」

まさかの味方からの追撃に秀吉が驚きの声をあげる。

「はつきり言えばその豚野郎はお姉さまの魅力に気付いていない

どこのか、何の氣も遣わずに男友達に接するような態度でお姉さんに接している大馬鹿野郎です。そんな男がお姉さまに相応しいかどうかなんて、容姿や学力以前の問題です。それに

「

一回言葉をくぎり、止めを刺すかのように清水美春は言った。

「演技とは言え『好き』とまで言つてくれたお姉さまを放つて姫路さんを追うなんて、普通は考えられません。もしかして、お姉さまのことを男だとでも思つてているんじゃないですか？」

「 つー！」

島田美波は清水美春の言葉に耐え切れず出て行つた。
といふか明久よ、そんなことまでしてたのか。

「 美波！？」

「追つてどうするんです？また男友達に接するように乱暴な言葉でもかけるんですか？そつやつて更にお姉さまを傷つけるんですか？」

そうでもない。

今明久が島田美波に追いつき、本氣で慰めたとしたら関係はどう転ぶか分からぬ。

だが分かることは 明久にとつて島田美波は本当に大切だということだ。

馬鹿だからそれ以上のことは本人にしか分からぬが、それだけは確實だ。

「明久。島田はワシと詩織が追おう。今お主が行つても逆効果じゃ」

「お断りします。私には彼女に投げかける言葉がありません」

「…………そりゃな。では行つてくる」

あまり接点のない詩織が慰めても惨めになるだけだろう。

「…………よくわからないけど、俺ももう行つていいんだよな？こんなんじや謝罪どころの話じゃなさそうだからな」

そして平賀は気まずそうに秀吉に続いて空き教室から出て行つた。
むしろここからが本番だと詩織は思つていたのだが、代表である彼
が出て行つたのならばお開きが妥当か？

そう思案していると清水美春が明久にトドメを刺すべく宣言した。

「こJの話じ合いに何の目的があつたのかは知りませんが、美春はも
う貴方を恋敵として認めるようなことはありません。お姉さまの魅
力に気付かず、同性として扱うだけの豚野郎に嫉妬するなんて、時
間の無駄ですから。……お姉さまの魅力がわかるのは美春だけです」

ああ、終わりですか。

詩織は一人そう呟いて清水美春と共に席を立つた。

この空き教室に入った時から感じたように、やはり無駄だったの
だ。

それでもこJに留まつていたのは明久が何かをするんじゃないかと
いう期待からだつた。

この馬鹿なら青臭い青春ドラマみたいなセリフを吐いて上手いこと
挑発してくれるんじやないだろうかと思つたのだ。
だが詩織の想定は外れたようだ。

つまり明久は本当に島田美波に異性を感じていない。

「島田美波も哀れですね……」

清水美春も同意見なのかそのセリフに反応し、何かを言いかけたが
結局は口を閉ざした。

しかし

「ちょっと待って、清水さん」

詩織が扉から出た直後、明久の声が聞こえた。
この状況において何を言つつもりだ。

「…………まだ何かあるなら、私も聞きましょうか」

「詩織？」

「…………」

まあ、失望させないで欲しいですね。

4・5 交渉と見せかけてフルボッコ会（後書き）

ヒーローはピンチから盛り返すものです。

前話で詩織が思っていたことは半分くらい清水美春が言つてくれました。

さすがに男云々とまでは思つてませんが、なんでこの扱いで島田美波が明久のことを好きなのか前々から疑問には思つています。

「本当に何があつたんですかこの馬鹿は」つて感じで。

島田美波が好きな人ならば、清水美春のように思つるのは当然のことでしょう。

あれ？それを考えたら清水美春が明久にしてることって当然のよう

に思えてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2976w/>

バカとテストと前世魔王と

2011年10月10日01時00分発行